宮城県岩沼市文化財調査報告書第 29 集

原遺跡第６次調査概要報告書

2022 年３月

岩 沼 市 教 育 委 員 会

原遺跡第６次調査概要報告書

例　　言

1　本書は、宮城県岩沼市南長谷字北上に所在する原遺跡の第６次調査概要報告書である。

2　本調査は、原遺跡の範囲・内容確認のために実施したものである。

3　現地調査は、岩沼市教育委員会生涯学習課が令和３年（2021）７月６日～ 12 月 24 日にかけて実施した。調査面積は 755 ㎡である。

4　調査に際しては地権者である鈴木 清一氏、大泉 正一氏、耕作者である鈴木 栄一氏、農事組合法人原生産組合、及び近隣住民の方々からご理解・ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

5　出土品整理、及び報告書作成については、令和３年（2021）12 月 25 日から令和４年２月 20 日にかけて、岩沼市文化財整理室にて行なった。

6　本書の遺構ならびにトレンチ番号は、現地調査時に付したものを使用した。また今次調査で検出した遺構の略号は以下のとおりである。

ＳＤ：溝跡、ＳＩ：竪穴建物跡、ＳＫ：土坑、Ｐ：柱穴跡

7　本書の執筆・編集は、生涯学習課内での協議の上、川又 隆央・武田 裕光・熊谷 篤が下記のとおり分担執筆した。なお、編集は川又が行った。

第Ⅰ章、第Ⅲ章１・２（遺構）熊谷、第Ⅱ章、第Ⅲ章2（遺物）、第Ⅴ章 武田、第Ⅳ章 川又

8　発掘調査の実施、及び整理作業にあたっては次の諸氏・機関よりご協力・ご教示を賜った。記して感謝申し上げます（五十音順・敬称略）。

相沢 清利、安達 訓仁、阿部 明彦、石本 弘、植松 暁彦、及川 健作、近江 俊秀、大泉 和弘、太田 昭夫、大橋 泰夫、小泉 博明、斎野 裕彦、佐久間 光平、佐藤 敏幸、佐藤 憲幸、白鳥 良一、鈴木 朋子、須藤 英之、高橋 栄一、高橋 透、千葉 宗久、徳竹 亜紀子、長島 榮一、永田 英明、新妻 茂雄、丹羽 茂、初鹿野 博之、藤木 海、村上 裕次、村田 晃一、矢内 雅之、吉野 武、渡辺 清子

文化庁、宮城県教育庁文化財課、多賀城跡調査研究所、東北歴史博物館、
原遺跡調査検討委員会

9　本報告書における遺構・遺構挿図等の指示は以下のとおりである。

(1) 遺構の用語、及び略称については、文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき』に準拠した。

(2) 遺構実測図の水糸高は海抜を示す。

(3) 縮尺は図に示すとおりである。

(4) 土層、及び土器の色調は「新版標準土色帖」（小川・竹原：1973）に拠る。

10　第６次調査の成果については、令和３年度宮城県遺跡調査成果発表会要旨、ならびに第 48 回古代城柵官衙検討会資料集で内容の一部を報告しているが、これと本書の内容が異なる場合は本書が優先する。

11　発掘調査の記録や整理した資料、出土遺物は岩沼市教育委員会が保管している。

目　　次

例　言
調査要項
第Ⅰ章　調査に至る経緯・経過と調査方法 …… 1
　1．調査に至る経緯と経過 …… 1
　2．調査方法 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 3
　1．地理的環境 …… 3
　2．歴史的環境 …… 4
第Ⅲ章　調査成果 …… 7
　1．基本土層 …… 7
　2．発見された遺構と遺物 …… 7
　　a．竪穴建物跡 …… 7
　　b．井戸跡 …… 29
　　c．大型土坑 …… 30
　　d．溝跡 …… 33
　　e．その他の遺構出土遺物 …… 44
　　f．遺構外出土遺物 …… 44
第Ⅳ章　考察 …… 47
　1．遺物について …… 47
　2．遺構の変遷について …… 49
第Ⅴ章　総括 …… 51

引用参考文献 …… 52

写真図版 …… 53

挿 図 目 次

第１図　原遺跡第６次調査地の位置・・・・・ 1
第２図　第６次調査区位置図 ・・・・・・・・・ 2
第３図　岩沼市の位置と地形分類・・・・・・ 3
第４図　岩沼市域の遺跡分布図 ・・・・・・・・ 5
第５図　第６次調査基本層序 ・・・・・・・・・ 8
第６図　原遺跡６次調査　Ⅰ区全体図・・・・ 9
第７図　原遺跡６次調査　Ⅱ区全体図・・・・ 10
第８図　SI21003 平面・断面図 ・・・・・・・・ 11
第９図　SI21003 出土遺物 ・・・・・・・・・・ 12
第 10 図　SI21021 平面図 ・・・・・・・・・・・ 13
第 11 図　SI21021 断面図① ・・・・・・・・・・ 16
第 12 図　SI21021 断面図② ・・・・・・・・・・ 17
第 13 図　SI21021 出土遺物 ・・・・・・・・・・ 19
第 14 図　SI21027・21028 平面・断面図・・・ 20
第 15 図　SI21027・21028 断面図② ・・・・・ 21
第 16 図　SI21027 出土遺物①・・・・・・・・・ 23
第 17 図　SI21027 出土遺物②　・・・・・・・ 24
第 18 図　SI21027 出土遺物③　・・・・・・・ 25
第 19 図　SI21028 出土遺物　・・・・・・・・ 26
第 20 図　SI21030 平面・断面図　・・・・・ 27
第 21 図　SI21030 出土遺物　・・・・・・・・ 28
第 22 図　SE21004 平面・断面図　・・・・・ 29
第 23 図　SK21005 平面・断面図　・・・・・ 30
第 24 図　SK21005 出土遺物①　・・・・・・・ 31
第 25 図　SK21005 出土遺物②　・・・・・・・ 32
第 26 図　SD21001 断面図　・・・・・・・・・ 33
第 27 図　SD21001 出土遺物　・・・・・・・・ 34
第 28 図　SD21002 平面図　・・・・・・・・・ 35
第 29 図　SD21002 断面図　・・・・・・・・・ 38
第 30 図　SD21002 出土遺物　・・・・・・・・ 40
第 31 図　SD21022・23・24・26 断面図　・・ 42
第 32 図　SD21022・23・24・26 出土遺物　・ 43
第 33 図　その他の遺構出土遺物　・・・・・ 44
第 34 図　遺構外出土遺物①・・・・・・・・・・45
第 35 図　遺構外出土遺物②・・・・・・・・・・46
第 36 図　第６次調査出土の主要な土器　・・・48
第 37 図　第６次調査主要遺構の重複関係図・49
第 38 図　Ⅰ期遺構群 ・・・・・・・・・・・・・50
第 39 図　Ⅱ期遺構群 ・・・・・・・・・・・・・50
第 40 図　Ⅲ期遺構群 ・・・・・・・・・・・・・50

写真図版目次

写真図版１ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
　1　調査地点遠景（北側上空から）
　2　Ⅰ区・Ⅱ区全景（南側上空から）
　3　SI21021（西から）
　4　SI21027・21028（西から）
　5　SI21027 新カマド（西から）
写真図版２ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
　1　SD21002（南から）
　2　SD21002 コーナー部分（南東から）
　3　SD21002 土層断面（北から）
　4　SK21005 灰釉陶器・埦出土状況（東から）
　5　SI21003 鉄刀出土状況（北から）
写真図版３ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
　1　灰釉陶器・埦
　2　灰釉陶器・埦、皿
　3　須恵器・甕
　4　須恵器・円面硯
　5　須恵器・坏
　6　須恵器・坏
　7　須恵器・坏
　8　須恵器・坏
　9　須恵器・坏

10　須恵器・坏
11　須恵器・輪花状坏
12　須恵器・長頸瓶
13　須恵器・円面硯
写真図版４ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
1　土師器・坏
2　土師器・双耳坏
3　土師器・埦
4　土師器・坏
5　土師器・坏
6　土師器・小型甕
7　土師器・坏
8　土師器・高台坏
9　土師器・甕
10　土師器・甕
11　出土金属製品

表目次

第１表　岩沼市域の遺跡一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第２表　竪穴建物跡属性表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第３表　井戸跡属性表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第４表　大型土坑属性表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第５表　溝跡属性表・・・ 43

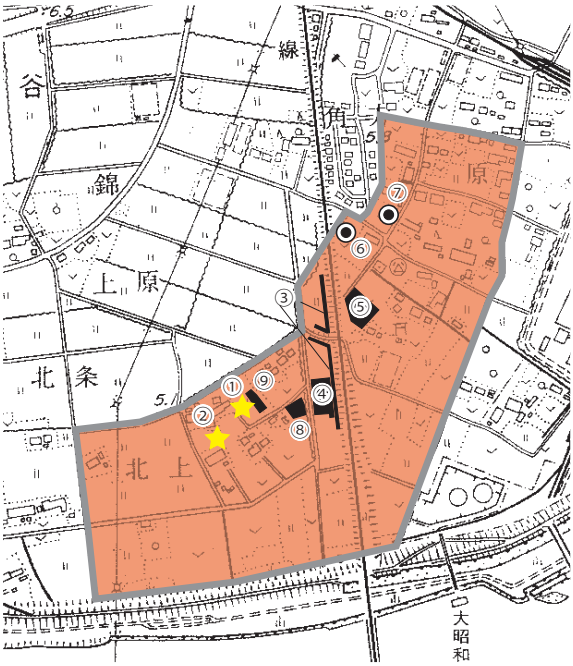
【調査要項】

1．所在地　　宮城県岩沼市南長谷字北上　地内
2．調査原因　遺跡範囲・内容確認
3．調査主体　岩沼市教育委員会
4．調査期間　令和3年7月6日～ 12 月 24 日
5．調査面積　755 ㎡
6．調査指導　文化庁、宮城県教育委員会、原遺跡調査検討委員会（委員長：白鳥 良一）
7．調査担当　岩沼市教育委員会 生涯学習課（川又 隆央、武田 裕光、熊谷 篤）
8．現地調査参加者　塩谷 信幸、斎藤 新彌、渡辺 幹雄
浅川 俊夫、近江 幸次、大峠 博利、金子 利雄、古積 恵美子、佐々木 芳文、
平 信弘、高橋 舜市、玉山 俊彦、新田 豊記、早坂 忠正、平井 政雄
9．整理作業専従者　菅原 健

第Ⅰ章　調査に至る経緯・経過と調査方法

１．調査に至る経緯と経過

原遺跡の発掘調査は、平成 28 年度の圃場整備事業に伴う第１次調査（第１図③）において、古墳時代中期から平安時代にかけての遺構・遺物が多数発見されたことに端を発する。この調査は、排水路敷設に伴う調査のために調査区幅は約２ｍと狭いながら、一辺が１ｍほどで方形の掘方を有する柱穴群や、美濃地方で生産されたと考えられる須恵器円面硯が発見されたことから、これまで場所の特定が課題となっていた「玉前駅家」、あるいは「玉前剗（関）」に関する遺跡である可能性が浮上した。この成果を受けて岩沼市では、遺構・遺物の広がりをさらに把握することを目的として、柱穴群が確認された地点の西側水田において平成 29 年度に第２次調査を実施し、遺構群が西側へも展開することを明らかにした。しかしながら、第２次調査は調査目的を範囲確認に主眼を置いたことからトレンチ調査を選択しており、発見した遺構が時期別にどのような空間を形成していたのか、という点は明らかにできなかった。平成 30 年度に実施した第３次調査（第１図④）は、前年度調査の課題解明に取り組むために調査区を拡大するかたちで実施した。その結果、８世紀前半から後半の時期には建物の主軸がほぼ真北方向となる桁行 10 間、梁行３間の大型掘立柱建物跡が存在していることが判明した。この建物は同位置で建て替えが行われ、周辺にはそれぞれの主軸に近似する小規模な建物も認められている。なお、掘立柱建物群に先行する材木塀と大溝も発見されているが、両者の機能時期や規模、性格の詳細については今後の課題となった。令和元年度の第４次調査（第１図⑤）は JR 常磐線東側での様相を把握することを目的として実施し、８世紀代と９世紀前半以降の２時期の遺構面が存在することが確認された。この２時期の遺構面ではともに掘立柱建物跡が認められており、第３次調査で発見された建物群が８世紀末葉以降に北東側へ位置を移す可能性が考えられた。令和２年度の第５次調査（第１図⑧・⑨）では、一辺が約 10 ｍを測る大型の竪穴建物跡が部分的に確認された。また、７世紀後半段階に東海地方で生産された須恵器を含む竪穴建物跡も見つかり、市内に点在する横穴墓群からも同様の遺物が発見されていることから、これら横穴墓群の被葬者たちの生活母体が当遺跡地である可能性が高まった。



第１図　原遺跡第６次調査地の位置

国庫補助事業４年目となる今年度の調査は、第５次調査区の西側で実施することになった。この調査の目的は、第５次調査で確認された大型竪穴建物跡の全容把握と、Ⅱ期の遺構群の広がりを確認することである。幸いにして地権者である鈴木清一氏と大泉正一氏の両氏より調査へのご快諾が頂けたことから、調査地となる畑地等（第１図①･②）の休耕補償を含めた土地賃借について協議を重ねた。その後、令和３年４月 30 日付で両氏と「土地賃貸借契約」を締結し、調査機材等の準備を行った。

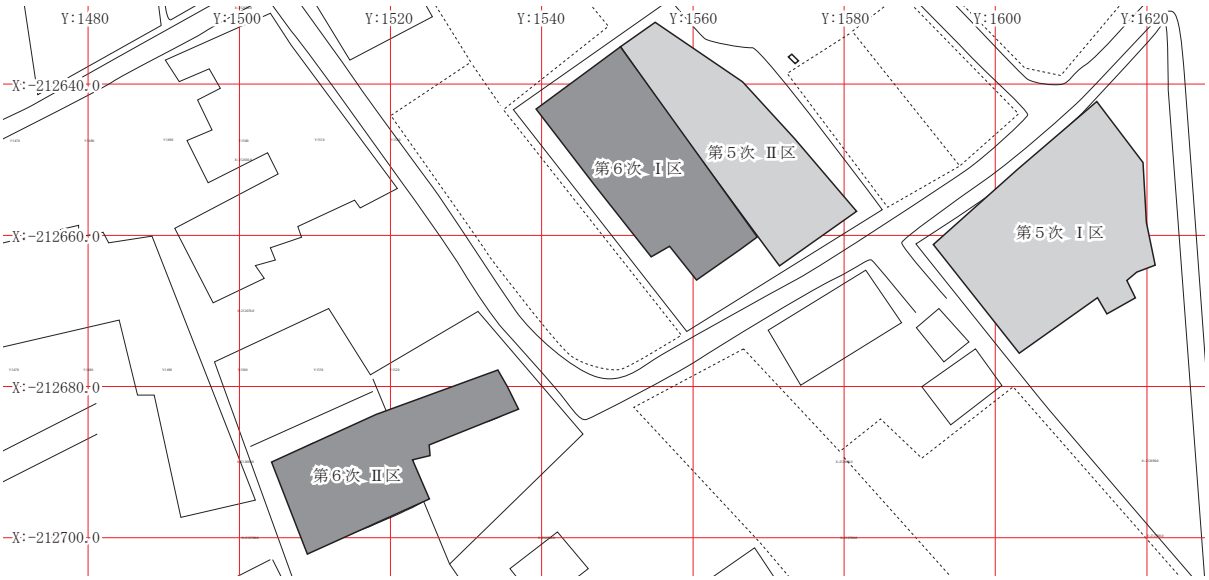
現地調査は令和３年７月６日より着手した。Ⅰ区から開始した重機による表土掘削に並行して遺構精査に取り掛かり、掘立柱建物や竪穴建物を中心とした遺構の検出、及び重複関係の把握に重点を置いた調査を行った。調査の成果が概ねまとまった 11 月 10 日に報道機関に向けた現地公開を行い、11 月 13 日午前中に地域住民、13 日午後から翌 14 日には一般市民を対象とした現地説明会を実施し、170 名の参加を得た。その後、遺構図面の作成などの作業を行い、12 月 23 日に機材等を搬出、重機による埋め戻しを 12 月 15 日から 12 月 26 日にかけて実施した。なお、調査では随時デジタル一眼レフカメラを用いて写真撮影を行っているが、ドローンを用いた空撮を５回実施している。

調査中には宮城県教育庁文化財課、多賀城跡調査研究所などをはじめとする方々が来跡し、様々な助言をいただいた。また原遺跡の調査計画・調査方針を審議・承認するための「原遺跡調査検討委員会」を令和３年 10 月８日に開催し、現地視察を実施した。なお、今年度は新型コロナウィルス感染拡大防止の観点から文化庁専門官による現地視察は断念したが、宮城県教育委員会を通して原遺跡の調査中間報告、及び検討委員会の内容について報告し、指導をいただいた。

２．調査方法

第６次調査の目的は、前述のとおり第５次調査で確認された大型竪穴建物跡の全容把握と、Ⅱ期の遺構群の広がりを確認することである。このため、検出した遺構についての掘り下げはごく限定的なものにとどめている。

調査はまず、重機を用いてⅠ区・Ⅱ区ともに基本土層Ⅲ層上面までを掘削し、その後に遺構確認面としているⅣ層、あるいはⅤ層で精査を実施した。確認した遺構のうち、柱穴については一段下げを実施して柱痕跡の有無を確認したほか、掘立柱建物や柱列を構成することが確実なものについては部分的に断ち割りを行っている。竪穴建物については一部を掘り下げて調査している。遺構の平面測量に際しては、これまでの調査成果との整合性をはかるために岩沼市が設置した２級基準点、及び圃場整備事業の際に設置された３級基準点を使用した。なお、岩沼市設置の基準点数値については、国土地理院が web 上で公開している「平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震」による地殻変動を補正するパラメーターファイルを用いて補正を行った数値である。



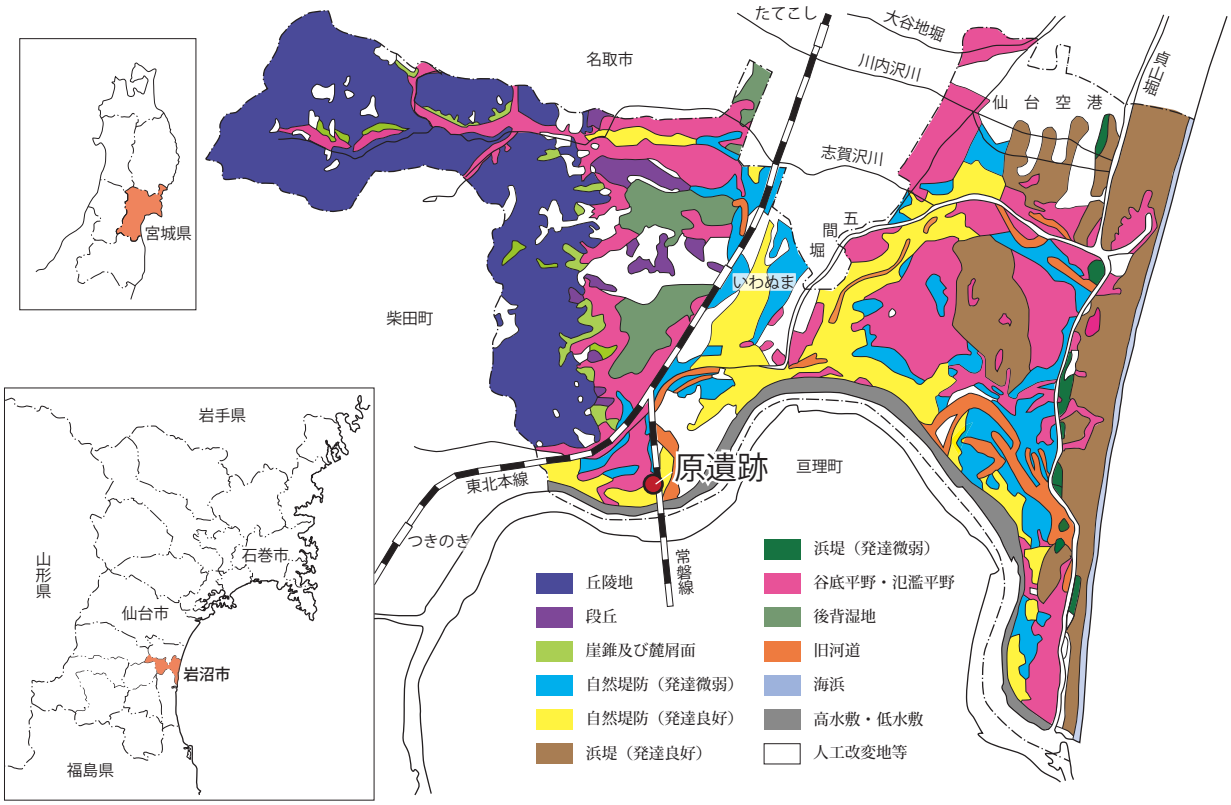
第２図　第６次調査区位置図

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1．地理的環境

岩沼市は宮城県南東部に位置し、東は太平洋に臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。市域の南端を東流する阿武隈川は、福島県と栃木県の境に位置する旭岳に端を発し、福島県内を北流して宮城県へと至る大河川であり、その全長は国内６位の 239km、流域面積は 5,400 ㎢を測る。本市は、この阿武隈川が太平洋に注ぐ河口部北岸に位置している。また本市は古代では東山道と、東海道から延びる連絡路が合する地点であったが、現在でも国道４号と同６号、JR 東北本線と同常磐線の合流地点となっており、交通要衝の地として知られている。

市域を地質学的に大別すると、西側の山地と東側の広大な沖積地に分けられる。山地は南北に延びる岩沼西部丘陵（標高 100 ～ 300m）と高館丘陵（標高 200 ～ 300m）、これらの丘陵から東へ舌状に張り出す標高 10 ～ 30 mほどの長岡丘陵、二木・朝日丘陵と呼称している小規模な段丘面から成る。山地の東側に展開する広大な沖積地は仙台平野南部域に相当し、岩沼西部丘陵の東縁から太平洋まで７～８km の幅をもつ。この沖積平野は阿武隈川をはじめ、志賀沢川などの中小河川の堆積作用によって形成され、自然堤防の発達が顕著である。また、浜堤も発達しており、市域では大きく分けて、岩沼市街地、玉浦地区、海岸地区の三列の浜提列が確認できる。本報告対象となる原遺跡は、阿武隈川北岸から 200 ～ 300 mほど北に位置し、阿武隈川北岸に形成された自然堤防上に立地している。



第３図　岩沼市の位置と地形分類

2. 歴史的環境

岩沼市域では、これまでに縄文時代から近代にかけての遺跡が 64 箇所で確認されている。近年、東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査や、岩沼市史編纂事業に伴う学術調査により、地域の歴史を解明するための新たな成果が報告されている。以下に各時代の概略を記す。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、市域西側の丘陵部に点在し、晩期の遺物が多量に発見された下塩ノ入遺跡【14】など、特に志賀沢川流域の志賀・小川地区にまとまって分布している。また、沖積地を望む丘陵上に立地する山畑南貝塚【9】や畑堤上貝塚【36】では、汽水域に生息するヤマトシジミを主体とした貝層の形成もみられる。北原遺跡【7】では、中期後葉の土坑が 50 基近く検出され、磨消縄文を特徴とする土器のほか、石錐や石棒などが発見された（宮城県教育委員会 1993）。鵜ヶ崎城跡【23】では、第4地点の発掘調査において、鵜ヶ島台式や梨木畑式に比定される早期末の土器群が見つかっている（岩沼市史編纂委員会 2015）。

弥生時代

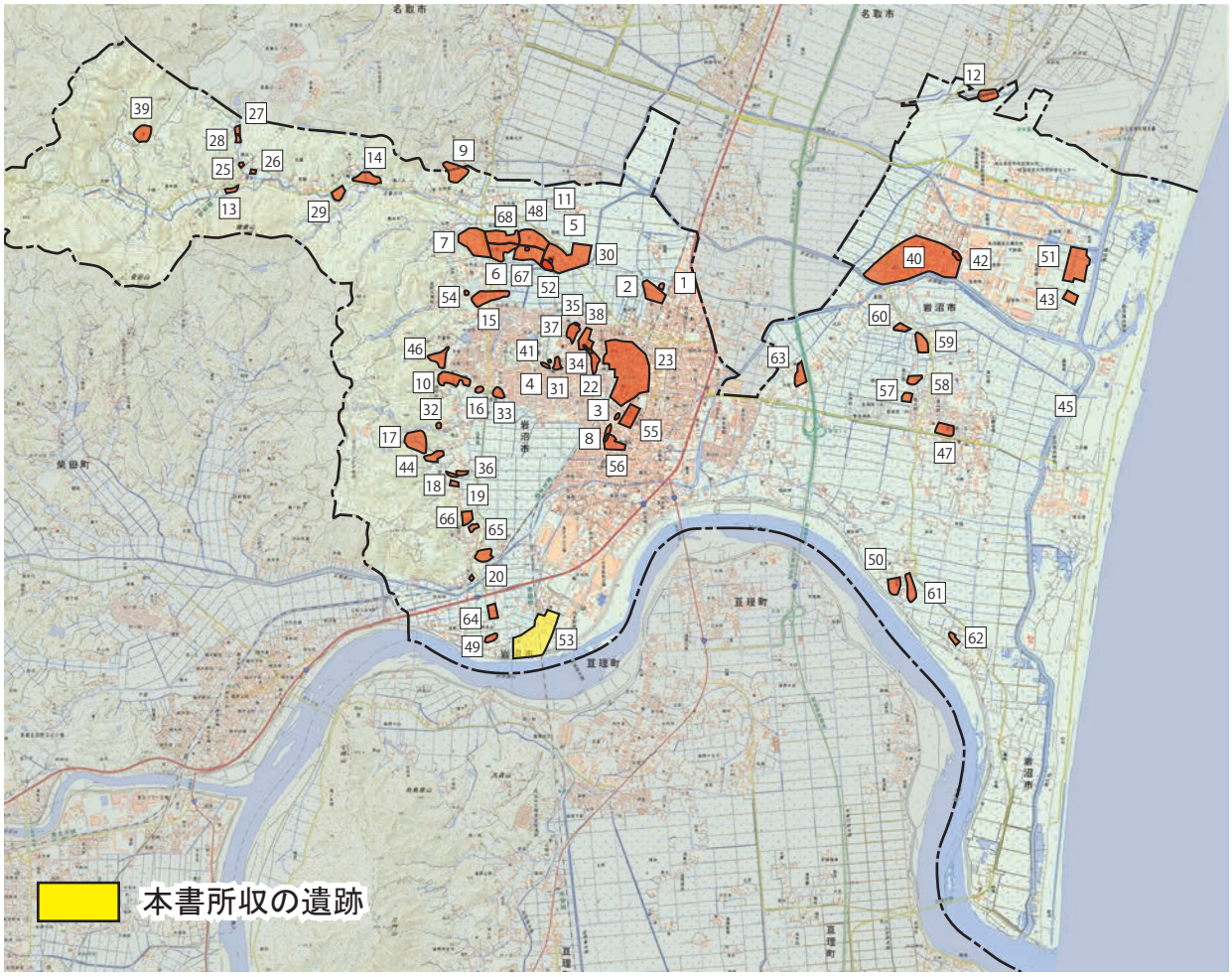
弥生時代の遺跡は縄文時代と同様、市域西側の丘陵部に多く分布している。しかしながら、上根崎遺跡【30】や朝日古墳群【37】、平野部に位置するかめ塚西遺跡【2】でも土器の散布が認められ、人間の営みが太平洋側へ拡大する様子をうかがい知ることができる。鵜ヶ崎城跡【23】では、中期後葉と考えられる竪穴建物跡や十三塚式に比定される土器、及び石包丁などの石器が発見されている。北原遺跡【7】では、北関東を中心に分布する十王台式に並行するものとみられる、後期後半と推量される土器が見つかっている。また、杉の内遺跡【6】では籾痕のある土器も採集されている（岩沼市史編纂委員会 2015）。

古墳時代

古墳時代の遺跡は高塚古墳、横穴墓、集落跡などが市内各所にみられる。高塚古墳のうち、県指定史跡のかめ塚古墳【1】では、古墳周溝の発掘調査において土師器や須恵器のほか、底面から一木二又鋤が出土した。また、地表に顕在する全長約 39 mの柄鏡形の墳丘は周囲が後世に削られたものであり、本来は全長約 48 mを測る撥形の前方後円墳であったことが確認されている。造営時期はこれまで中期と考えられてきたが、遺物の年代や古墳の立地条件、墳丘の形態などの点から前期にさかのぼる可能性が示されている（岩沼市史編纂委員会 2015、岩沼市教育委員会 2021c）。

横穴墓は岩沼西部丘陵から派生する低位丘陵の斜面で多く造られ、これまでに 10 箇所の横穴墓群が確認されている（消滅した横穴墓群を含む）。このうち、長谷寺【10】、丸山【3】、二木【8】、土ケ崎【22】、引込【31】、平等山【16】などの横穴墓群の発掘調査では、7世紀前半頃から造営が開始され、8世紀前半頃まで機能していたと考えられている（岩沼市史編纂委員会 2015、岩沼市教育委員会 2019 b）。

集落遺跡では北原遺跡【7】をはじめとする長岡丘陵遺跡群が前期の集落跡として知られるが、そこから南へ約 500m の位置に所在する熊野遺跡【15】でも、同時期の竪穴建物跡群が発見された。また、孫兵衛谷地遺跡【12】では前期の塩釜式に位置付けられる土師器を含む遺物包含層の存在が明らか



第４図　岩沼市域の遺跡分布図

第1表　岩沼市域の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時　代	番号	遺跡名	時　代	番号	遺跡名	時　代
53	原遺跡	古墳・古代	23	鵜ヶ崎城跡	縄文・弥生・中世・近世	48	長塚北遺跡	縄文・古墳・古代
1	かめ塚古墳	古墳	25	八森Ａ遺跡	縄文	49	南玉崎遺跡	縄文・古代
2	かめ塚西遺跡	弥生・古墳	26	八森Ｂ遺跡	縄文	50	西須賀原遺跡	古代
3	丸山横穴墓群	古墳	27	銅谷Ａ遺跡	縄文・近世	51	高大瀬遺跡	古墳・古代
4	白山横穴墓群	古墳	28	銅谷Ｂ遺跡	縄文・近世	52	長徳寺前遺跡	近世
5	新明塚古墳	古墳	29	新宮下遺跡	縄文	54	中ノ原遺跡	中世
6	杉の内遺跡	弥生・古墳・古代	30	上根崎遺跡	縄文・弥生・古代・中世	55	丸山遺跡	中世・近世
7	北原遺跡	縄文・弥生・古墳・古代	31	引込横穴墓群	古墳	56	竹駒神社境内遺跡	中世・近世
8	二木横穴墓群	古墳	32	古関山遺跡	弥生・古墳	57	新筒下遺跡	古代
9	山畑南貝塚	縄文・古代	33	新田遺跡	縄文・古代	58	沼前遺跡	古代
10	長谷寺横穴墓群	古墳	36	畑堤上貝塚	縄文・古墳・古代	59	西土手遺跡	中世
11	長塚古墳	古墳	37	朝日古墳群	弥生・古墳・中世・近世	60	前條遺跡	古代
12	孫兵衛谷地遺跡	古墳前	38	朝日遺跡	古墳・古代・中世	61	刈原遺跡	古代
13	大日遺跡	縄文	39	岩蔵寺遺跡	縄文・古代・中世	62	高原遺跡	中世
14	下塩ノ入遺跡	縄文	40	下野郷館跡	古墳・古代・中世・近世	63	上中筋遺跡	古代・中世
15	熊野遺跡	古墳・古代	41	白山塚	近世？	64	樋遺跡	古代・中世
16	平等山横穴墓群	古墳	42	舘外遺跡	古代	65	柳遺跡	古墳・古代
17	新館跡	中世	43	にら塚遺跡	古墳・古代	66	台遺跡	縄文・弥生
18	畑堤上横穴墓群	古墳	44	新館前遺跡	縄文・古代	67	長塚遺跡	縄文・古墳
19	根方泉遺跡	弥生・近世	45	貞山堀（木曳堀）	近世	68	上小渕遺跡	弥生・古墳・古代
20	長谷古館跡	室町	46	竹倉部遺跡	弥生・古墳・古代			
22	土ヶ崎横穴墓群	古墳	47	新田東遺跡	奈良・中世・近世			

となった。中期以降の様相については遺物の発見が少なく判然としないが、下野郷館跡【40】では南小泉式の土師器坏が出土し、第Ⅱ浜堤列上でも将来、古墳時代の集落遺跡の発見が期待される（岩沼市教育委員会 2018b・2019c、岩沼市史編纂委員会 2015）。

古　代

岩蔵寺遺跡【39】の所在する岩蔵寺には、平安時代後期に製作されたと考えられる木造如来像が現存する。発掘調査では、小石を塚状に集積した遺構の底面で火を焚いた痕跡と須恵系土器の坏が発見されており、平安時代から何らかの祭祀行為を行っていた可能性が考えられている（岩沼市史編纂委員会 2018）。北原遺跡【７】や熊野遺跡【15】では、７世紀末から 10 世紀前半にかけての竪穴建物跡が発見されている（岩沼市教育委員会 2019c）。原遺跡【53】では、桁行 10 間、梁行３間で、主軸方位が真北方向をとる大型掘立柱建物跡をはじめ、竪穴建物跡や材木塀跡、幅３ｍを超える大溝などが検出され、円面硯や墨書土器、刀の口金具が出土した（岩沼市教育委員会 2018a・2019a）。近接する南玉崎遺跡【49】や樋遺跡【64】では、土師器・須恵器などが出土しており、このうち樋遺跡では７世紀末～８世紀初頭頃に位置付けられる須恵器の高台坏などが出土している（岩沼市史編纂委員会 2015）。対岸（阿武隈川南岸）には、平安時代の陸奥国曰理郡衙跡と考えられている三十三間堂官衙遺跡（亘理町）が位置し、中世には逢隈湊と呼ばれる湊の存在が『吾妻鑑』に記されている。

中　世

中世の遺跡は、過去に朝日古墳群【37】、朝日遺跡【38】、鵜ヶ崎城跡【23】、丸山遺跡【55】、竹駒神社境内遺跡【56】、下野郷館跡【40】、西須賀原遺跡【50】、中ノ原遺跡【54】、岩蔵寺遺跡【39】、刈原遺跡【61】、上根崎遺跡【30】などで発掘調査が行われている。熊野遺跡【15】の発掘調査で確認された方形竪穴遺構は倉庫的な施設と推定され、龍泉窯系の鎬蓮弁文青磁碗が出土していることから在地富裕層の存在が考えられる（岩沼市教育委員会 2019c）。また、市域北西部に位置する岩沼市小川地区の丘陵斜面で、白石市周辺で生産されたと考えられる中世陶器が採集されており、近世東街道が成立する以前の中世の道に関わる施設が存在した可能性が指摘されている（武田・川又 2020）。

近　世

本市は近世において城下町、宿場町として発展し、竹駒神社の門前町としても賑わいを見せたといわれ、調査実績もほかの時代に比べて多い傾向にある。丸山遺跡【55】、竹駒神社境内遺跡【56】、下野郷館跡【40】、西須賀原遺跡【50】、西土手遺跡【59】、新筒下遺跡【57】、刈原遺跡【61】、高原遺跡【62】などで発掘調査が行われ，仙台藩政期の社会を研究する上で貴重な成果が得られている。鵜ヶ崎城跡【23】第１地点の調査では、溝跡や石積み遺構、碗埋納遺構などが検出され、第４地点では土塁の補・改修痕跡が確認された。遺物では、15 世紀前半頃の龍泉窯系青磁盤や天目釉を施した瀬戸産小壺などが出土した（岩沼市史編纂委員会 2015）。

原遺跡【53】の所在する玉崎地区の渡邉家は、江戸時代に仙台藩より阿武隈川舟運の統制を命じられ、船からの税徴収や米などの商品継送を手掛けて玉崎問屋と呼ばれた。また、歌枕としても知られる玉崎地区の「稲葉（田沢）の渡し」は、市域にいくつか存在した渡しの中でも最も古くからあったと考えられている。玉崎地区は古代以来、水陸交通の要衝に位置した（岩沼市史編纂委員会 2018）。

第Ⅲ章　調査成果

１．基本土層

今回の調査地点のⅠ区は畑地、Ⅱ区は水田として利用されている。Ⅰ区の標高は5.02～5.07ｍであり、現代の耕作土であるⅠ層は概ね25㎝程度の厚みをもって平坦に広がるが、Ⅱ層以下の堆積土層は北に向かってわずかながら傾斜している。本遺跡地が阿武隈川左岸に形成された自然堤防上に展開していることは第Ⅱ章にて前述したとおりであるが、Ⅰ区の土層観察においても、安定した微高地が北側の阿武隈川旧河道に向かって徐々に下がっていく様子をうかがい知ることができた。遺構検出面は２面あり、一つはⅢ層の黒褐色シルト層上面、さらにもう一つは、第５図の土層柱状図に示したとおり、Ⅲ層直下から掘り込まれるⅣ層の黒褐色粘質シルト上面である。

一方、Ⅱ区の標高は5.01～5.13ｍであり、Ⅰ層の水田耕作土よりも下層では西側に向かって自然地形が大きく傾斜していく様相が見受けられる。特に、Ⅱ層の灰黄褐色シルトとⅢ層の黒褐色粘質シルトの堆積が顕著であり、Ⅱ層では35㎝～60㎝、Ⅲ層では20㎝～37㎝の層厚を確認することができる。こうした状況から、Ⅱ区の西側にも旧河道が存在していた可能性が考慮されるが、古代以降の洪水や河川の氾濫などの要因によって埋もれた結果が現地形として顕在しているものと思われる。主な遺構検出面はⅣ層の暗褐色シルト層上面とⅤ層の黒褐色粘質シルト上面の２面であるが、さらに下位のⅤ層直下からは、Ⅵ層を掘り込んだ弥生土器を含む遺物包含層を確認している。なお、Ⅵ層よりも下位になると、暗褐色粘土粒を含む細粒砂層であるⅦ層に至り、遺構や遺物などの人為的痕跡は確認できなくなる。また、Ⅶ層以下については、湧水によって堆積土を確認することは極めて困難である。

調査では、どちらの調査区においても、Ⅰ層とⅡ層を重機で除去した後にⅢ層以下を人力で掘削し、Ⅳ層上面あるいはⅤ層上面での遺構確認を心掛けた。

２．発見された遺構と遺物

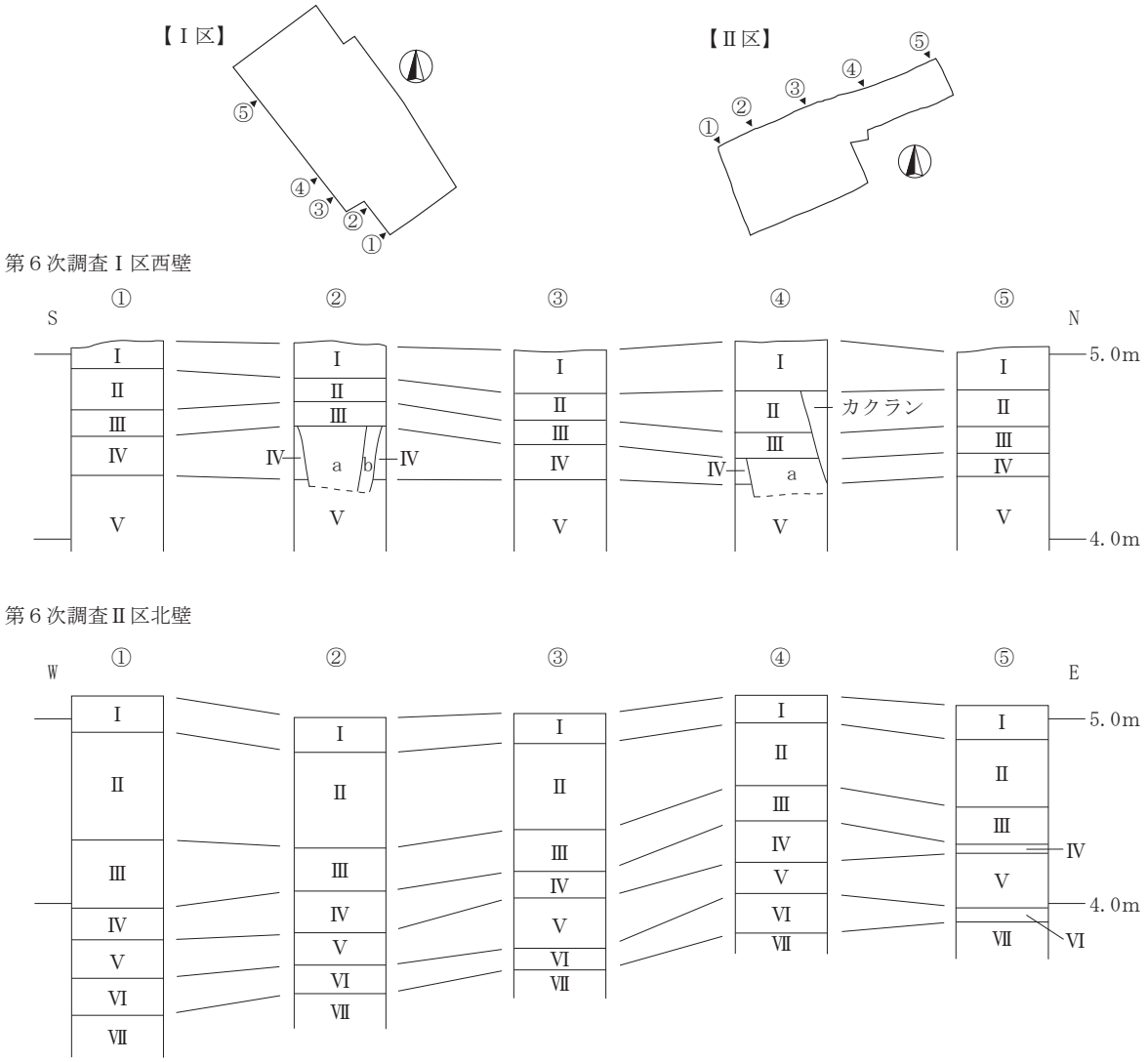
第６次調査では、調査面積439㎡のⅠ区、そして調査面積316㎡のⅡ区で調査を実施した。調査で確認した遺構はⅠ区では竪穴建物跡４棟、溝跡８条、土坑・柱穴群である（第６図）。Ⅱ区では竪穴建物跡２棟、井戸跡１基、大型土坑１基、溝跡２条、土坑・柱穴群である（第７図）。

出土遺物はⅠ・Ⅱ区ともに古墳時代終末期から平安時代の土師器・須恵器が多数を占め、ごくわずかに石製品、鉄鏃・鉄刀などの金属製品、カマド支脚などの土製品、臼玉などの玉製品、弥生土器、古墳時代前期の土師器、中世陶器、近世陶磁器が含まれる。遺物は主に遺構内、及び遺構精査時に出土しているが、重機による表土掘削でも出土している。出土遺物の総数は整理箱で20箱程度である。以下に発見された遺構別に詳述する。

a. 竪穴建物跡

【SI21003】（第８・９図）

Ⅱ区中央北部に位置する。南側の一部で掘り下げを行っている。本遺構の大部分は北側の調査区外へ広がるため、全体の規模・形状は不明であるが、南辺は5.0ｍ、確認面からの深さは40㎝を測る。



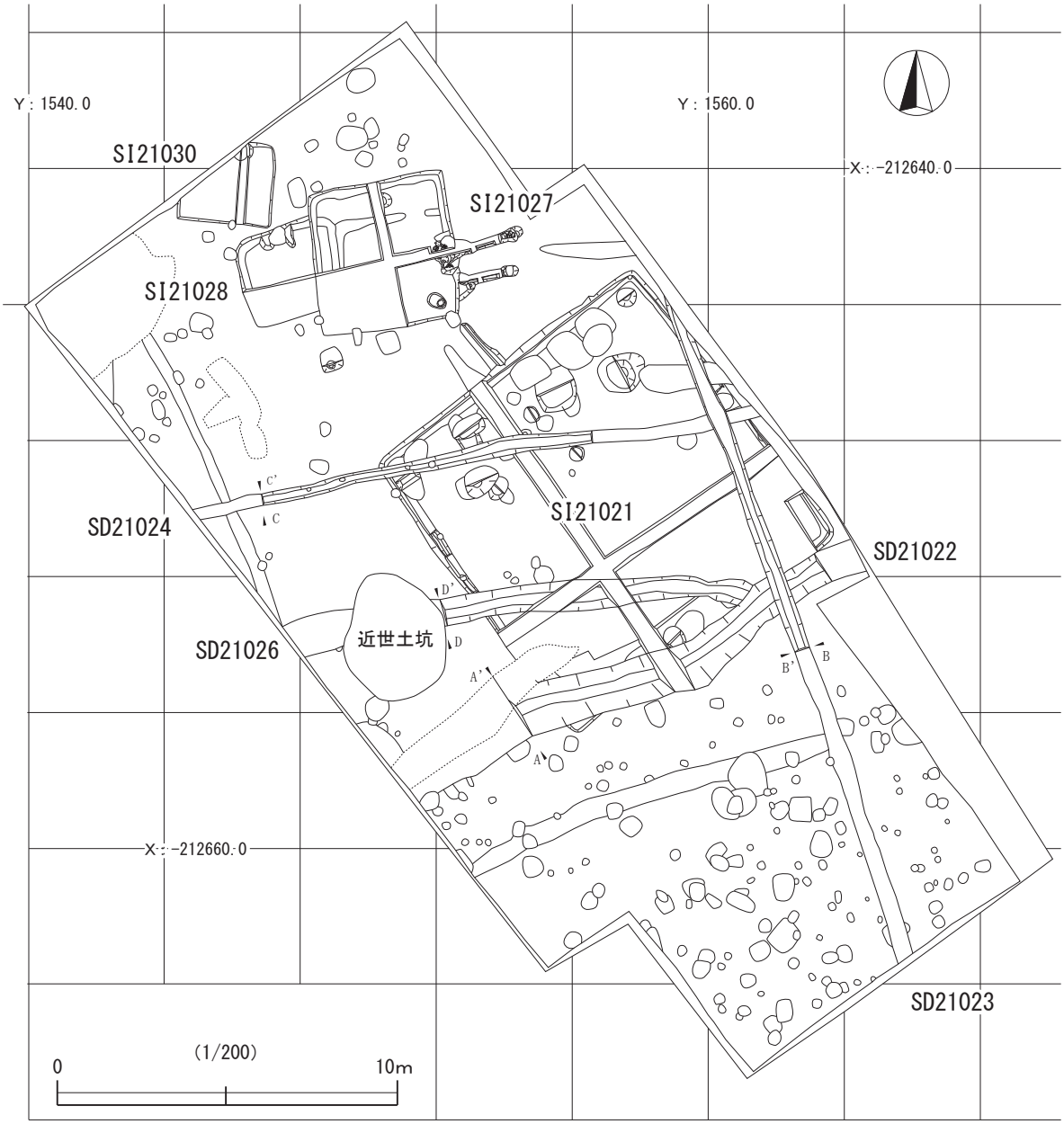
第５図　第６次調査基本層序

Ⅰ区基本土層注記

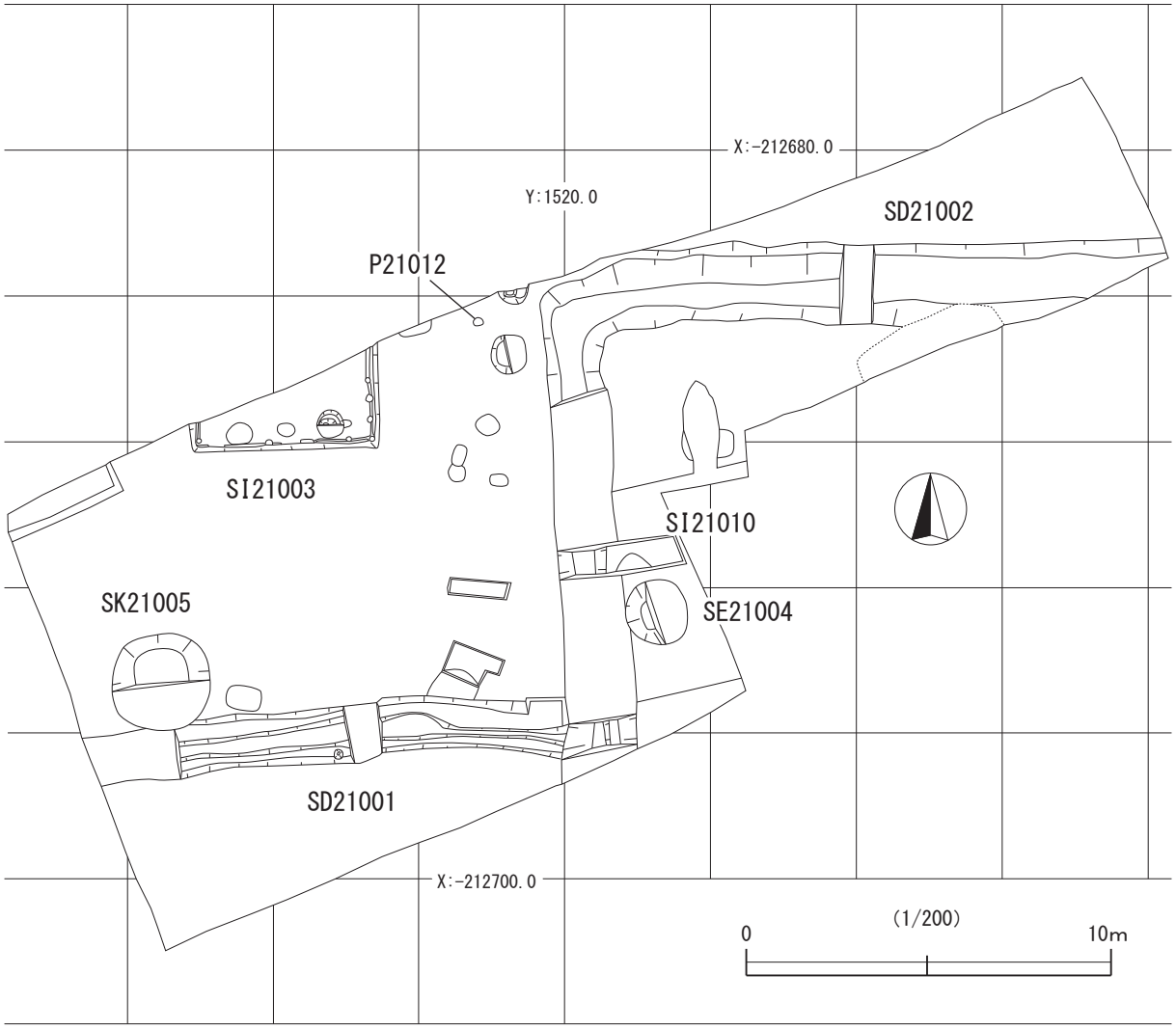
No.	土色		土質	備　　考
Ⅰ	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	しまりやや強い。粘性弱い。黒褐色粘質シルト小ブロックをやや多く含む。
Ⅱ	褐色	10YR4/4	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。炭化物・焼土粒を極めて微量含む。下面は耕起によって不整合となる。
Ⅲ	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。Ⅱ層を粒状にやや多く含む。
Ⅳ	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。褐色粘土小ブロック、焼土粒を微量含む。
Ⅴ	褐色	10YR4/4	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性強い。上面にⅣ層を粒状に含む。
a	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性強い。炭化物・焼土粒・土器片を微量含む。
b	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや強い。粘性強い。褐色粘質シルト小ブロックをやや多く含む。

Ⅱ区基本土層注記

No.	土色		土質	備　　考
Ⅰ	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	しまり弱い。粘性やや強い。現在の水田耕作土。
Ⅱ	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。畑耕作土。
Ⅲ	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。Ⅲ層直下から各遺構は掘り込む。
Ⅳ	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。
Ⅴ	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。遺構確認面。なお、Ⅴ層直下からも遺構の掘り込みを確認。
Ⅵ	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。西側では砂質感が強くなる。弥生土器包含層。
Ⅶ	褐色	10YR4/6	砂	しまり弱い。粘性やや弱い。粒径は細粒砂程度。上位ほど暗褐色粘土粒を含む。



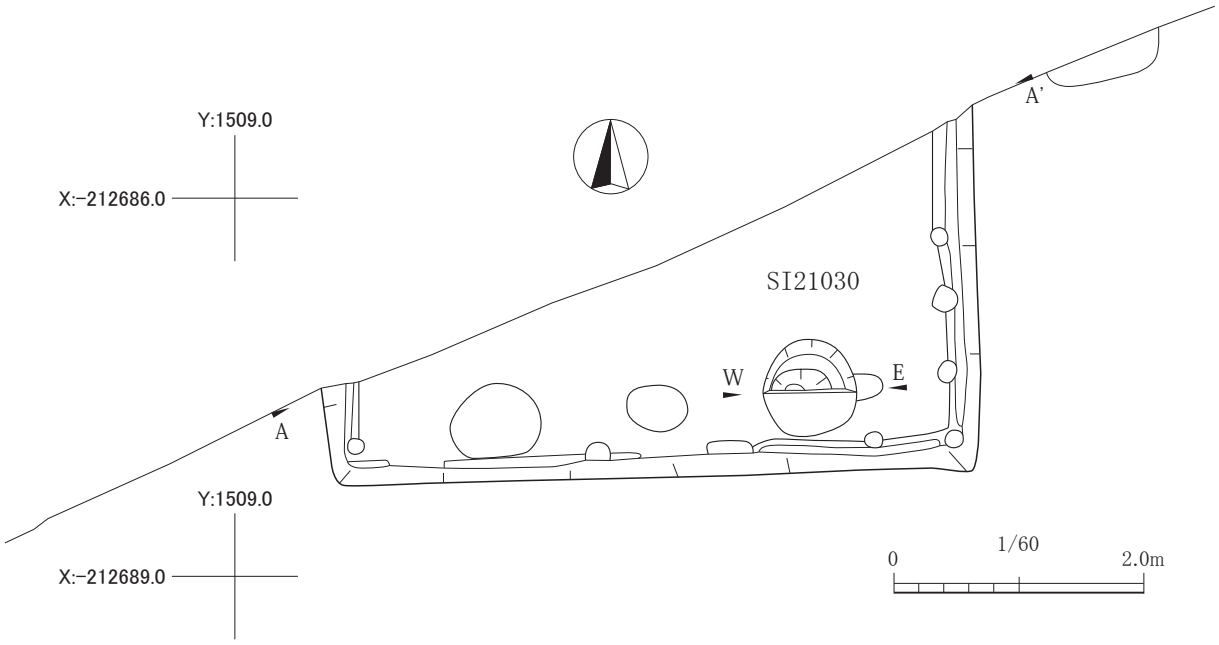
第６図　原遺跡６次調査　Ⅰ区全体図



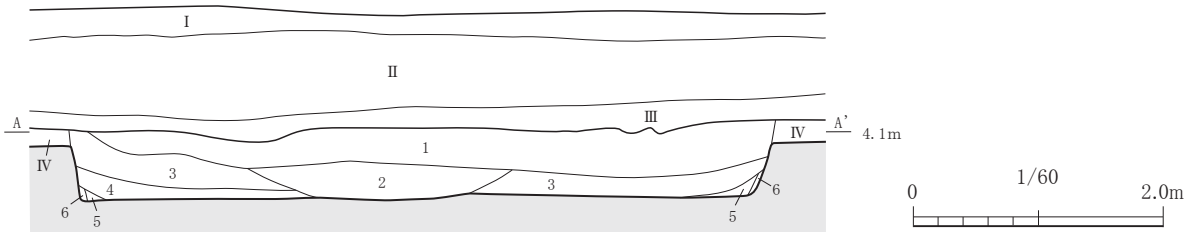
第７図　原遺跡６次調査　Ⅱ区全体図

東壁で計測した主軸方位は、ほぼ真北方向である。床面は灰黄褐色粘質シルトを用いた貼床であり、主柱穴を２穴とピットを１口確認している。周溝はすべての壁際で確認され、それぞれの壁面で壁板を押さえるための補強材とみられる痕跡が認められた。また、建物南西隅の周溝上面では鉄刀が完形で出土した。

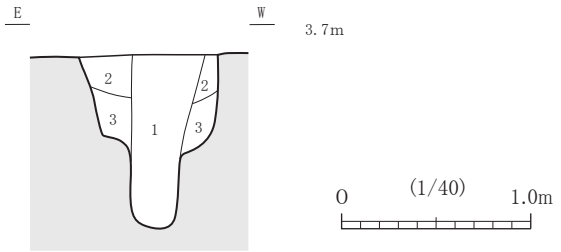
遺物は第９図１に図示した須恵器坏、２の鉄刀が出土した。１は底径が比較的大きく、器形は底部から口縁部に向かって直線的に開く。底部外面は回転ヘラ切りののち未調整である。２は小型の鉄刀である。全長は 41.5 ㎝で、刀身長は 28.4 ㎝、茎長は 13.1 ㎝を測る。刀身は 0.3 ㎝ほどわずかな反りがみられるが、茎には反りがみられない。鞘尻・柄頭金具は存在しない。刀身には足金具、及び鎺とみられる金具が存在するが､錆の固着が著しくＸ線透過調査においても形状などは判別困難である。茎は先端に向かって細くなり、先端部はＬ字状に折れ曲がる。Ｘ線透過調査においても目釘孔は認められないことから、挿し込んだ柄が外れないように加工した可能性がある。なお、刀身には部分的に木質が遺存している。このほか図示は見送ったがロクロ成形の土師器坏･甕、椀型滓も出土している。図示した遺物の特徴から、本遺構は８世紀末葉～９世紀初頭頃の年代観が考えられる。



SI21003 東西セクション



SI21003 主柱穴１東西セクション



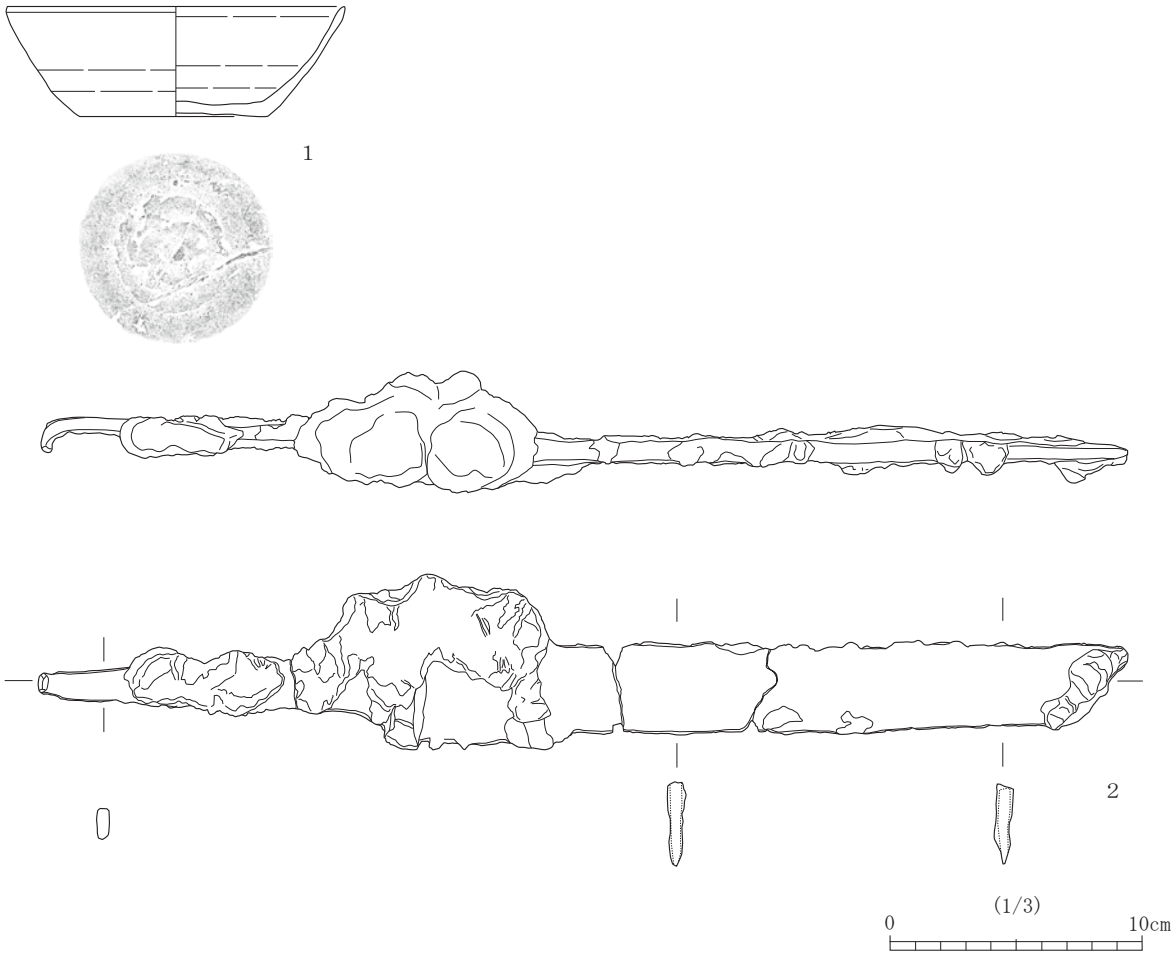
第８図　SI21003 平面・断面図

SI21003 東西セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト	しまり強い。粘性なし。炭化物、焼土粒をやや多く含む。
2	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。粘性弱い。炭化物、焼土粒を少量含む。酸化鉄を斑状に含む。
3	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト	しまり強い。粘性なし。炭化物、焼土粒を少量含む。
4	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまり強い。粘性弱い。炭化物、焼土粒を微量含む。
5	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。粘性やや弱い。炭化物を微量含む。
6	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。粘性弱い。黄褐色砂質シルト小ブロックを微量含む。

SI21003 主柱穴１東西セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	黒褐色	10YR3/2	粘土	しまり強い。粘性強い。黄褐色砂質シルト小ブロックを少量含む。
2	暗褐色	10YR3/4	粘土	しまり強い。粘性強い。黄褐色砂質シルト小ブロックを多量に、灰黄褐色粘土小ブロックを少量、炭化物、焼土粒を微量含む。
3	暗褐色	10YR3/4	粘土	しまり強い。粘性強い。黄褐色砂質シルト小ブロックを少量、炭化物、焼土粒を微量含む。



第９図　SI21003 出土遺物

SI21003 遺物観察表

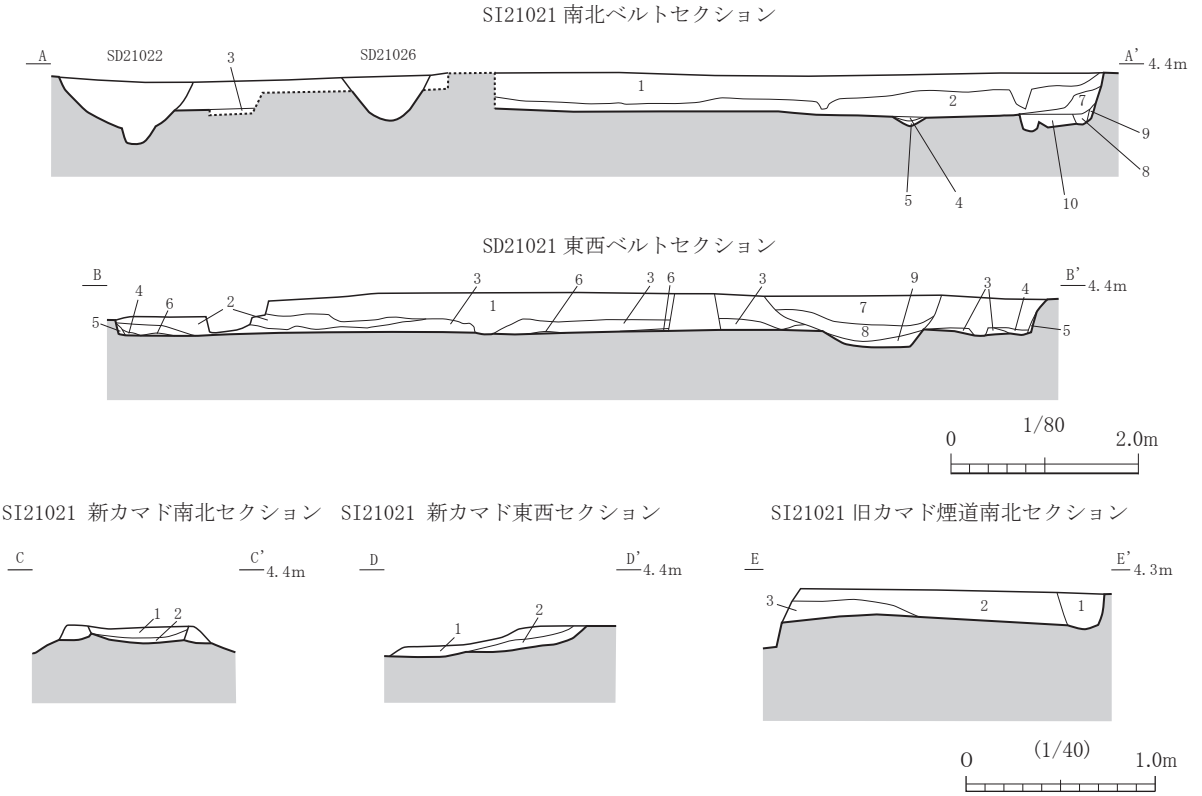
No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量（cm）			写真図版	登録No.
							口径	底径	器高		
1	SI21003・東区	須恵器	坏	ロクロナデ、底部回転ヘラギリ未調整	ロクロナデ	完存	13.6	7.6	4.4	3-6	13
2	SI21003・床面	金属製品	鉄刀	全長 41.5 cm、刀身長 28.4 cm、刀身幅 3.4 cm、茎幅 1.6 cm、刀身厚 0.6 cm、茎厚 0.4 cm、重量 458.5 g		完存				4-11	52

第 10 図　SI21021 平面図

【SI21021】（第 10 ～ 13 図）

Ⅰ区中央部に位置する。北半分で掘り下げを行っている。SD21022・21023・21024・21026 と重複関係にあり、これらより古い。本遺構では、カマドのつくり替えや土坑内の堆積状況から少なくとも２時期の変遷が考えられるが、調査上の制約から床面下の確認は未実施であるため、最終使用状況の把握に留まっている。平面形状は方形であり、規模は東西 9.6 m、南北 9.8 m、確認面からの深さは 40 ㎝を測る。東壁で計測した主軸方位は、真北から 38°西へ傾く。カマドは当初は北壁中央と同西寄りにつくられたが、その後に東壁中央につくり替えが行われている。新カマドの構築材にはにぶい黄褐色粘土が用いられ、燃焼部の幅は 55 ㎝、奥行は 53 ㎝である。新カマド内の壁面では強い被熱が認められ、燃焼部底面も赤変している。煙道部は北壁中央につくられた旧カマドに属するものを確認している。北壁際から長さ 162㎝を測る長煙道であり、底面形状はほぼ平坦である。床面は地山である褐色粘質シルトなどを主体とし、部分的ににぶい黄褐色砂質シルトを用いている。主柱穴は２穴確認されており、床面から１ｍの深さまで掘り下げられている。その位置関係を考慮すると、４本の柱で屋根を支える構造であったと考えられ、建物の廃絶時には柱を抜き取っている。建物内部の北壁沿いには、長軸 109 ～ 143 ㎝、短軸 65 ～ 98 ㎝で、平面形状が楕円形の柱穴５穴からなる柱列が認められ、掘り下げを行ったいずれの柱穴でも柱材の抜き取りを確認した。南壁沿いについては SD21022 に切られていることから明瞭には確認できなかったが、SD21022 底面では部分的に柱穴とみられる痕跡が認められた。このことから、これらの柱列については大型竪穴建物の屋根を支える４本の主柱以外に、垂木の荷重も受ける桁柱を補強するための管柱を設置していた痕跡と捉えられ、その場合の屋根形状は南北に葺き下ろす切妻形であったとみられる。また､周溝はカマドを除いて全周するとみられ、壁際では壁板や壁板を押さえたとみられる補強材を設置していた痕跡が認められる。本遺構内においては、主柱穴や周溝に伴う小ピットを除く土坑などを 28 穴確認し、このうち多量の焼土を含む土坑を３穴、前述の柱列を構成すると考えられる柱穴を２穴、その他の土坑１穴の掘り下げを行い図化している。床面からはほとんど遺物は出土していないが､第５次調査の際に出土した遺物の年代観から、本遺構は７世紀後半頃に利用されていたものと考えられ、遺構・遺物の検出状況からは計画的に退去した様子が推察される。

遺物は、堆積土上層からは土師器・須恵器の小細片が出土しているが、下層から床面にかけてはほとんど出土していない。また主柱穴や周溝からの遺物の出土は無かったが、多量の焼土を含む土坑からは若干の出土があった。第 13 図には１・２の土師器坏、３・４の土師器甕、５の鉄斧を図示した。１は非ロクロ成形で、底部は丸底気味の平底である。器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開く。内面はヘラミガキ調整ののち黒色処理が施されている。４は頸部から口縁部に向かって弱く外反し､頸部に段が付く。口縁部外面はヨコナデ調整を施し､胴部外面はハケメ調整である。５は残存長 6.6 ㎝、刃先幅 7.2 ㎝の鉄斧である。なお、昨年度の第５次調査では、堆積土中から長方形の透孔をもつ土師器高坏や甕が出土している。図示した遺物の特徴、及び第５次調査出土遺物の年代観から、本遺構は７世紀後半頃の年代観が考えられる。



第 11 図　SI21021 断面図①

SI21021 東西・南北ベルトセクション

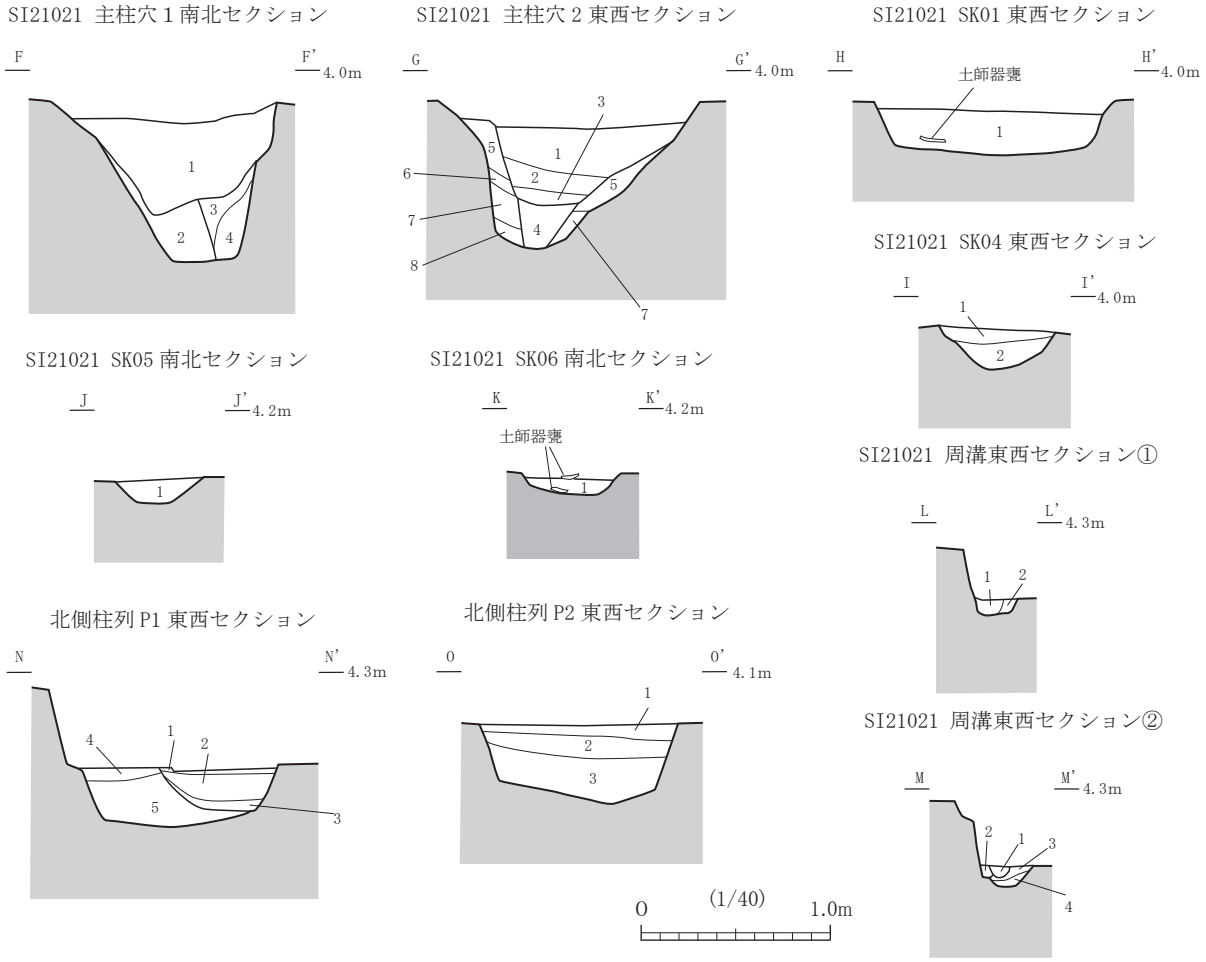
No.	土色		土質	備　考
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。炭化物・焼土粒を微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。褐色粘質シルト粒を多量、炭化物・焼土粒を微量含む。
3	褐色	10YR4/4	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。黒褐色粘質シルト小ブロックをやや多く、暗褐色砂質シルト小ブロックを少量含む。
4	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。炭化物・焼土粒を多量に含む。
5	褐色	10YR4/4	粘質シルト	しまり弱い。粘性やや強い。炭化物・焼土粒を微量含む。
6	黒色	10YR2/1	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性強い。にぶい黄褐色砂質シルト小ブロックをやや多く含む。
7	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。暗褐色シルト粒を多量に、炭化物・焼土粒を微量含む。
8	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。暗褐色粘土小ブロックを少量、炭化物・焼土粒を微量含む。周溝埋土。
9	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。褐色粘土粒を微量含む。壁板の痕跡か。
10	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。黒褐色粘土小ブロックを多量に、炭化物・焼土粒をやや多く含む。旧カマドの燃焼部か。

SI21021 新カマド東西・南北セクション

No.	土色		土質	備　考
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。褐色粘土小ブロックを少量、焼土粒を微量含む。
2	赤褐色	2.5YR4/6	焼土	しまり弱い。粘性やや強い。炭化物をやや多く、焼土粒を極めて多量に含む。

SI21021 旧カマド煙道南北セクション

No.	土色		土質	備　考
1	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまり強い。粘性強い。黄褐色粘土粒を少量、炭化物・焼土粒～小ブロックを多量に含む。
2	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまり強い。粘性やや弱い。炭化物・焼土小ブロックを多量に、黄褐色粘土粒～小ブロックを斑状に含む。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまり強い。粘性やや弱い。炭化物・焼土粒を少量、黄褐色粘土小ブロックを多量に含む。



第 12 図　SI21021 断面図②

SI21021 主柱穴１南北セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性強い。焼土粒、にぶい黄褐色粘土小ブロックを含む。抜き取り穴の埋土。
2	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	しまり弱い。粘性強い。柱痕跡か。
3	黒褐色	10YR3/1	砂質シルト	しまり弱い。粘性やや強い。にぶい黄褐色粘土小ブロックを多量に含む。
4	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	しまり弱い。粘性強い。にぶい黄褐色粘土小ブロックを少量含む。

SI21021 主柱穴２東西セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	暗褐色	10YR3/4	粘土	しまりやや強い。粘性強い。炭化物、焼土粒～小ブロックを微量、黄褐色粘土小ブロックを少量含む。抜き取り穴の埋土。
2	暗褐色	10YR3/4	粘土	しまりやや強い。粘性強い。炭化物、焼土粒を微量含む。抜き取り穴の埋土。
3	黒褐色	10YR3/2	粘土	しまりやや弱い。粘性強い。炭化物、焼土粒を多量含む。抜き取り穴の埋土。
4	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。褐色粘質シルト小ブロックを少量含む。地山である暗褐色砂質シルトが混じる。柱痕跡。
5	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまり強い。粘性強い。炭化物、焼土粒を微量、黄褐色粘土粒を少量含む。掘方埋土。
6	暗褐色	10YR3/4	粘土	しまりやや弱い。粘性強い。掘方埋土。
7	暗褐色	10YR3/4	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。黄褐色粘土粒を少量含む。地山である暗褐色砂質シルトが混じる。掘方埋土。
8	暗褐色	10YR3/3	粘土	しまりやや弱い。粘性強い。地山である暗褐色砂質シルトが混じる。掘方埋土。

SI21021 SK01 東西セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。炭化物を微量、焼土粒をやや多く含む。土師器片混入。

SI21021 SK04 東西セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり弱い。粘性やや強い。極めて多量の焼土粒を含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。にぶい黄褐色粘土粒をごく微量含む。

SI21021 SK05 南北セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。炭化物を微量、焼土ブロックを多量に含む。土師器を多く含む。

SI21021 SK06 南北セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。炭化物を少量、焼土粒を多量に含む。

SI21021 周溝東西セクション①

No.	土色		土質	備　　考
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまり弱い。粘性やや強い。にぶい黄褐色粘土粒を微量含む。
2	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。にぶい黄褐色粘土粒を多量に含む。

SI21021 周溝東西セクション②

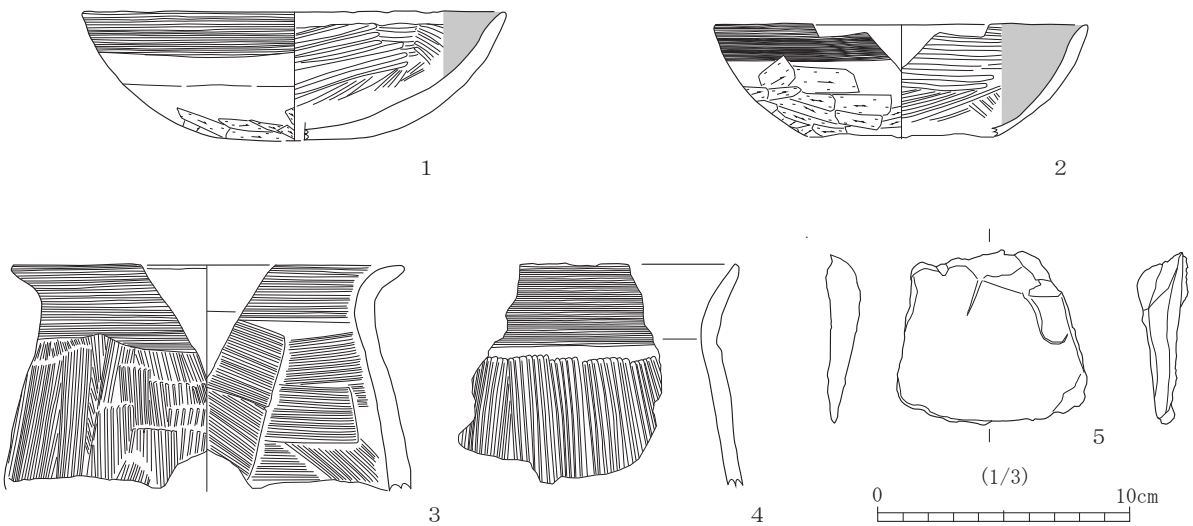
No.	土色		土質	備　　考
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまり弱い。粘性やや強い。にぶい黄褐色粘土粒を微量含む。壁板を押さえるための柱材の痕跡。
2	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまり弱い。粘性やや強い。にぶい黄褐色粘土小ブロックをごく微量含む。壁板の痕跡。
3	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。にぶい黄褐色粘土粒を多量に含む。周溝埋土。
4	褐色	10YR4/4	粘質シルト	しまりやや強い。粘性強い。黒褐色シルト小ブロックを少量含む。周溝埋土。

北側柱列 P1 東西セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。炭化物・焼土粒、黄褐色粘質シルト小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまり強い。粘性やや弱い。炭化物を少量、焼土粒～小ブロックを非常に多量に含む。
3	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。炭化物・焼土粒を微量、黄褐色粘質シルト小ブロックを少量含む。
4	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	しまり強い。粘性弱い。黄褐色粘質シルト小ブロックを非常に多量に含む。
5	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまり強い。粘性やや弱い。黄褐色粘質シルト小ブロックを斑状に多量に含む。

北側柱列 P2 東西セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。炭化物・焼土粒を多量に含む。
2	黒褐色	10YR2/2	粘土	しまり強い。粘性強い。炭化物・焼土粒を多量に含む。黄褐色粘土を層状に含む。
3	暗褐色	10YR3/4	粘土	しまりやや弱い。粘性強い。炭化物・焼土粒～小ブロックを多量に、黄褐色粘土小ブロックを非常に多量に含む。



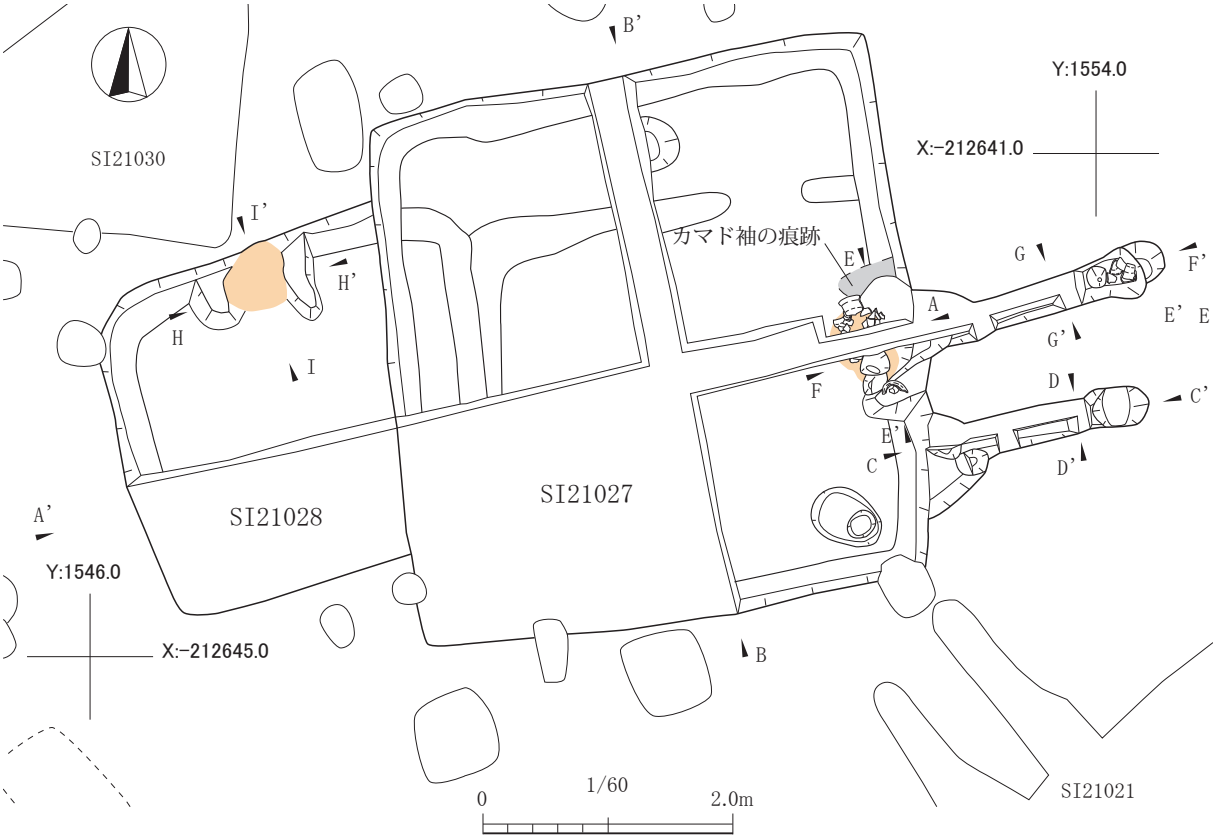
第 13 図　SI21021 出土遺物

SI21021 遺物観察表

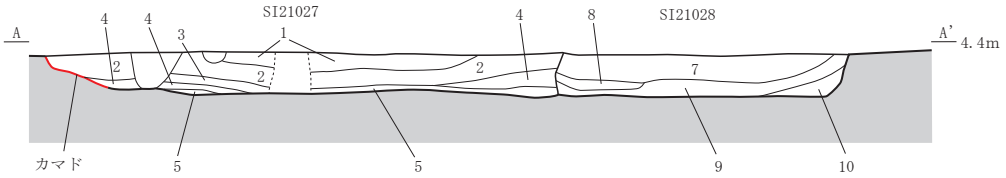
No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量（cm）			写真図版	登録No.
							口径	底径	器高		
1	SI21021・上層	土師器	坏	ヘラケズリ・ヨコナデ 底部は弱いヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁 2/5	16.9	－	5.1		35
2	SI21021・上層	土師器	坏	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁 1/4	15.0	－	(4.5)		30
3	SI21021 内 SK01	土師器	甕	ハケメ・ヨコナデ	ヘラナデ・ヨコナデ	口縁 1/6	15.6	－	(8.9)		75
4	SI21021 内 SK06	土師器	甕	ハケメ・ヨコナデ	ヘラナデ・ヨコナデ	口縁 1/10	－	－	(8.7)		64
5	SI21021・上層	金属製品	鉄斧	存長 6.6 cm、刃先幅 7.2 cm、厚み 0.8 cm、重量 171.5 g		1/2 か				4-11	54

【SI21027】（第 14 ～ 18 図）

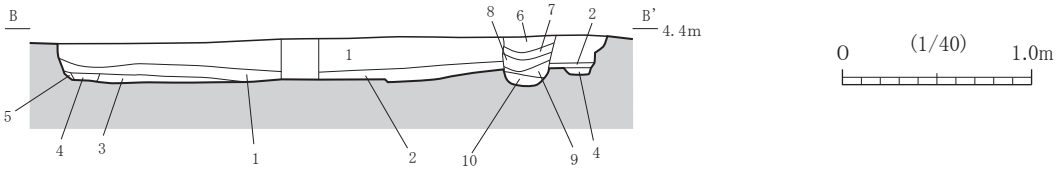
Ⅰ区北部に位置する。北側と東側の掘り下げを行っている。SI21028 と重複関係にあり、これより新しい。本遺構は、床面で周溝が新旧２時期存在することが認められたことから、北壁と西壁を拡張するつくり替えが行われたものと考えられる。平面形状は方形であり、規模は東西 4.1 m、南北 4.3 m、確認面からの深さは 33 cmを測る。西壁で計測した主軸方位は、真北から６° 西へ傾く。旧段階のカマドは東壁南寄りにつくられ、拡張後の新段階では東壁中央につくられる。新段階のカマドの構築材には暗褐色粘土が用いられ、右袖の先端ではロクロ成形の土師器甕を逆位に設置して芯材としているが、左袖部分が失われるなど遺存状態は良好ではない。新カマドの燃焼部はピットにより一部を失うが、確認できた範囲での幅は 65 cm、奥行は 60 cmである。カマド内の袖部、及び壁では強い被熱が認められ、燃焼部底面も赤変・硬化している。燃焼部のほぼ中央とみられる位置では土製の支脚が横位で確認されている。煙道部は東壁南寄りにつくられた旧カマドに属するものと、東壁中央につくられた新カマドに属するものを確認している。いずれも長煙道であり、長さは旧カマドがカマド奥壁際から 144 cm、新カマドが同じく 180 cmを測る。両者とも先端部付近に向かって緩やかに傾斜し、確認面から 50 ～ 60 cmと深く掘り込まれた煙出しピットへと至る形状である。新カマド左袖付近の底面、及び新カマド煙道部の煙出しピット底面からは、ロクロ成形の土師器甕片がまとまって出土している。床面は暗褐色粘土を用いた貼床部分と、その外側の地山である褐色粘質シルトからなる部分に分けられる。周溝は新段階・旧段階とも確認した範囲ではすべて認められることから、カマドを除いて全周



SI21027・21028 東西セクション



SI21027 南北セクション



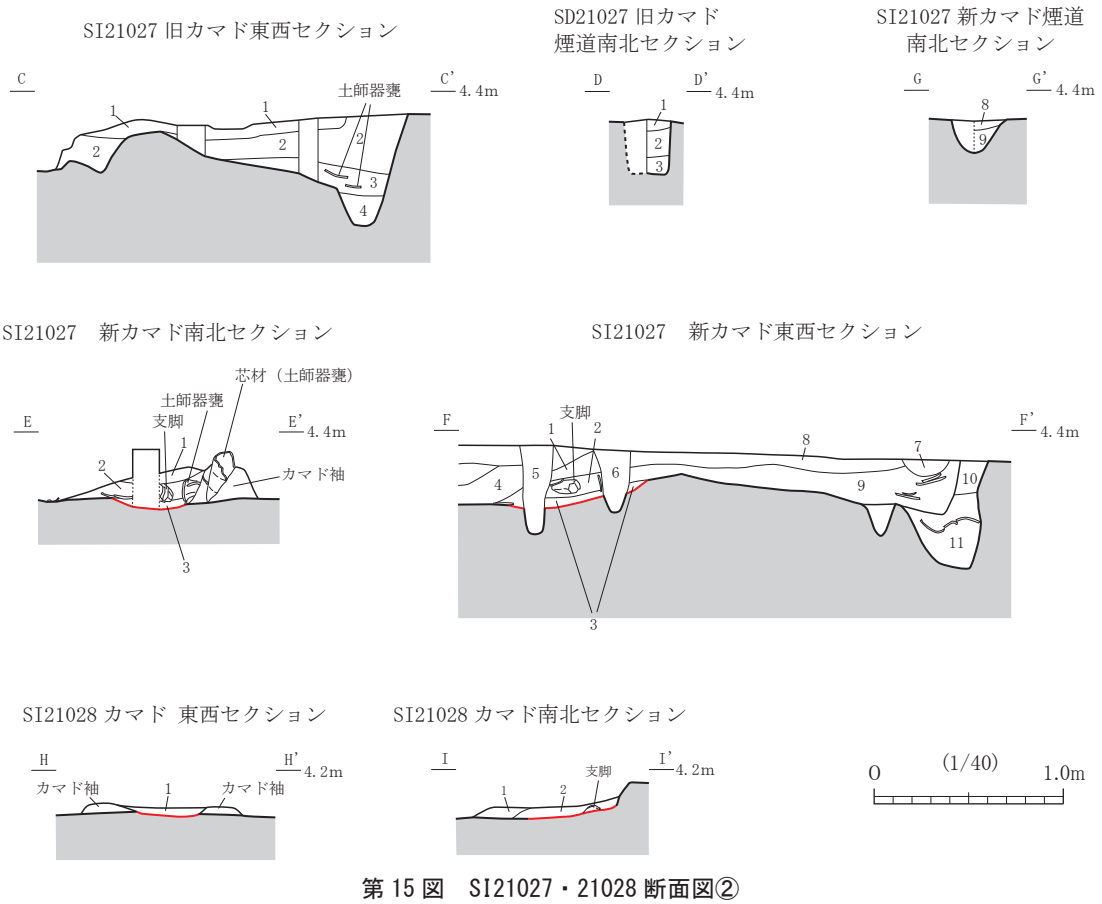
第 14 図　SI21027・21028 平面・断面図

SI21027・21028 東西セクション

No.	土色		土質	備　考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。炭化物・焼土粒をごく微量含む。
2	暗褐色	10YR3/4	シルト	しまり強い。粘性やや弱い。炭化物・焼土粒を少量含む。
3	暗褐色	7.5YR3/4	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。炭化物・焼土粒を微量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。炭化物・焼土粒を多量に含む。
5	暗褐色	10YR3/4	粘土	しまり弱い。粘性強い。にぶい黄褐色粘質シルト小ブロックを多量に含む。
6	暗褐色	10YR3/4	粘土	しまり弱い。粘性やや強い。褐色粘質シルト小ブロックを多量に含む。SI21027 の周溝。
7	暗褐色	10YR3/4	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。SI21028 の覆土。
8	暗褐色	10YR3/4	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。黄褐色シルト小ブロックを少量含む。SI21028 の覆土。
9	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。SI21028 の覆土。
10	黒褐色	10YR2/2	粘土	しまりやや弱い。粘性やや強い。黄褐色粘質シルト小ブロックを多量に含む。
11	黒褐色	10YR3/1	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。小ピットの覆土。

SI21027 南北セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト	しまり強い。粘性なし。炭化物・焼土粒、黄褐色粘質シルト粒を微量、酸化鉄を斑状に少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	しまり強い。粘性なし。炭化物・焼土粒、黄褐色粘質シルト粒を微量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまり強い。粘性やや弱い。炭化物・焼土粒を微量、黄褐色粘質シルト小ブロックを少量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。焼土粒を微量、黄褐色粘質シルト小ブロックを多量に含む。周溝埋土。
5	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	しまり強い。粘性なし。炭化物・焼土粒、黄褐色粘質シルト小ブロックを微量含む。
6	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	しまり強い。粘性なし。炭化物・焼土粒を微量含む。
7	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	しまり強い。粘性なし。炭化物･焼土粒を微量､酸化鉄を少量､灰黄褐色シルト小ブロックを斑状に多量に含む。
8	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	しまり強い。粘性なし。炭化物・焼土粒、酸化鉄を微量、灰黄褐色シルト小ブロックを斑状に少量含む。
9	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。粘性やや弱い。炭化物・焼土粒を微量、黄褐色シルト小ブロックを斑状に少量含む。
10	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。粘性やや弱い。炭化物・焼土粒を微量、灰黄褐色シルト小ブロックを少量含む。



第 15 図　SI21027・21028 断面図②

SI21027 旧カマド煙道東西セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	しまり強い。粘性弱い。炭化物・焼土粒を多量に含む。
2	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。炭化物・焼土粒、黄褐色粘土小ブロックを多量に含む。
3	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。炭化物を多量、焼土粒、黄褐色粘土小ブロックを少量含む。
4	黒褐色	10YR2/3	粘土	しまりやや強い。粘性強い。炭化物を多量、焼土粒、黄褐色粘土粒を少量含む。

SI21027 新カマド東西セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	黒褐色	10YR3/1	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。焼土粒を微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまり弱い。粘性強い。焼土ブロックを多量に、炭化物をやや多く含む。支脚（石製）、土器片多量。
3	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまり弱い。粘性強い。焼土ブロック、被熱した褐色粘土、炭化物を多く含む。最下面は被熱により赤変・硬化する。
4	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。焼土粒を微量含む。
5	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	しまり弱い。粘性やや強い。炭化物をごく微量含む。
6	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	しまり弱い。粘性やや強い。焼土粒、黄褐色粘質シルト粒を少量含む。
7	黒褐色	10YR2/2	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。焼土粒、褐色砂質シルト小ブロックを多量に、炭化物を微量含む。
8	黒褐色	10YR3/2	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。焼土粒を少量含む。
9	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまり弱い。粘性強い。炭化物・焼土粒をやや多く含む。
10	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまり弱い。粘性やや強い。黄褐色粘質シルト小ブロック、炭化物・焼土粒をやや多く含む。
11	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや強い。粘性強い。炭化物をやや多く、焼土粒を微量含む。
12	黒褐色	10YR2/1	粘質シルト	しまり弱い。粘性やや強い。灰を多量に、褐色砂質シルト小ブロックを少量含む。

SI21028 カマド南北セクション

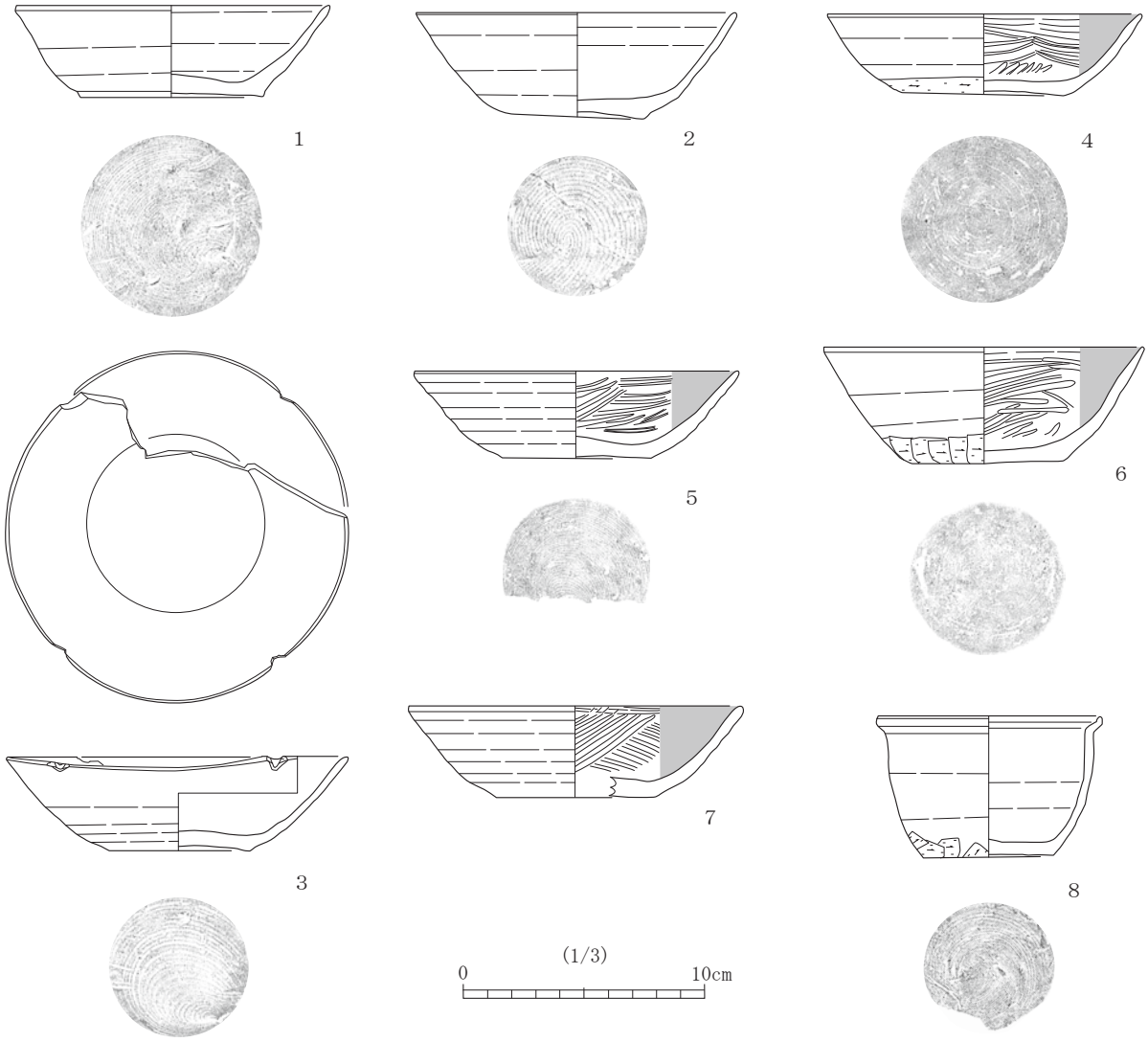
No.	土色		土質	備　　考
1	暗褐色	10YR3/4	粘質シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。炭化物、焼土粒、黄褐色粘土粒を少量含む。
2	暗褐色	10YR3/4	粘質シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。炭化物、焼土粒～小ブロックを非常に多量に含む

SI21028 カマド東西セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	暗褐色	10YR3/4	粘質シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。炭化物、焼土粒～小ブロックを非常に多量に含む

するものとみられる。なお、このほかにも主柱穴を１穴とピットを１口確認している。

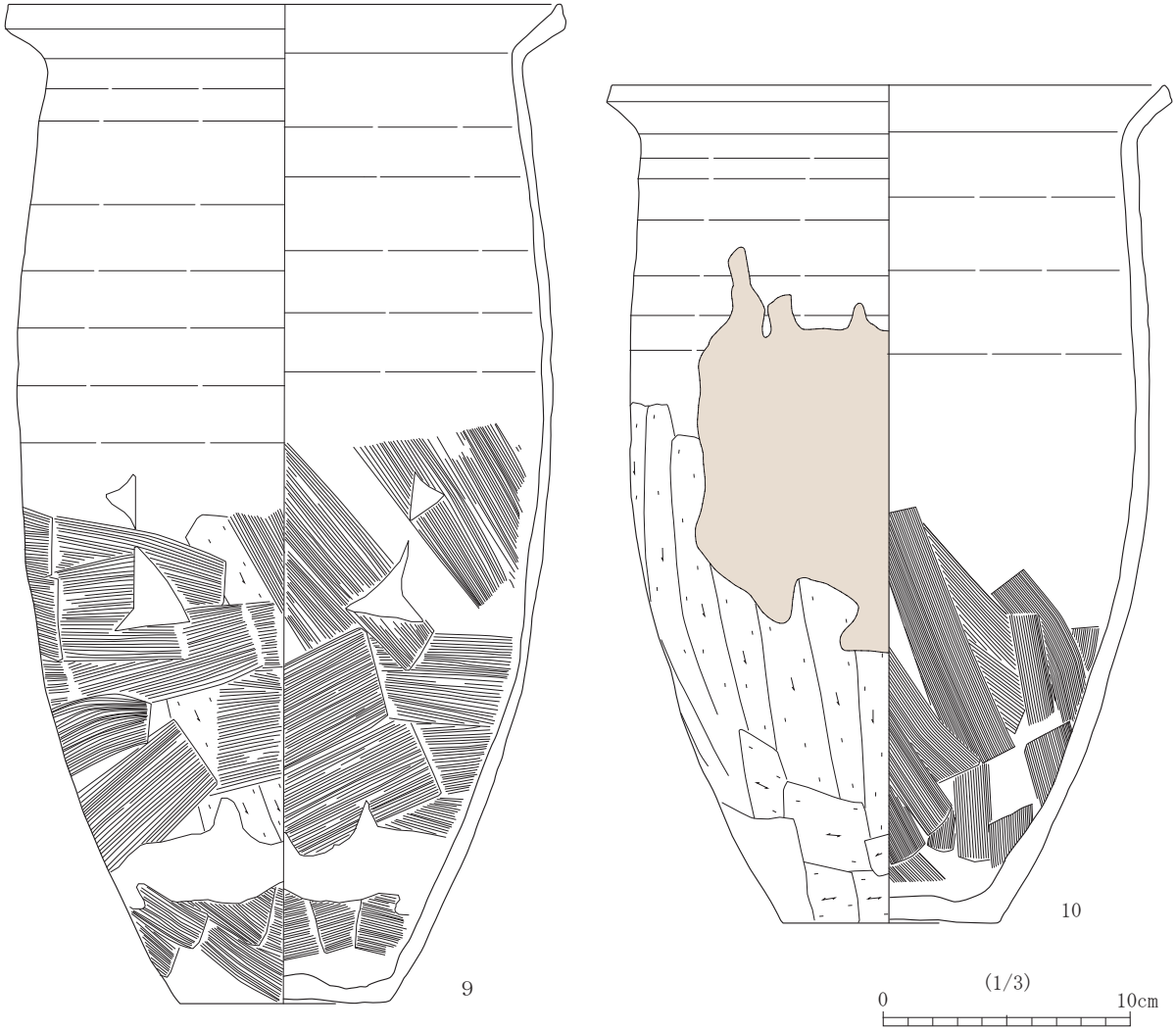
遺物は新カマド燃焼部を中心に、堆積土からも若干量出土している。このうち第 16 図には１～３の須恵器坏、４～７の土師器坏、８の小型甕、第 17 図には９・10 の土師器甕、第 18 図には 11 ～ 13 の土師器甕を図示した。１は底径が比較的大きく、回転糸切りののち未調整である。器形は底部から口縁部に向かって直線的に開く。３は底径が比較的小さく、回転糸切りののち未調整である。器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開く。口唇部３箇所を打ち欠き、輪花皿を模している。４はロクロ成形で、底径が比較的大きく、全面回転ヘラケズリ調整が施してあるため切り離し技法は不明である。器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開く。内面はヘラミガキ調整ののち黒色処理を施している。５はロクロ成形で、底径が比較的小さく、回転糸切りののち未調整である。器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開く。内面はヘラミガキ調整ののち黒色処理を施している。７はロクロ成形で、底径は比較的小さく、回転糸切りののち未調整である。器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開く。内面はヘラミガキ調整ののち黒色処理を施している。10 はロクロ成形で、胴部中位で最大径を測る長胴甕である。頸部から口縁部に向かってやや強く外反し、体部外面下半にヘラケズリ調整を施す。底部は全面ナデ調整のため切り離し技法は不明である。なお、胴部中位に粘土が貼り付けられている。12 はロクロ成形で、回転糸切りののち未調整である。また、底部外縁にヘラケズリ調整を施している。図示した遺物の特徴から、本遺構は８世紀末葉～９世紀初頭頃の年代観が考えられる。



第 16 図　SI21027 出土遺物①

SI21027 遺物観察表①

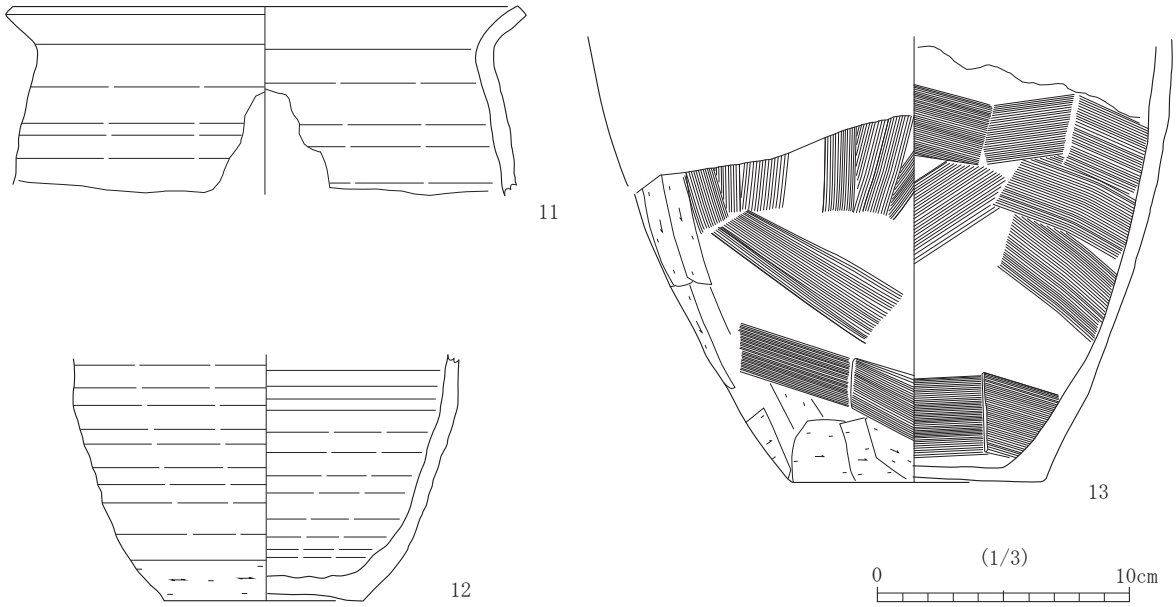
No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量（cm）			写真	登録
							口径	底径	器高	図版	No.
1	SI21027・旧カマド	須恵器	坏	ロクロナデ、底部回転糸切未調整	ロクロナデ	完存	13.1	7.6	3.8	3-9	41
2	SI21027・新カマド煙道新煙出ピット	須恵器	坏	ロクロナデ、底部回転糸切未調整	ロクロナデ	口縁 4/5、底部完存	13.4	5.4	4.3	3-10	47
3	SI21027・新カマド煙道新煙出ピット	須恵器	坏	ロクロナデ、底部回転糸切未調整 口縁残存範囲の３箇所で打ち欠き	ロクロナデ	口縁 3/5、底部完存	14.3	5.8	3.9	3-11	46
4	SI21027・周溝	土師器	坏	ロクロナデのちヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ 体部外面に油煙付着	ヘラミガキ・黒色処理	口縁 3/4、底部完存	13.1	6.8	3.4	4-7	45
5	SI21027・新カマド燃焼部	土師器	坏	ロクロナデ、底部回転糸切未調整	ヘラミガキ・黒色処理	口縁 1/2、底部 2/3	13.6	6.2	3.6		43
6	SI21027・新カマド煙道新煙出ピット	土師器	坏	ロクロナデのちヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理 部分的に灰が固着	口縁 1/2、底部完存	13.3	6.4	4.9	4-5	44
7	SI21027・新カマド燃焼部	土師器	坏	ロクロナデ、底部回転糸切未調整	ヘラミガキ・黒色処理	口縁 1/2、底部 1/3	13.8	6.6	3.8		57
8	SI21027・新カマド燃焼部	土師器	小型甕	ロクロナデ・ヘラケズリ、底部回転糸切未調整	ロクロナデ	完存	9.3	5.4	5.8	4-6	42



第 17 図　SI21027 出土遺物②

SI21027 遺物観察表②

No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量（cm）			写真図版	登録No.
							口径	底径	器高		
9	SI21027・新カマド燃焼部	土師器	甕	ロクロナデ・ヘラケズリのちヘラナデ	ヘラナデ・ロクロナデ	口縁 1/2、胴部 1/2、底部完存	22.2	8.3	40.5	4-9	60
10	SI21027・新カマド構築材	土師器	甕	ロクロナデ・ヘラケズリ、底部ナデ 胴部中位に粘土貼付	ロクロナデ・ヘラナデ	口縁・胴部 1/2、底部 1/3	22.8	8.8	34.0	4-10	59



第 18 図　SI21027 出土遺物③

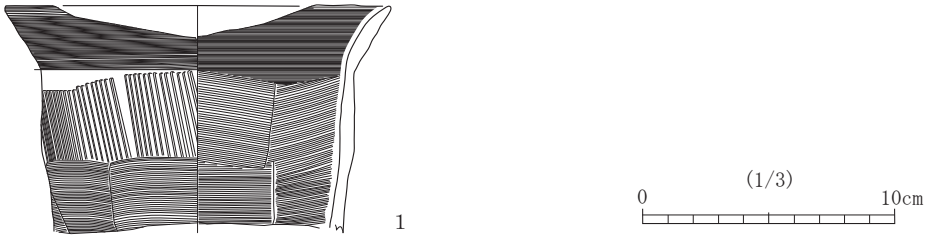
SI21027 遺物観察表③

No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量（cm）			写真図版	登録No.
							口径	底径	器高		
11	SI21027・新カマド煙道旧煙出ピット	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁 1/2	21.1	－	(7.5)		62
12	SI21027・新カマド煙道旧煙出ピット	土師器	甕	ロクロナデ・回転ヘラケズリ、底部回転糸切未調整	ロクロナデ	底部完存	－	7.9	(9.8)		61
13	SI21027・②区上層	土師器	甕	ヘラケズリ・ヘラナデ、底部ナデ	ヘラナデ	底部完存、胴部 1/4	－	10.0	(17.7)		58

【SI21028】（第 14・15・19 図）

Ⅰ区北部に位置する。北半分で掘り下げを行っている。SI21027 と重複関係にあり、これより古い。本遺構の東側は SI21027 により失われているが、SI21027 床面で東側の周溝が確認できたことから、平面形状は方形とみられる。確認した範囲での規模は東西 3.1 m、南北 2.7 m、確認面からの深さは 34 ㎝を測る。西壁で計測した主軸方位は、真北から 18°西へ傾く。カマドは北壁中央につくられ、構築材には暗褐色粘土が用いられている。燃焼部の幅は 45 ㎝、奥行は 53 ㎝である。カマド内の壁面では弱い被熱が認められ、燃焼部底面も赤変している。煙道部は確認されていない。床面は地山である褐色粘質シルトを用いている。また、周溝はカマドを除くすべての壁際で確認されている。なお、主柱穴は確認されていない。

本遺構からの遺物の出土量は極めて少なく、わずかに出土した土師器甕を第 19 図に図示した。1 は非ロクロ成形で、頸部から口縁部に向かって弱く外反する。口縁部外面はヨコナデ調整で、胴部外面はハケメ調整ののちヘラナデ調整を施す。図示した遺物の特徴から、本遺構は 6 世紀末葉～ 7 世紀前半頃の年代観が考えられる。



第 19 図　SI21028 出土遺物

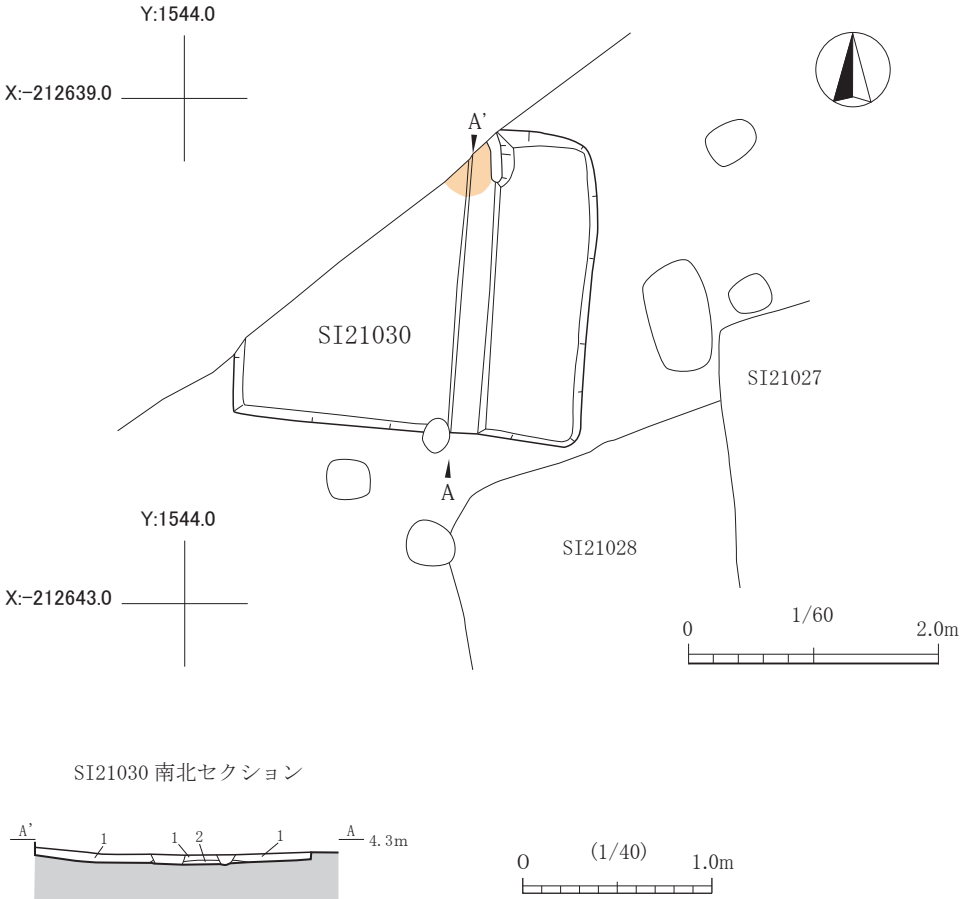
SI21028 遺物観察表

No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量（㎝）			写真図版	登録No.
							口径	底径	器高		
1	SI21028	土師器	甕	ハケメのちヘラナデ・ヨコナデ	ヘラナデ・ヨコナデ	口縁 1/4	15.2	－	(9.0)		39

【SI21030】（第 20・21 図）

Ⅰ区北部に位置する。南側と東側の掘り下げを行っている。本遺構の北側と西側は調査区外へ広がるため不明な点もあるが、平面形状は方形とみられ、規模は東西 2.4 m、南北 2.8 m、確認面からの深さは７㎝を測る。東壁で計測した主軸方位は、ほぼ真北方向である。カマドは北壁東寄りにつくられているが、左袖部分や煙道部は調査区外へ延びるため、規模・形状は不明である。構築材には灰黄褐色粘土が用いられ、確認できた範囲での燃焼部幅は 35 ㎝、奥行は 42 ㎝である。カマド内の壁面では強い被熱が認められ、燃焼部底面も赤変している。床面はにぶい黄褐色粘質シルトを用いた貼床である。主柱穴、及び周溝は確認されていない。

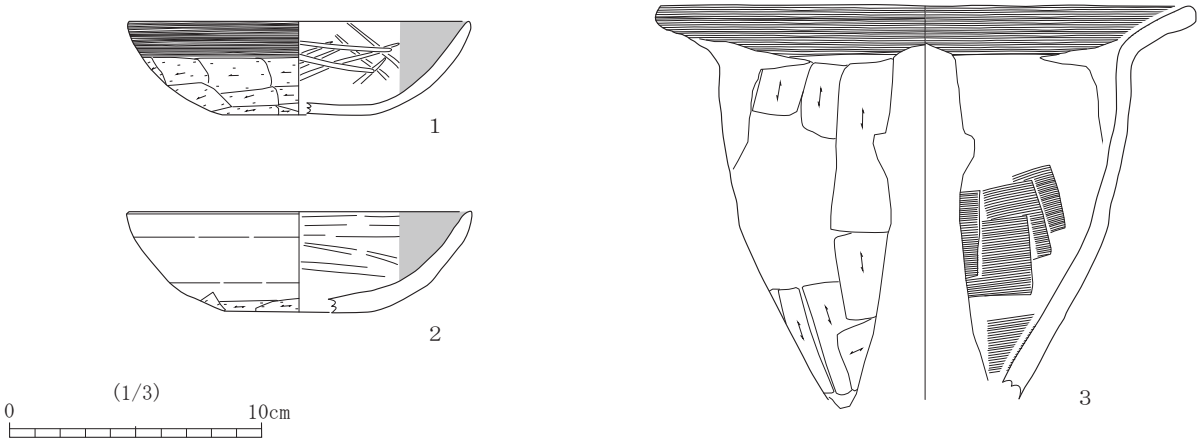
遺物は第 21 図１・２に図示した土師器坏、３の甕が出土した。２はロクロ成形で、丸底気味の平底である。器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開く。底部外面に弱いヘラケズリ調整を施し、内面はヘラミガキ調整ののち黒色処理が施されている。３は非ロクロ成形で、胴部上半で最大径を測る。頸部から口縁部に向かって強く外反し、比較的口縁部が長い。口縁部外面はヨコナデ調整で、胴部外面はヘラケズリ調整を施している。図示した遺物の特徴から、本遺構は８世紀後半頃の年代観が考えられる。



第 20 図　SI21030 平面・断面図

SI21030 南北セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。粘性なし。炭化物、焼土粒を多量、褐色粘土粒～小ブロックを少量含む。



第 21 図　SI21030 出土遺物

SI21030 遺物観察表

No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量（cm）			写真図版	登録No.
							口径	底径	器高		
1	SI21030	土師器	坏	ヘラケズリ・ヨコナデ 磨滅顕著	ヘラミガキ・黒色処理 磨滅顕著	口縁 1/4、底部 1/6	13.6	6.1	3.7		36
2	SI21030	土師器	坏	ロクロナデ・ヘラケズリ、底部は弱いヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁 2/5、底部 1/6	13.8	5.9	4.0		37
3	SI21030・カマド付近	土師器	甕	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラナデ・ヨコナデ	口縁 1/8	21.5	－	(15.7)		51

第２表　竪穴建物跡属性表

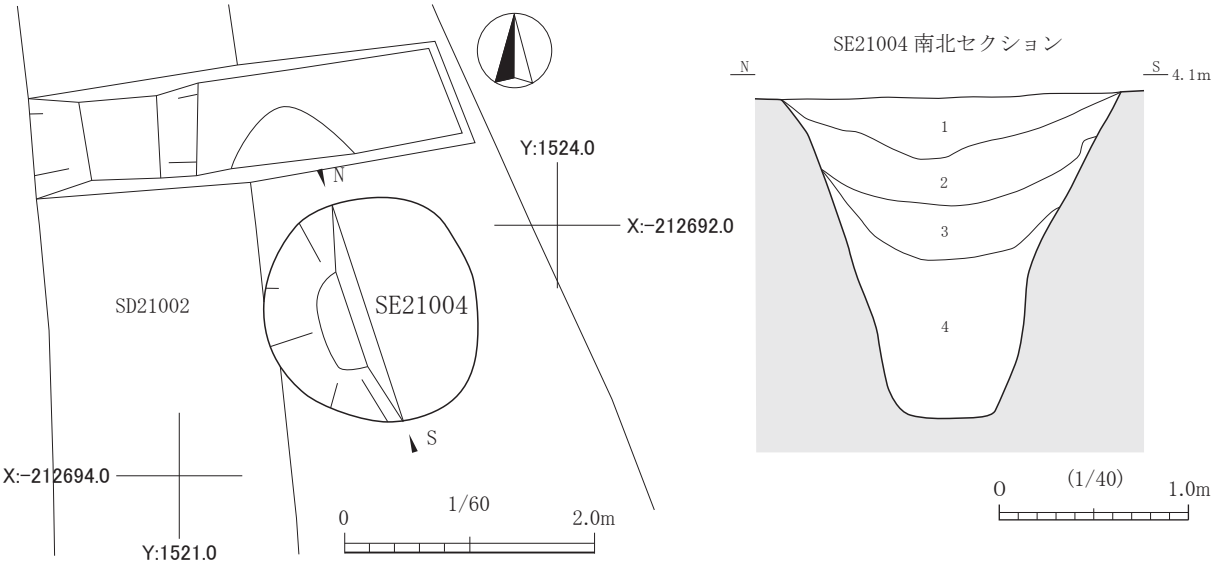
遺構名	平面形	規模（m）東西×南北	軸方位	床	カマド	カマド構築材	煙道部	柱穴	周溝	出土遺物	時期	備考
SI21003	不明	5.0 × (2.4)	真北	貼床	不明	不明	不明	主柱穴２	すべての壁際	須恵器坏、ロクロ成形土師器坏・甕、金属製品（鉄刀・碗型滓）	８世紀末葉～９世紀初頭	
SI21021	方形	9.6 × 9.8	N-38-W	地山	東壁中央（新カマド）	粘土	長煙道（162）（旧カマド）	主柱穴２	カマドを除く全周	非ロクロ成形土師器坏・甕、金属製品（鉄斧）	７世紀後半	SD21022・21023・21024・21026 より古 ７世紀代の竪穴建物跡としては県下最大規模
SI21027	方形	4.1 × 4.3	N- 6 -W	貼床、地山	東壁中央（新カマド）	粘土	長煙道（180）（新カマド）	主柱穴１	カマドを除く全周	ロクロ成形土師器坏・甕・小型甕、須恵器坏、土製支脚	８世紀末葉～９世紀初頭	SI21028 より新 北壁と西壁を拡張するつくり替え有 右袖先端ではロクロ成形土師器甕を逆位に設置し芯材とする
SI21028	方形	3.1 × 4.3	N-18-W	地山	北壁中央	粘土	不明	なし	カマドを除く全周	非ロクロ成形土師器甕	６世紀末葉～７世紀前半	SI21027 より古
SI21030	方形	(2.4) × (2.8)	真北	貼床	北壁東寄り	粘土	不明	なし	なし	非ロクロ成形土師器坏・甕 ロクロ成形土師器坏	８世紀後半	

b. 井戸跡

【SE21004】（第 22 図）

Ⅱ区中央南部に位置する。西側で掘り下げを行っている。SI21010、SD21002 と重複関係にあり、これらより新しい。SI21010 を掘り込む素掘りの井戸であり、平面形状は円形で、規模は長軸 1.8 m、短軸 1.7 mを測る。断面形状は漏斗状であり、確認面からの深さは 170 ㎝を測る。堆積土は４層に分層でき、すべて自然堆積である。

遺物は堆積土中より灰釉陶器埦、土師器甕が出土しているが、いずれも小片のため図示できなかった。なお、本遺構の堆積土は、他の古代遺構の堆積土と色調等で顕著な違いがみられることから古代以降につくられた可能性も考慮される。



第 22 図　SE21004 平面・断面図

SE21004 南北セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。黄褐色少ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト	しまり弱い。粘性やや弱い。炭化物、焼土粒を多量に含む。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性強い。
4	褐色	10YR4/6	細砂	しまり弱い。粘性やや弱い。

第３表　井戸跡属性表

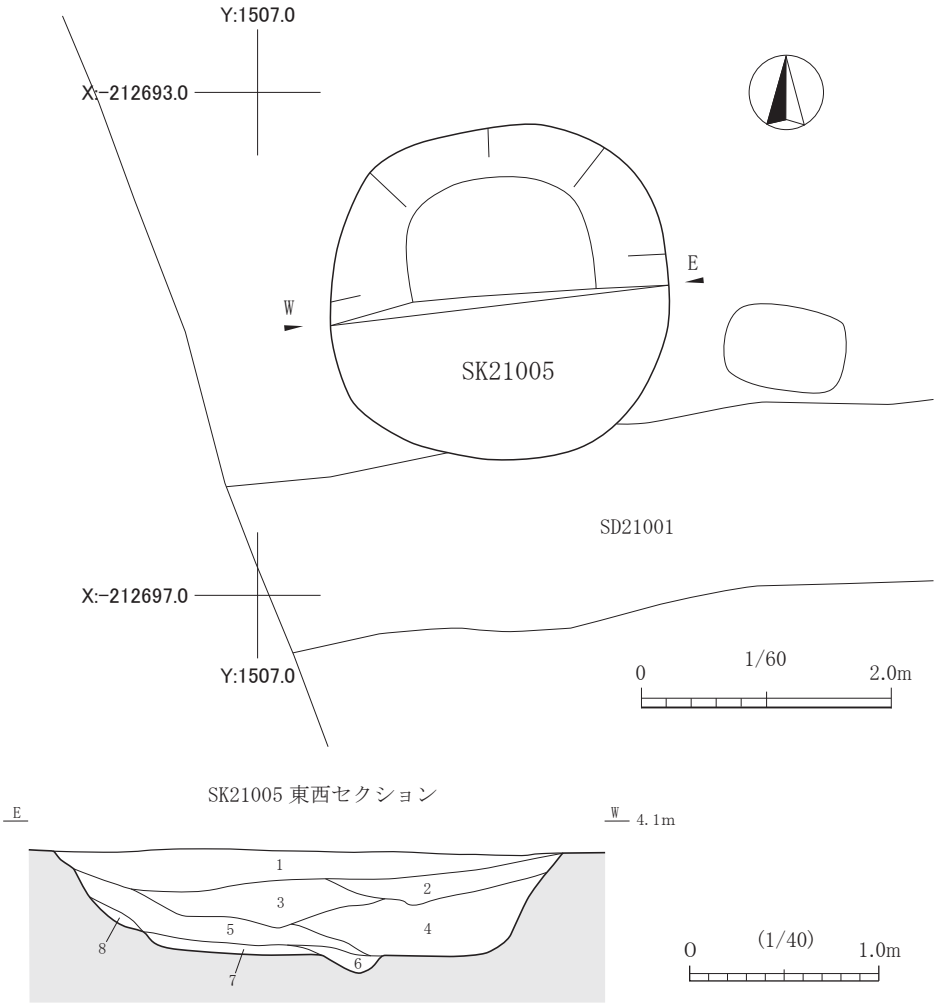
遺構名	構造	平面形	断面形	規模（m）	深さ（m）	堆積土の状況	遺物	備考
SE21004	素掘	円形	漏斗状	1.8 × 1.7	1.7	自然堆積	灰釉陶器埦、ロクロ成形土師器甕	

c. 大型土坑

【SK21005】（第 23 ～ 25 図）

Ⅱ区西部に位置する。北側で掘り下げを行っている。SD21001 と重複関係にあり、これより新しい。平面形状は円形で、規模は長軸 2.71 m、短軸 2.65 mを測る。断面形状は逆台形であり、確認面からの深さは 51 ㎝を測る。堆積土は８層に分層でき、すべて人為堆積である。なお、中位から下位の土層では焼土塊・炭化物が多くみられたが、被熱の痕跡は認められていない。

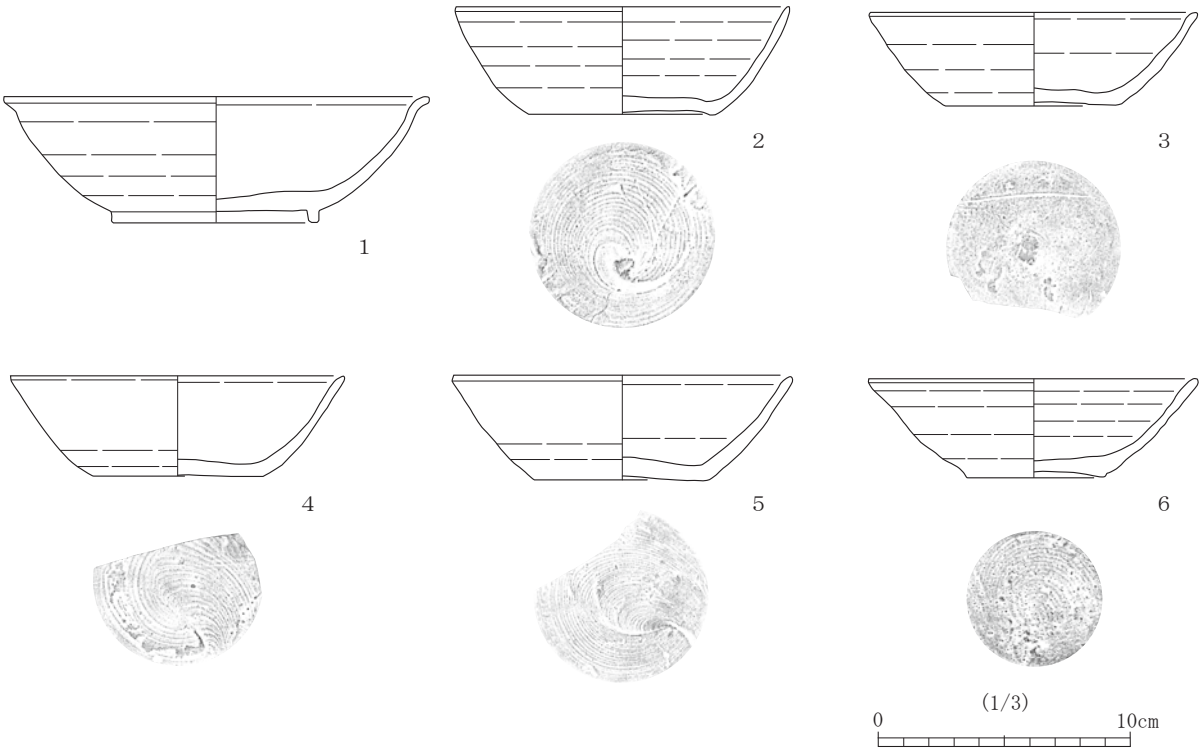
遺物は各層から土師器・須恵器・灰釉陶器が比較的多く出土している。このうち、第 24 図の灰釉陶器埦、２～６の須恵器坏、第 25 図７～９の土師器坏、金属製品の鑿を図示した。１は底部に角高台を貼り付け、内面は全面灰釉ハケ塗りで焼成時に自然釉が融着している。また、重ね焼きの際に用



第 23 図　SK21005 平面・断面図

SK21005 東西セクション

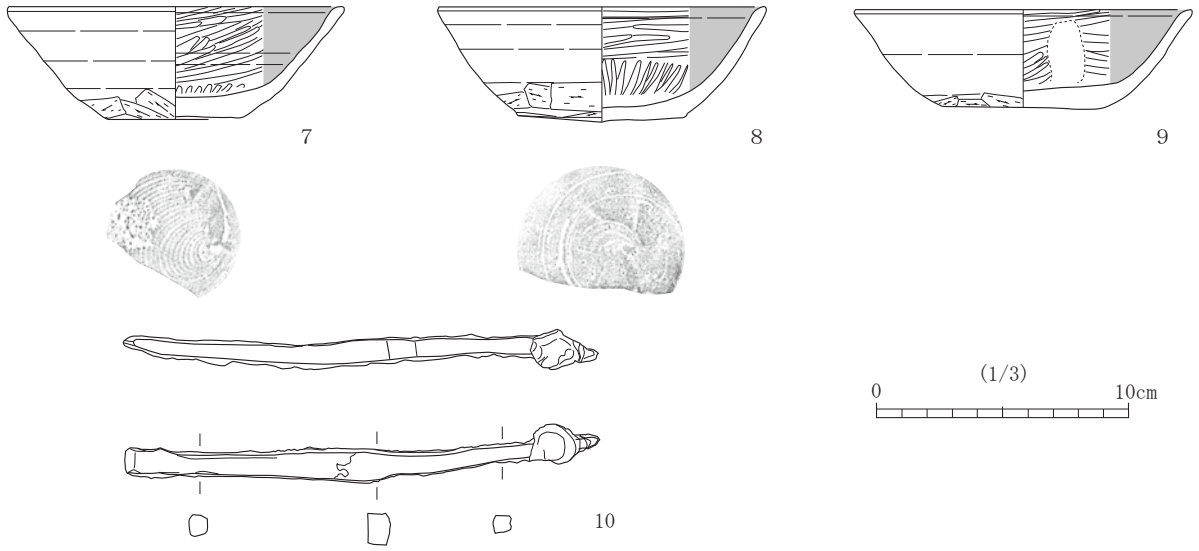
No.	土色		土質	備　考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。炭化物、焼土粒をごく微量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。灰黄褐色砂質シルト粒を少量、炭化物、焼土粒を微量含む。
3	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	しまり弱い。粘性やや強い。炭化物、焼土粒をやや多く含む。
4	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。炭化物をやや多く、焼土粒を多量に含む。
5	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。炭化物を極めて多量、焼土粒をごく微量含む。
6	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。酸化鉄を少量含む。
7	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。上面に酸化鉄を集積する。にぶい黄褐色砂質シルトを多量に含む。
8	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。炭化物を微量含む。



第 24 図　SK21005 出土遺物①

SK21005 遺物観察表①

No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量（cm）			写真図版	登録No.
							口径	底径	器高		
1	SK21005	灰釉陶器	埦	ロクロナデ、高台貼付のち回転ナデ	ロクロナデ、灰釉ハケ塗り+自然降灰、融着物	口縁 1/8、底部完存	17.0	8.2	5.0	3-1	1
2	SK21005	須恵器	坏	ロクロナデ、底部回転糸切未調整	ロクロナデ	完存	13.4	7.5	4.3	3-7	14
3	SK21005	須恵器	坏	ロクロナデ、底部ヘラギリのちナデ 底部に線刻	ロクロナデ	口縁 1/4、底部 4/5	13.2	7.0	3.7		15
4	SK21005	須恵器	坏	ロクロナデ、底部回転糸切未調整	ロクロナデ	口縁 1/2、底部 3/4	13.4	6.9	4.0		16
5	SK21005	須恵器	坏	ロクロナデ、底部回転糸切未調整	ロクロナデ	口縁 1/2、底部 4/5	13.5	7.0	4.2		76
6	SK21005	須恵器	坏	ロクロナデ、底部回転糸切未調整	ロクロナデ	口縁 4/5、底部完存	13.2	5.5	3.9	3-8	17



第 25 図　SK21005 出土遺物②

SK21005 遺物観察表②

No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量（cm）			写真図版	登録No.
							口径	底径	器高		
7	SK21005	土師器	坏	ロクロナデのちヘラケズリ、底部回転糸切未調整	ヘラミガキ・黒色処理	口縁 1/3、底部 1/2	13.3	5.2	4.5		10
8	SK21005	土師器	坏	ロクロナデのちヘラケズリ、底部回転糸切のち回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁 1/4、底部 1/3	13.1	6.7	4.6		9
9	SK21005	土師器	坏	ロクロナデのちヘラケズリ、底部回転糸切のち弱いケズリ・ナデ	ヘラミガキ・黒色処理一部で器表が薄く剥離	口縁 1/3、底部完存	13.5	6.5	3.9		8
10	SK21005	金属製品	鑿	全長 19.0 cm、刃先幅 1.1 cm、茎幅 0.6 cm、厚み 0.5 cm、重量 71.5 g		完存				4-11	53

第４表　大型土坑属性表

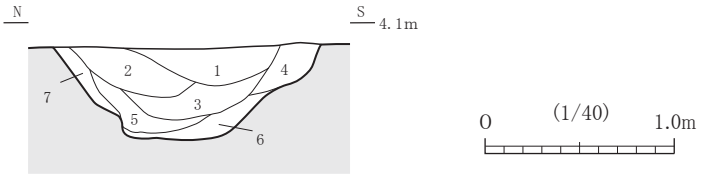
遺構名	平面形	断面形	規模（m）			堆積土の状況	遺物	備考
			長軸	短軸	深さ			
SK21005	円形	逆台形	2.71	2.65	0.51	人為堆積	灰釉陶器椀、ロクロ成形土師器坏、須恵器坏、金属製品（鑿）	SD21001 より新

いる三叉トチンの痕が認められず、融着物が付着していることから、重ね焼きの際に一番上に重ねられた個体か、重ね焼きせずに焼成された個体と考えられる。器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開き、口縁部はやや強く外反する。角高台であることと、施釉が内面全面にハケ塗りされていることから、猿投窯跡群で生産された黒笹 14 号窯式期の所産と考えられる。２は底径が比較的小さく、回転糸切りののち未調整である。器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開く。３は底径が比較的小さく、回転ヘラ切りののちナデ調整を施す。また、底部に一条の線刻が認められる。器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開く。８はロクロ成形で、底径が比較的小さい。底部は回転糸切りののち回転ヘラケズリ調整を施し､底部外縁にヘラケズリ調整を施す｡器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開く。内面はヘラミガキ調整ののち黒色処理を施している。９はロクロ成形で、底径が比較的小さく、底部は回転糸切りののち弱いケズリやナデ調整を施し、底部外縁にヘラケズリ調整を施す。器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開く。10 の鑿は完形で出土し、全長 19.0 cm、刃先幅 1.1 cmを測る。図示した遺物の特徴から、本遺構は９世紀半ば頃の年代観が考えられる。

d. 溝跡

【SD21001】（第７・26・27図）

Ⅱ区南部に位置する。東西溝であり、新旧２時期のものを同位置で確認している。SK21005、SD21002と重複関係にあり、SK21005より古く、SD21002の新段階とは同時期に機能していた可能性がある。本遺構の西側は調査区外へさらに延びるが、調査区内での総検出長は13.25ｍで、主軸方位は真北方向にほぼ直交するような形で、東西の軸線上に延びている。上幅1.20ｍ前後、底面幅は概ね0.60ｍ～1.15ｍであるが、本遺構の東側では0.20ｍ程度と急激に狭くなる。断面形状は北側に段が付く不定形を呈する。底面は比較的平坦であるが、堆積土は７層に分層でき、土層観察の結果から１～３層は人為堆積で、そのほかは自然堆積とみられる。

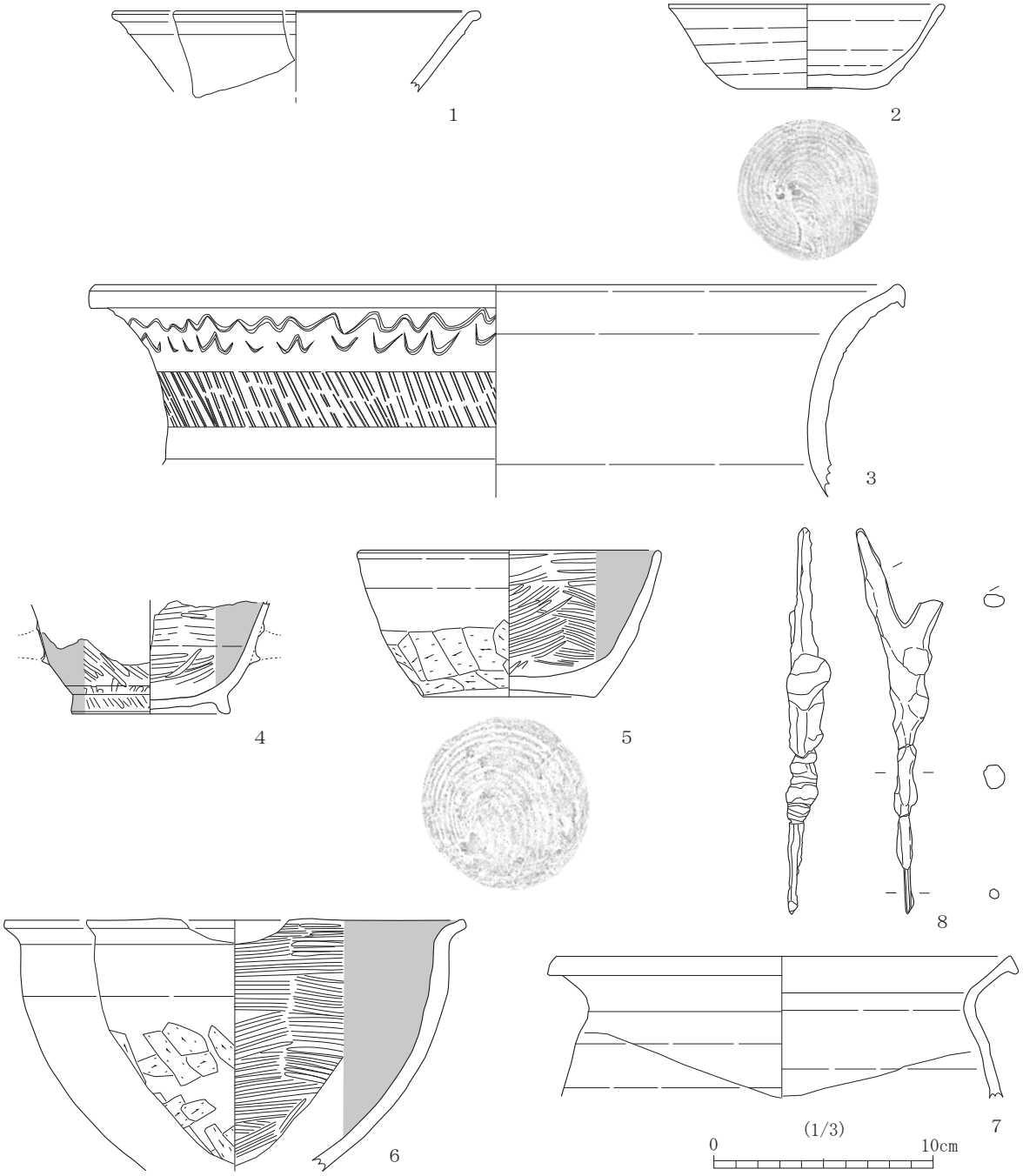


第26図　SD21001断面図

SD21001

No.	土色		土質	備　考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり弱い。粘性やや弱い。炭化物、焼土粒を微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり弱い。粘性やや弱い。炭化物、焼土粒を多量に含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。にぶい黄褐色砂質シルト小ブロックを少量含む。
4	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。暗褐色シルト小ブロックを少量含む。
5	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。褐色粘土粒をやや多く含む。
6	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性強い。褐色粘土中ブロックを多量に含む。
7	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまり弱い。粘性やや弱い。褐色粘土粒を微量含む。

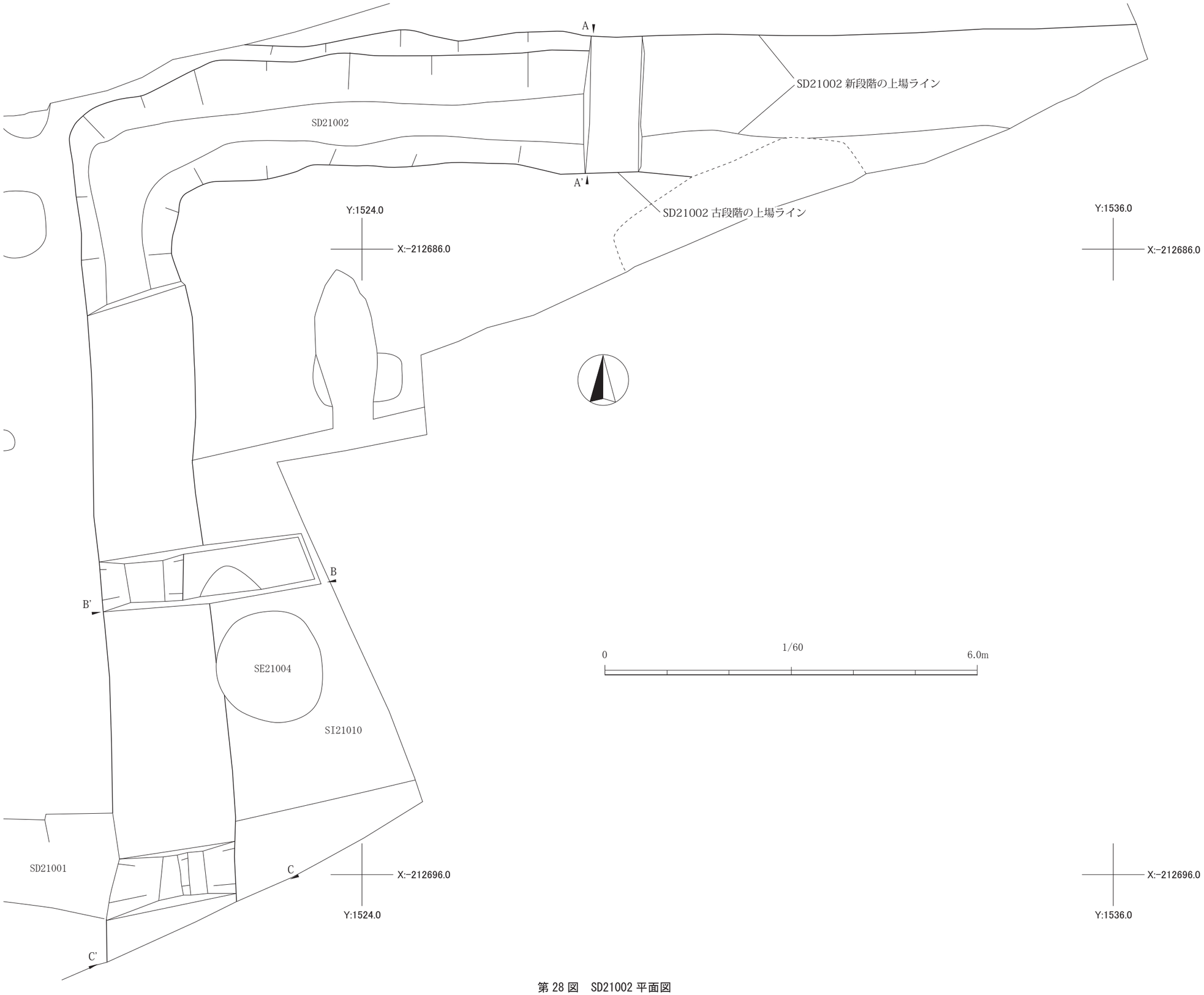
遺物は炭化物・焼土を非常に多く含む堆積土上層から出土している。第27図１に図示した灰釉陶器埦、２の須恵器坏、３の甕、４の土師器双耳坏、５の埦、６の鉢、７の甕、８の鉄鏃が出土している。１は底部欠失のため底径は不明だが、体部から口縁部に向かって直線的に開き、口唇部が強く外反する。内面は灰釉ハケ塗りである。欠失のため高台の形状と内底面の施釉が明らかでないものの、SD21001はSK21005と重複し、それより古いことから９世紀前半頃の年代観に収まると考えられること、重複するSK21005から黒笹14号窯式期と考えられる灰釉陶器碗が出と度していることから、猿投窯跡群で生産された黒笹14号窯式期の所産としたい。２は底径が比較的小さく、回転糸切りののち未調整である。器形は底部から口縁部に向かって直線的に開く。３は頸部から口縁部に向かって強く外反し、口唇部が下に折れる。頸部に平行タタキ調整ののちロクロナデ調整を施し、その上部に櫛描波状文を描く。４はロクロ成形で、器形は底部から体部上半に向かって直線的に立ち上がる。欠失のため形状は不明ながら、体部中位の正対した位置に把手（耳）が付く。また、高台貼り付けののち高台内、及び内外面をヘラミガキ調整し、黒色処理を施している。５はロクロ成形で、回転糸切りののち未調整である。器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開く。外面の体部下半にヘラケズリ調整を施し、内面はヘラミガキ調整ののち黒色処理を施す。８の雁又式鉄鏃は一方を欠くものの、二股部先端の幅が狭いＶ字状を呈するものである。鏃身部の抉りは深く、先端から窪みまでは4.8㎝を測る。錆が固着していることからＸ線透過調査においても関の形状は不明瞭で、同様に鏃身長と茎長それぞれの計測はできないが、長茎化が著しいことは看手できるため、鏑を装着していた可能性を考慮したい。図示した遺物の特徴から、本遺構は９世紀前半頃の年代観が考えられる。



第 27 図　SD21001 出土遺物

SD21001 遺物観察表

No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量（cm）			写真図版	登録No.
							口径	底径	器高		
1	SD21001	灰釉陶器	埦	ロクロナデ	ロクロナデ、灰釉ハケ塗り	口縁 1/8	17.0	－	(3.7)	3-2	3
2	SD21001	須恵器	坏	ロクロナデ、底部回転糸切未調整	ロクロナデ	口縁 1/2、底部完存	12.6	6.2	3.9	3-5	11
3	SD21001	須恵器	甕	平行タタキのちロクロナデ 頸部に櫛描波状文	ロクロナデ	口縁 1/4	37.0	－	(9.7)	3-3	22
4	SD20001	土師器	双耳坏	ヘラミガキ・黒色処理、高台貼付、高台内ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	底部完存	－	7.3	(5.2)	4-2	6
5	SD21001	土師器	埦	ロクロナデのちヘラケズリ、底部回転糸切未調整	ヘラミガキ・黒色処理	口縁 1/2、底部完存	14.0	8.0	6.7	4-3	7
6	SD21001	土師器	鉢	ロクロナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁 1/10	21.1	－	(11.5)		21
7	SD21001	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁 1/4	21.5	－	(6.5)		26
8	SD21001	金属製品	鉄鏃	雁又式 全長 17.5 cm、鏃身幅 3.5 cm、茎幅 0.4 cm、重量 41.0 g		ほぼ完存				4-11	87



第 28 図　SD21002 平面図

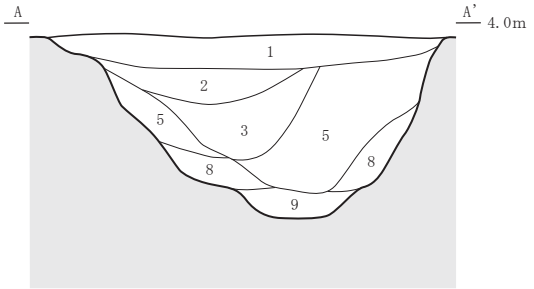
【SD21002】（第 28 ～ 30 図）

Ⅱ区東部から西進し、中央北部で南方向へ直角に曲がるＬ字状の大溝であり、新旧２時期のものを同位置で確認している。SI21010、SD21001、SE21004 と重複関係にあり、SE21004 より古く、SI21010 より新しい。また、本遺構の新段階においては、SD21001 と同時期に機能していた可能性がある。本遺構の東側、及び南側は調査区外へさらに延びるが、調査区内での総検出長は 30.50 ｍで、主軸方位は真北を強く意識してつくられている。上幅 1.80 ｍ～ 2.00 ｍ、底面幅は 0.60 ｍ～ 1.15 ｍであり、断面形状は総じて片側に段が付くような様相を呈する不定形である。底面は比較的平坦であるが、東西軸は緩やかに西側へ、南北軸は緩やかに南側へ傾斜している。土層観察からは、旧段階の大溝が自然堆積によって埋没する途中に、ほぼ同位置で規模を縮小した新段階の溝を掘り直していることが確認できる。

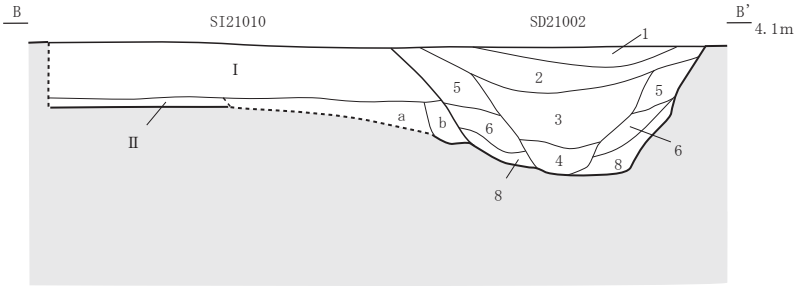
遺物は新段階の最上層から主に出土している。第 30 図１に図示した須恵器蓋、２～４の坏、５・６の円面硯、７・８の長頸瓶、９の土師器坏、10 の須恵器坏、11 の鉄鏃が出土している。１は器形が比較的扁平で、端部が短く折れてカエリがつかない。欠失のためツマミ部の形状は不明である。２は底径が比較的小さく、回転糸切りののち未調整である。器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開く。５は円面硯の脚部で、脚部上半から端部に向かって弱く外反し、端部が短く折れて立ち上がる。また、外面に山形状の線刻が３条描かれている。７は底部に方形の高台を貼り付けている。外面の一部に自然釉が融着し、内底面中央にも焼成中に開口部から入り込んだ降灰による自然釉が融着している。９はロクロ成形で、底径は大きく、回転糸切りののち未調整である。器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開き、器高は低平である。外面の体部下半にヘラケズリ調整を施し、内面はヘラミガキ調整ののち黒色処理を施す。なお、内底面は横位のヘラミガキ調整である。10 は体部から口縁部に向かって内弯気味に開く器形の須恵器坏片で、体部外面に「申」と思われる墨書が認められる。11 は残存長 17.5 ㎝を測る平根式鉄鏃である。全体的に錆化が著しいが、Ｘ線透過調査から鏃身長は 5.8 ㎝､鏃身幅は 3.7 ㎝を測る。腸抉は鏃身先端から 2.5 ㎝ほどの深さに達する。箆被部は短く、関から先の茎部は細くなる。

器形や切り離し技法などから、９の土師器坏のみ８世紀半ば～後半頃の年代観と捉えられるものの、他に図示した遺物の特徴から、新段階の大溝は９世紀前半～半ば頃に埋没したものと考えられる。古段階の大溝から遺物は出土していないが、これまでの原遺跡内での調査では真北方向を基調とする掘立柱建物群が８世紀前半～後半にかけて営まれていること、新段階の大溝の埋没時期から考えて機能時期は９世紀初頭あるいは８世紀末葉まで遡ることが推定されることから、これに先行する古段階の大溝は８世紀代につくられた可能性が高いと考えられる。

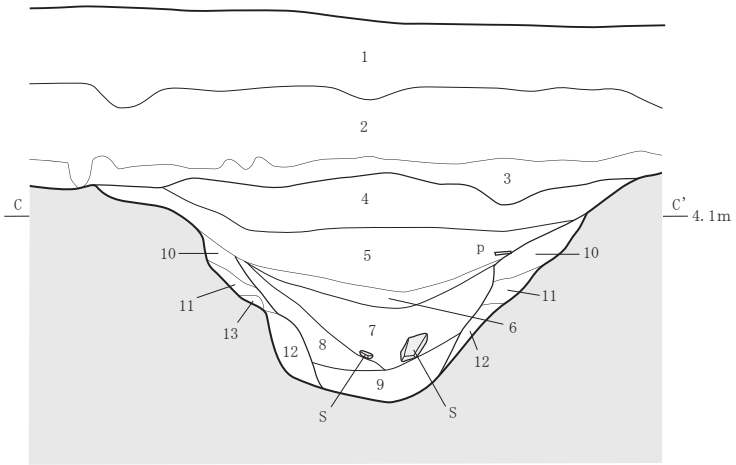
SD21002 南北セクション

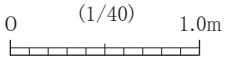


SD21002・SI21010 東西セクション



SD21002 東西セクション②





第 29 図　SD21002 断面図

SD21002 南北セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。褐灰色粘土小ブロックをやや多く含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。にぶい黄褐色シルト粒、炭化物を微量含む。遺物を多く含む。新段階の溝跡。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。にぶい黄褐色シルト粒を少量、焼土粒を微量含む。遺物を多く含む。新段階の溝跡。
4	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。にぶい黄褐色シルト小ブロックを少量含む。新段階の溝跡。
5	黒褐色	10YR3/1	シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。暗褐色シルト小ブロックをやや多く含む。旧段階の溝跡。
6	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや強い。粘性強い。にぶい黄褐色砂質シルト粒を微量含む。旧段階の溝跡。
7	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色シルト中ブロックを少量含む。旧段階の溝跡。
8	黒褐色	10YR2/2	砂質シルト	しまり弱い。粘性弱い。地山である褐色砂を多量に含む。旧段階の溝跡。
9	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまり弱い。粘性強い。褐色粘土大ブロックを多量に含む。旧段階の溝跡。

SI21010・SD21002 東西セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。褐灰色粘土小ブロックをやや多く含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。にぶい黄褐色シルト粒、炭化物を微量含む。遺物を多く含む。新段階の溝跡。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。にぶい黄褐色シルト粒を少量、焼土粒を微量含む。遺物を多く含む。新段階の溝跡。
4	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。にぶい黄褐色シルト小ブロックを少量含む。新段階の溝跡。
5	黒褐色	10YR3/1	シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。暗褐色シルト小ブロックをやや多く含む。旧段階の溝跡。
6	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや強い。粘性強い。にぶい黄褐色砂質シルト粒を微量含む。旧段階の溝跡。
7	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色シルト中ブロックを少量含む。旧段階の溝跡。
8	黒褐色	10YR2/2	砂質シルト	しまり弱い。粘性弱い。地山である褐色砂を多量に含む。旧段階の溝跡。
Ⅰ	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。炭化物、焼土粒を微量含む。
Ⅱ	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。炭化物、焼土粒をやや多く含む。黒褐色粘質シルト小ブロックを少量含む。SI21010 の貼床。
a	黒褐色	10YR3/1	シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。灰黄褐色粘質シルト中ブロックを少量、炭化物を微量含む。
b	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。灰黄褐色粘質シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。周溝か。

SD21002 東西セクション②

No.	土色		土質	備　　考
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	しまり弱い。粘性やや強い。炭化物、焼土粒を多量に含む。現在の水田耕作土。
2	暗褐色	10YR3/4	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。褐色粘質シルト粒を少量、炭化物を微量含む。
3	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。褐色粘質シルト小ブロック、にぶい黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
4	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
5	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。灰褐色粘質シルト小ブロックを少量含む。
6	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。にぶい黄褐色シルト粒、炭化物を多量に含む。新段階の溝跡。
7	黒褐色	10YR3/2	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。にぶい黄褐色シルト粒、焼土粒を微量含む。新段階の溝跡。
8	黒褐色	10YR3/2	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。にぶい黄褐色シルト粒を微量含む。新段階の溝跡。
9	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。にぶい黄褐色シルト小ブロックを多量に含む。新段階の溝跡。
10	黒褐色	10YR3/1	シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。暗褐色シルト小ブロックを微量含む。旧段階の溝跡。
11	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや強い。粘性強い。にぶい黄褐色シルト粒を多量に含む。旧段階の溝跡。
12	黒褐色	10YR2/2	砂質シルト	しまり弱い。粘性弱い。地山である褐色砂質シルトを多量に含む。旧段階の溝跡。
13	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。地山である褐色砂質シルトを多量に含む。旧段階の溝跡。

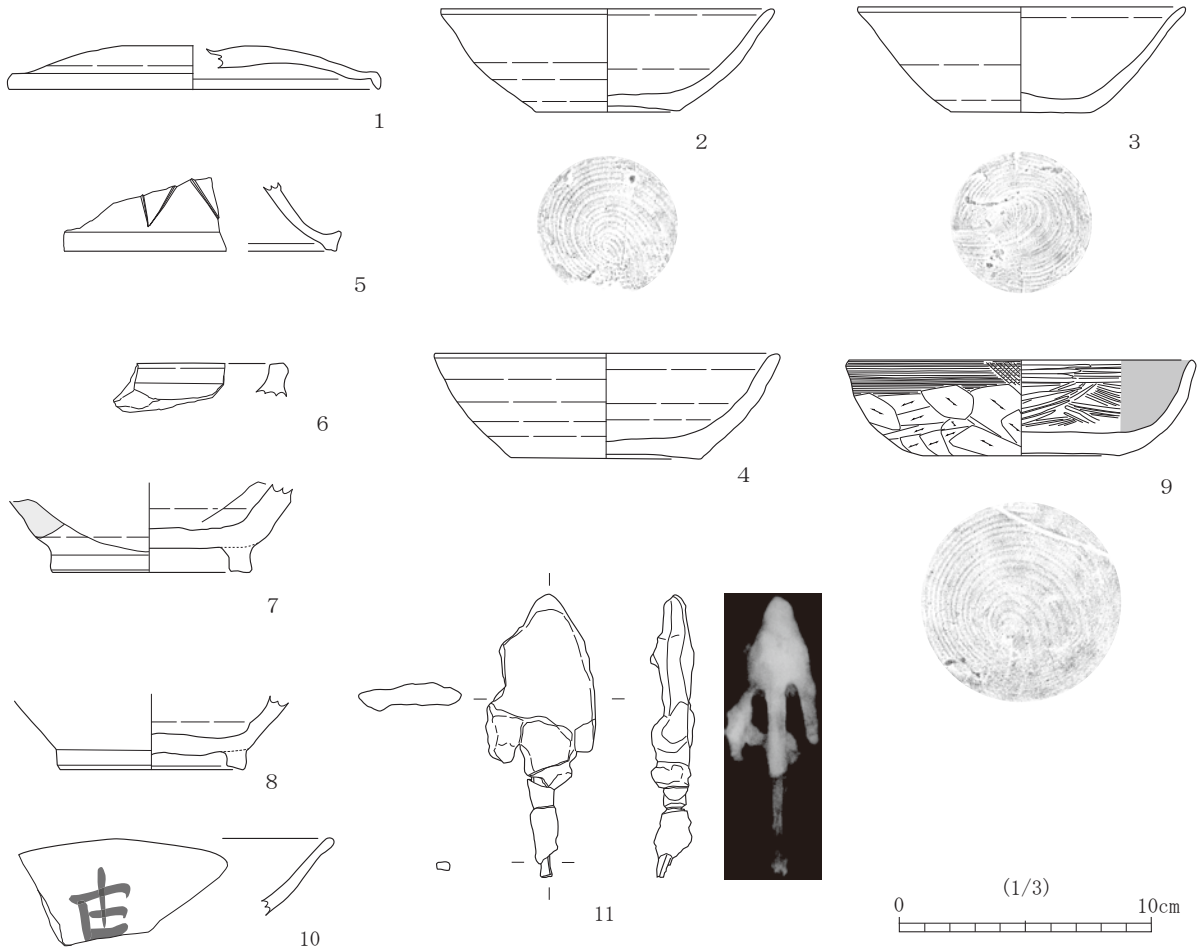
【SD21022】（第６・31・32 図）

Ⅰ区中央南部に位置する東西溝である。SI21021、SD21023・21026 と重複関係にあり、SI21021、SD21026 より新しく、SD21023 より古い。本遺構の東側、及び西側は調査区外へさらに延びるが、調査区内での総検出長は14.80ｍで、主軸方位は真北から62°東へ傾く。上幅1.50ｍ前後、底面幅は0.40ｍ前後であり、断面形状は南側が緩やかに立ち上がる逆台形である。底面は比較的平坦であるが緩やかに西側へ傾斜している。堆積土は８層に分層でき、すべて人為堆積である。

遺物は第 32 図１に図示した土師器高台坏、２の坏が出土している。１はロクロ成形で、比較的高足で薄手の高台を貼り付けている。内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されている。２はロクロ成形で、底径は比較的小さく、底部全面への回転ヘラケズリ調整と底部外縁にヘラケズリ調整を施す。器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開く。内面はヘラミガキ調整ののち黒色処理を施す。図示した遺物の特徴から、本遺構は９世紀後半頃の年代観が考えられる。

【SD21023】（第６・31・32 図）

Ⅰ区西部に位置する南北溝である。SI21021、SD21022・21024 と重複関係にあり、これらより新しい。本遺構の北側、及び南側は調査区外へさらに延びるが、調査区内での総検出長は 20.08 ｍで、主軸方位は真北から20°西へ傾く。上幅0.48ｍ前後、底面幅は0.25ｍ前後であり、断面形状はＵ字状である。底面は比較的平坦であるが緩やかに北側へ傾斜している。堆積土は２層に分層でき、すべて人為堆積である。



第 30 図　SD21002 出土遺物

SD21002 遺物観察表

No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量（cm）			写真図版	登録No.
							口径	底径	器高		
1	SD21002	須恵器	蓋	ロクロナデ	ロクロナデ	カエリ部・天井部 1/8	14.8	－	(1.7)		74
2	SD21002	須恵器	坏	ロクロナデ、底部回転糸切未調整	ロクロナデ	口縁 1/3、底部完存	13.3	5.8	4.1		12
3	SD21002	須恵器	坏	ロクロナデ、底部回転糸切未調整	ロクロナデ	口縁 1/3、底部完存	13.2	5.8	4.2		19
4	SD21002・上層	須恵器	坏	ロクロナデ、底部回転糸切未調整	ロクロナデ	口縁 1/2、底部完存	13.8	7.5	4.2		48
5	SD21002・上層	須恵器	円面硯	ロクロナデ 山形状の線刻３条	ロクロナデ	脚部 1/8	－	－	(2.9)	3-13	40
6	SD21002・上層	須恵器	円面硯	ロクロナデ	ロクロナデ 自然降灰	堤部破片	－	－	(1.8)		55
7	SD21002	須恵器	長頸瓶	ロクロナデ、高台貼付 降灰による自然釉	ヘラナデ 内底面中央に自然釉付着	高台 1/2	－	7.9	(3.5)	3-12	63
8	SD21002・上層	須恵器	長頸瓶	ロクロナデ、高台貼付	ロクロナデ	高台 1/2	－	8.5	(3.0)		49
9	SD21002・上層	土師器	坏	ロクロナデのち弱いヘラケズリ、底部回転糸切未調整	ヘラミガキ・黒色処理 内底面は横位のヘラミガキ	口縁 1/2、底部完存	13.9	7.8	3.8	4-1	5
10	SD21002	須恵器	坏	ロクロナデ 体部外面に「申？」字の墨書	ロクロナデ	口縁 1/8	－	－	(3.3)		77
11	SD21002・上層	金属製品	鉄鏃	平根式 残存長 11.2 cm、鏃身幅 4.3 cm、茎幅 0.4 cm、重量 57.5 g		ほぼ完存				4-11	86

遺物は第32図に図示した３の土師器坏が出土している。３はロクロ成形で、底径は比較的小さく、回転糸切りののちナデ調整を施す。器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開き、口縁部は弱く外反する。外面は体部下半に回転ヘラケズリ調整を施し、内面はヘラミガキののち黒色処理を施しているが磨滅が顕著である。図示した遺物の特徴から、本遺構は10世紀前半頃の年代観が考えられる。

【SD21024】（第６・31・32図）

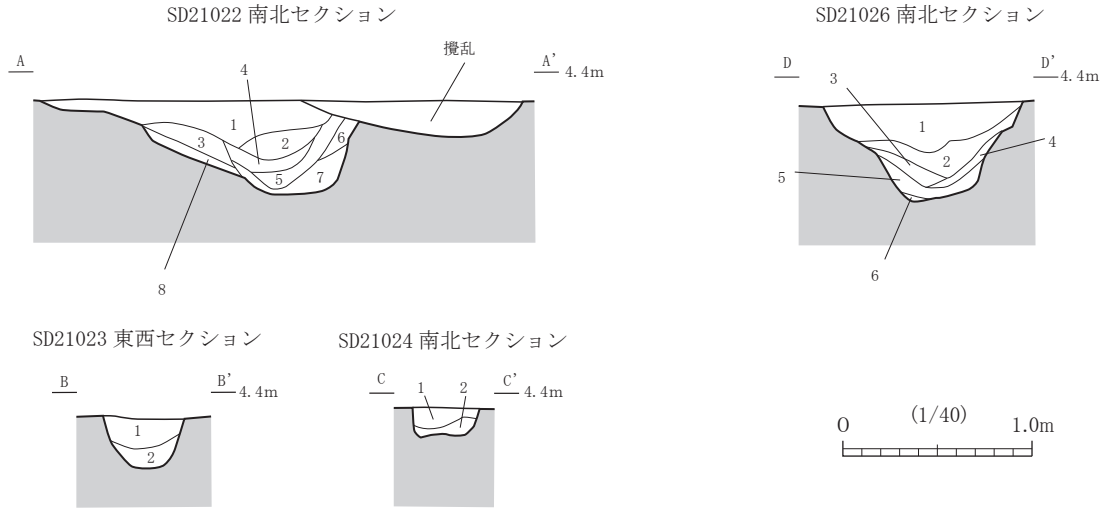
Ⅰ区中央部に位置する東西溝である。SI21021、SD21023と重複関係にあり、SI21021より新しく、SD21023より古い。本遺構の東側、及び西側は調査区外へさらに延びるが、調査区内での総検出長は16.80ｍで、主軸方位は真北から80°東へ傾く。上幅0.50ｍ前後、底面幅は0.35ｍ前後であり、断面形状は箱状である。底面は比較的平坦であり、間隔がまばらな小ピットを複数確認している。堆積土は２層に分層でき、すべて人為堆積である。

遺物は第32図に図示した４・５の土師器甕が出土している。５は頸部から口縁部に向かって強く外反し、口唇部は短く立ち上がる。外面はロクロナデ調整で、内面はロクロナデ調整ののちヘラナデ調整を施している。図示した遺物の特徴から、本遺構は８世紀後半～９世紀初頭頃の年代観が考えられる。

【SD21026】（第６・31・32図）

Ⅰ区中央部に位置する東西溝である。SI21021、SD21022と重複関係にあり、SI21021より新しく、SD21022より古い。本遺構の西側は調査区外へさらに延びるが、調査区内での総検出長は16.80ｍで、主軸方位は真北から84°東へ傾く。上幅1.00ｍ前後、底面幅は0.49ｍ前後であり、断面形状は下位ではU字状であるが、中位からはやや外側へと開く。底面は比較的平坦であるが緩やかに東側へ傾斜している。堆積土は６層に分層でき、すべて人為堆積である。

遺物は第32図に図示した６の灰釉陶器皿、７の土師器高台坏が出土している。６は灰釉陶器皿の口縁部片で、焼成時に内外面に自然釉が融着している。７は高台部のみ完存する。外面はロクロナデ調整を施し、底部に高台が貼り付く。内面はヘラミガキ調整ののち黒色処理を施す。図示した遺物の特徴から、本遺構は９世紀前半頃の年代観が考えられる。



第 31 図　SD21022・23・24・26 断面図

SD21022 南北セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト	しまり強い。粘性弱い。炭化物・焼土粒、褐色粘土粒～小ブロックを微量含む。
2	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色粘土粒を微量含む。
3	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色粘土粒～小ブロックをやや多く含む。
4	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。褐色粘土粒～小ブロックをやや多く含む。
5	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。褐色粘土小ブロックを微量含む。
6	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。褐色粘土小ブロックを多量に含む。
7	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。炭化物・焼土粒を微量、褐色粘土小ブロックをやや多く含む。
8	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。粘性強い。炭化物・焼土粒を微量、褐色粘土小ブロックを極めて多量に含む。

SD21023 東西セクション

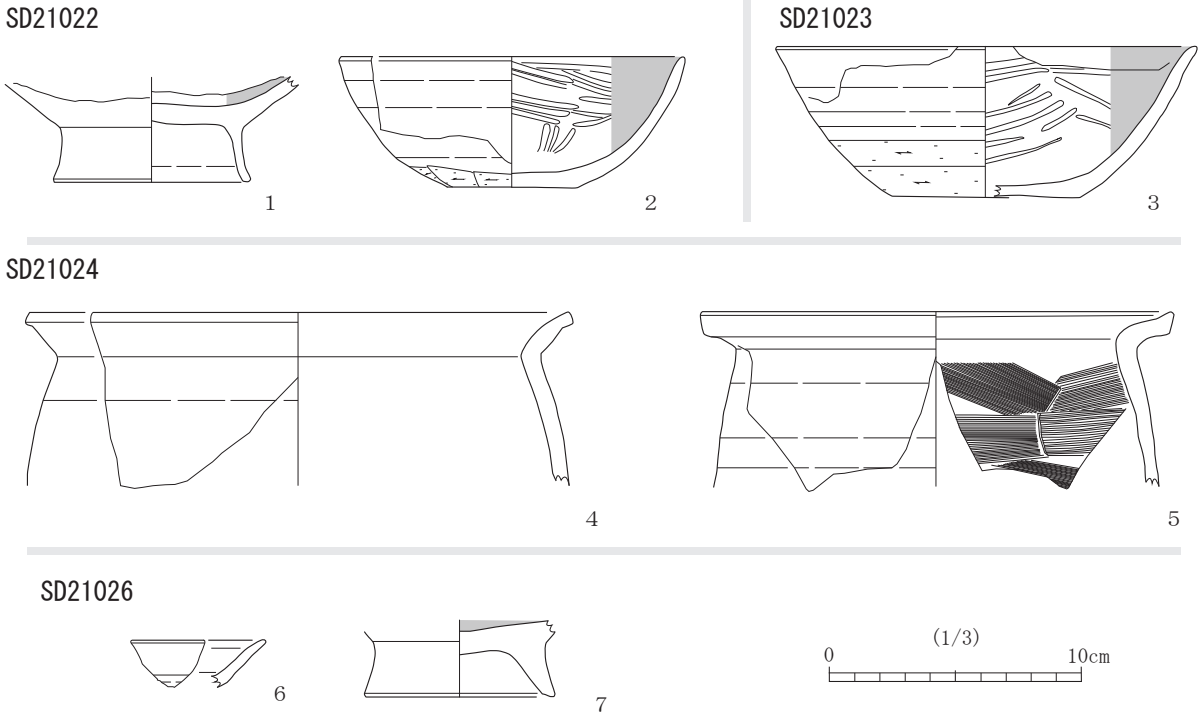
No.	土色		土質	備　　考
1	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。炭化物を微量、褐色粘土粒～小ブロックを少量含む。
2	赤褐色	2.5YR4/6	焼土	しまり弱い。粘性やや強い。炭化物を微量、褐色粘土小ブロックを多量に含む。

SD21024 南北セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。
2	暗褐色	10YR3/4	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。褐色シルト粒を少量含む。

SD21026 南北セクション

No.	土色		土質	備　　考
1	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト	しまり強い。粘性弱い。炭化物・焼土粒を少量、褐色粘土小ブロックを微量含む。酸化鉄を斑状に含む。
2	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。炭化物、褐色粘土小ブロックを微量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。炭化物・焼土粒を微量、褐色粘土小ブロックを多量、にぶい黄褐色粘土粒を少量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。炭化物･焼土粒、にぶい黄褐色粘土粒を微量、褐色粘土小ブロックを多量に含む。
5	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。炭化物を微量、褐色粘土小ブロックを多量に含む。
6	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	しまりやや強い。粘性弱い。



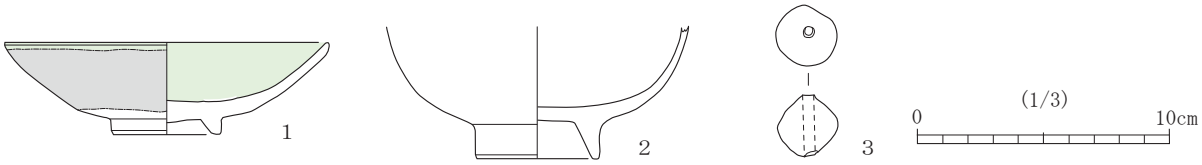
第 32 図　SD21022・23・24・26 出土遺物

SD21022・23・24・26 遺物観察表

No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量（cm）			写真	登録
							口径	底径	器高	図版	No.
1	SD21022・上層	土師器	高台坏	ロクロナデ、高台貼付	ヘラミガキ・黒色処理	高台 1/4	－	7.9	(4.2)	4-8	29
2	SD21022	土師器	坏	ロクロナデのちヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁 1/8、底部 1/2	13.8	5.2	5.2	4-4	28
3	SD21023	土師器	坏	ロクロナデのちヘラケズリ、底部回転糸切のちナデ	ヘラミガキ・黒色処理 磨滅顕著	口縁 1/12、底部 1/2	16.8	7.5	6.0		27
4	SD21024	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁 1/6	21.7	－	(6.8)		23
5	SD21024	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラナデ	口縁 1/6	18.8	－	(7.0)		24
6	SD21026・上層	灰釉陶器	皿	ロクロナデ、自然釉付着	ロクロナデ、自然釉付着	口縁 1/10	(10.8)	－	(1.9)	3-2	4
7	SD21026	土師器	高台坏	ロクロナデ、高台貼付	ヘラミガキ・黒色処理	高台完存	－	7.6	(3.0)		32

第５表　溝跡属性表

遺構名	検出長（m）	断面形	規模（m）			方向	堆積土	出土遺物	備考
			上幅（m）	下幅（m）	深さ（m）				
SD21001	13.25	北側に段が付く不定形	1.20	0.20～1.15	0.49	真北方向に直交する東西軸	人為堆積、自然堆積	灰釉陶器椀、土師器双耳坏、ロクロ成形土師器椀・鉢・甕、須恵器坏・甕、金属製品（鉄鏃）	新旧２時期有 SK21005 より古 SD21002 の新段階と同時期の可能性有
SD21002	30.50	片側に段が付く不定形	1.80～2.00	0.60～1.15	0.67～0.97	真北（Ｌ字状）	人為堆積、自然堆積	ロクロ成形土師器坏、須恵器坏・蓋・長頸瓶・円面硯、金属製品（鉄鏃）	Ｌ字状の区画溝 新旧２時期有 SE21004 より古、SI21010 より新、新段階は SD21001 と同時期の可能性有
SD21022	14.80	逆台形	1.50	0.40	0.50	N-62-E	人為堆積	ロクロ成形土師器高台坏・坏	SD21023 より古 SI21021、SD21026 より新
SD21023	20.08	U 字状	0.48	0.25	0.26	N-20-W	人為堆積	ロクロ成形土師器坏	SI21021、SD21022・21024 より新
SD21024	16.80	箱状	0.50	0.35	0.16	N-80-E	人為堆積	ロクロ成形土師器甕	SD21023 より古 SI21021 より新
SD21026	16.80	U 字状	1.00	0.49	0.53	N-84-E	人為堆積	灰釉陶器皿、ロクロ成形土師器高台坏	SD21022 より古 SI21021 より新



第 33 図　その他の遺構出土遺物

その他の遺構遺物観察表

No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量（cm）			写真図版	登録No.
							口径	底径	器高		
1	Ⅰ区・近世土坑	磁器	皿	ロクロナデ、体部下半カンナケズリ 体部に灰釉、口縁付近に青磁釉 肥前	ロクロナデ 蛇の目釉ハギ・青磁釉	口縁 4/5、底部完存	12.9	4.3	3.7		82
2	Ⅰ区・近世土坑	近世陶器	碗	削出高台 高台畳付を除き全面に灰釉 瀬戸美濃焼	灰釉	高台完存、体部 1/3	－	5.0	(5.3)		83
3	P21012	土製品	土玉	長さ 2.5 cm、最大幅 2.4 cm、重量 13.3 g		完存					78

ｅ．その他の遺構出土遺物

【近世土坑】（第６・33 図）

Ⅰ区中央西寄りに位置する。SD21026 と重複関係にあり、これより新しい。平面形状は不整楕円形を呈し、規模は長軸 3.7 m、短軸 3.0 mを測る。平面形状の確認に留めたため、断面形状や深さ、堆積状況は不明である。

遺物は第 33 図１に図示した磁器皿、２の近世陶器埦が出土した。１は肥前産と考えられ、外面がロクロナデ調整で、底部に高台が貼り付く。器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開く。体部に灰釉を施釉し、体部下半はカンナケズリ調整を施す。また、口縁付近に青磁釉を施釉している。内面は青磁釉を施釉し、内底部に蛇の目釉ハギを施す。２は瀬戸美濃焼と考えられ、器形は底部から体部上半に向かって内弯する。底部は高台を削り出し、高台畳付を除いた全面に灰釉を施釉する。内面も全面灰釉を施す。遺物の特徴から、本遺構は 17 世紀後半～ 18 世紀代の年代観が考えられる。

【P21012】（第７・33 図）

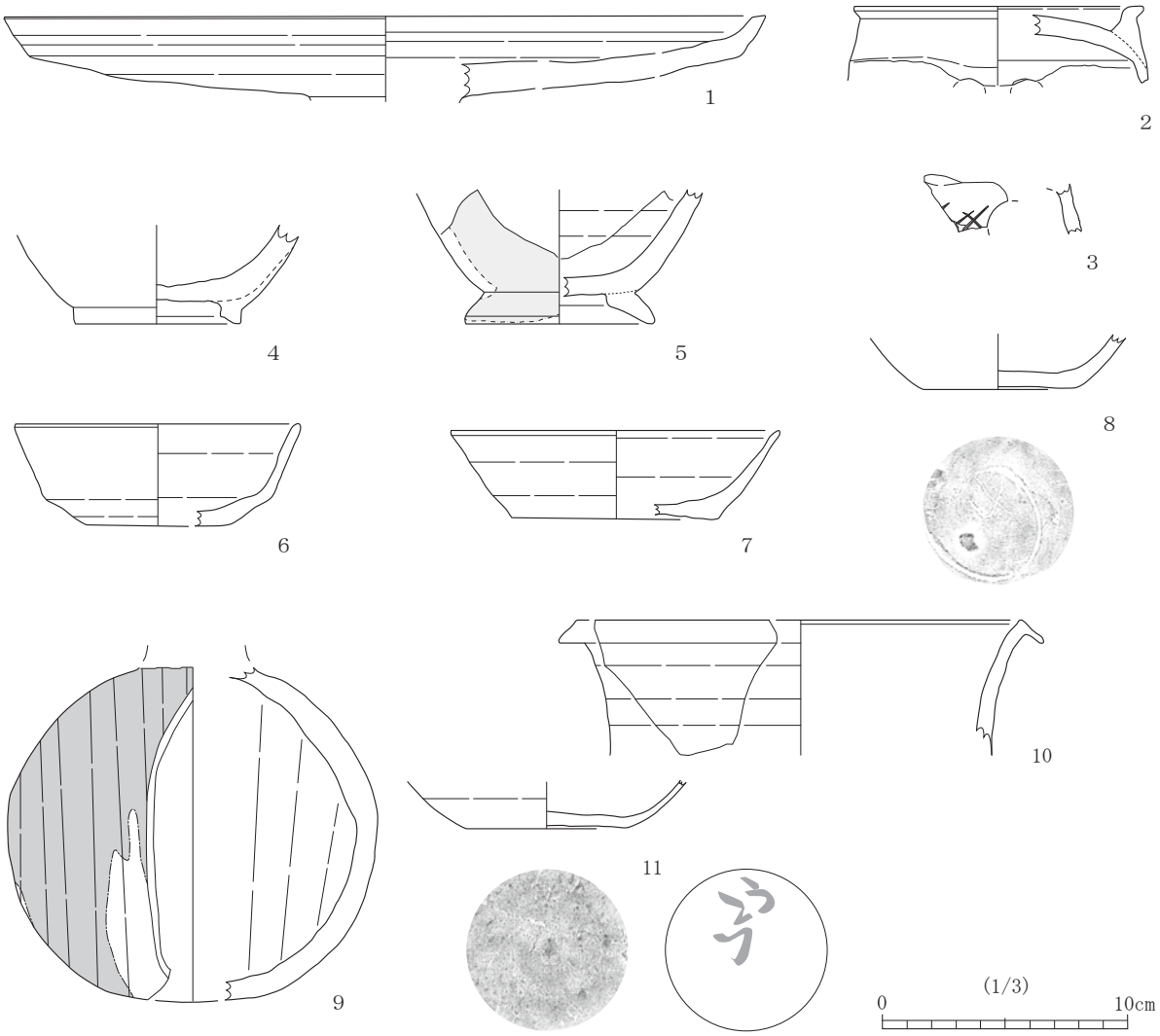
Ⅱ区中央の調査区北壁付近に位置する。他の遺構との重複関係はなく、平面形状は不整円形で規模は直径 30 cmを測る。平面形状の確認に留めたため、断面形状や深さ、堆積状況は不明である。

遺物は第 33 図３に図示した土製品の土玉のみである。完形で、長さは 2.5 cm、最大幅は 2.4 cm、重量は 13.3 g である。他に年代の推定できる資料が出土していないため、本遺構の年代は不明である。

ｆ．遺構外出土遺物（第 34・35 図）

前述の遺構出土遺物のほか、掘削時や精査時、そして遺物包含層の掘り下げ時にも土師器・須恵器が多数出土しているほか、赤焼土器や弥生土器も少量出土している。また、図示はしていないが、原遺跡で初めて渥美窯跡群で生産されたと考えられる中世陶器の甕胴部片１点が出土している。以下に特記すべき点について述べる。

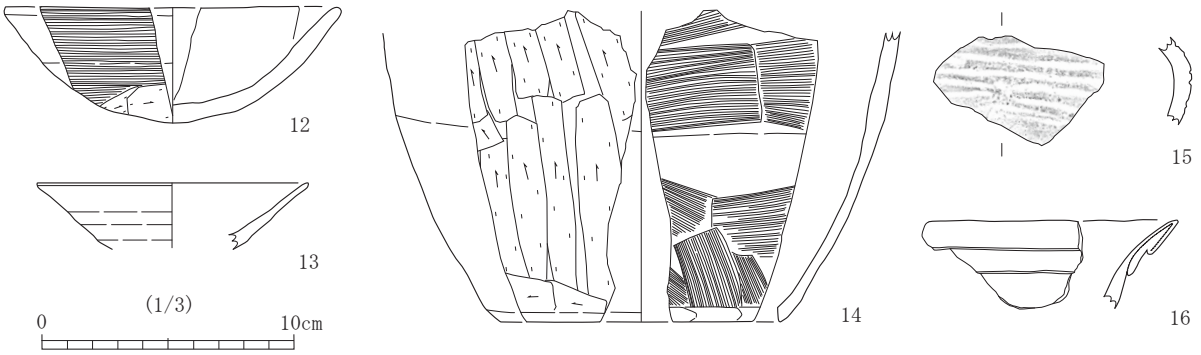
第 34 図１に図示した須恵器高盤、２・３の円面硯、４・５の長頸瓶、６～８の坏、９の長頸瓶、10 の甕、11 の墨書土器、第 35 図 12 の土師器坏、13 の赤焼土器坏、14 の土師器甑、15 の弥生土器鉢、16 の土師器壺が出土した。１の高盤は接合関係のない同一個体を復元図化したもので、皿部外面下半まで



第 34 図　遺構外出土遺物①

遺構外出土遺物観察表①

No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量（cm）			写真図版	登録No.
							口径	底径	器高		
1	Ⅰ区・南西側掘り下げ	須恵器	高盤	皿部下半までは平行タタキのちヘラナデ・口縁ヨコナデ 接合関係の無い同一個体３破片で復元図化	ロクロナデ	口縁・体部破片	(31.0)	－	(3.5)		73
2	Ⅰ区・包含層掘り下げ	須恵器	円面硯	ロクロナデ、堤部貼付、脚部に円形の透孔、硯部に自然釉・研磨	ナデ	硯部 1/3	11.8	－	(3.2)	3-4	50
3	Ⅱ区・精査	須恵器	円面硯	ロクロナデ 脚部に円形の透孔、斜状の線刻４条	ロクロナデ	脚部破片	－	－	(2.1)		80
4	Ⅰ区・包含層掘り下げ	須恵器	長頸瓶	ロクロナデ、高台は胴部下半から貼付か	ロクロナデ 内底面中央に自然釉付着	高台完存	－	6.8	(4.0)		69
5	Ⅱ区・精査	須恵器	長頸瓶	ロクロナデ、高台貼付 降灰による自然釉	ロクロナデ 内底面中央に自然釉付着	高台 1/2	－	7.7	(5.4)		65
6	Ⅰ区・包含層掘り下げ	須恵器	坏	ロクロナデ、底部ヘラギリ無調整	ロクロナデ	口縁 1/2、底部 1/3	11.6	5.8	4.2		56
7	Ⅱ区・精査	須恵器	坏	ロクロナデ、底部ヘラギリ無調整	ロクロナデ	口縁・底部 1/5	13.3	8.3	3.6		68
8	Ⅱ区・精査	須恵器	坏	ロクロナデ、底部回転糸切未調整 底部にヘラ描き	ロクロナデ	底部完存	－	6.0	(2.2)		66
9	Ⅰ区北側・包含層掘り下げ	須恵器	長頸瓶	ロクロナデ、自然釉付着 胴部最大径 15.0 cm 猿投窯跡群	ロクロナデ	胴部 1/3	－	－	(14.5)		18
10	Ⅱ区・精査	須恵器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁 1/8	19.8	－	(5.5)		70
11	Ⅰ区・包含層掘り下げ	須恵器	坏	ロクロナデ、底部回転ヘラギリ・ナデ 墨書「弓」か	ロクロナデ	底部完存	－	6.5	(1.9)		20



第 35 図　遺構外出土遺物②

遺構外出土遺物観察表②

No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量（cm）			写真図版	登録No.
							口径	底径	器高		
12	Ⅰ区・南側掘削時	土師器	坏	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ	口縁 1/8、体部 1/6	13.4	－	4.6		71
13	Ⅰ区・包含層掘り下げ	赤焼土器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁 1/12	(10.9)	－	(2.6)		81
14	Ⅰ区・南東側掘り下げ	土師器	甑	ヘラケズリ・ナデ	ヘラナデ・ヘラケズリ	蒸気孔部・胴部 1/8	－	11.0	(12.4)		72
15	Ⅰ区・南側掘削時	弥生土器	鉢	変形工字文	ヨコナデ	体部破片	－	－	(2.6)		85
16	Ⅱ区・精査	土師器	壺	ヨコナデ　口縁部は二重折り返し	ヨコナデ	口縁破片	－	－	(3.5)		84

平行タタキ調整ののちヘラナデ調整を施す。また、皿部と脚部の接合部分がわずかに残る。２の円面硯は、硯面部に外堤部を貼り付けている。硯面部は自然釉が融着しているものの、よく研磨されて平滑である。脚部に円形透孔が認められる。３は円面硯の脚部片で、脚部に円形透孔が認められる。９はフラスコ形長頸瓶で、胎土の質や色調から猿投窯跡群の所産と考えられる。胴部最大径は 15.0 ㎝を測り、外面の広範囲に自然釉がみられる。11 は回転ヘラ切りののちナデ調整を施す。底部に微かに墨書が認められる。12 は非ロクロ成形で、底部は丸底を呈する。器形は底部から口縁部に向かって内弯気味に開く。外面は体部中位に弱い稜をもち、体部下半にヘラケズリ調整を施す。内面はナデ調整である。内面に黒色処理が認められないものの、器形から６世紀末葉～７世紀前半頃の年代観と考えられる。13 はロクロ成形で、器面は赤褐色を呈し、器形は体部下半から口縁部に向かって直線的に開く。14 は甑の胴部下半で、外面はナデ調整ののちヘラケズリ調整を施す。内面はヘラナデ調整で蒸気孔部にヘラケズリ調整を施す。15 は鉢の体部片で、外面に変形工字文が施文されている。16 は頸部から口縁部に向かってやや強く外反し、口縁部は二重折り返しによる段が付いている。

第Ⅳ章　考　察

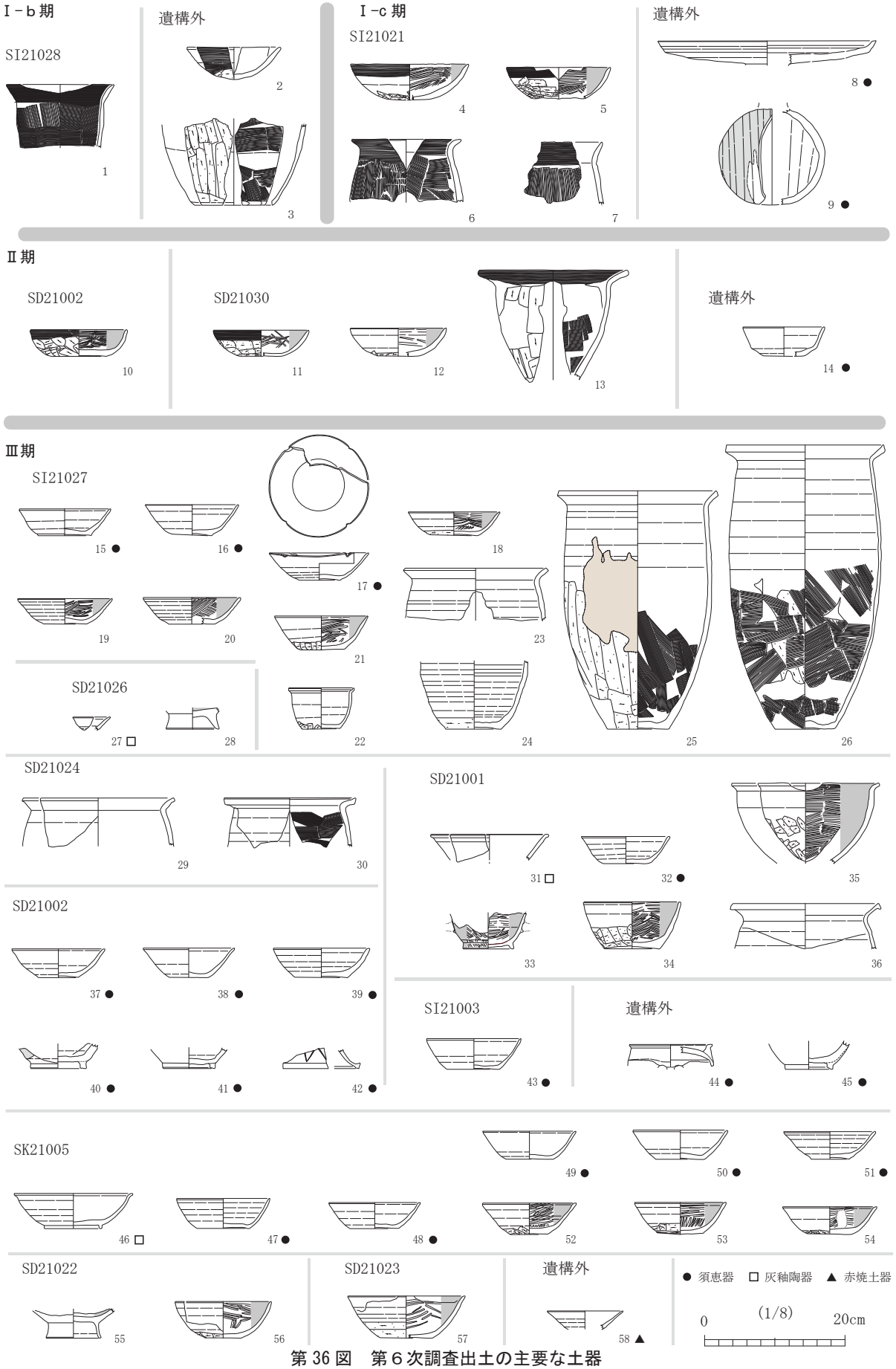
１．遺物について（第 36 図）

今次調査で発見された遺物について、土器を中心として概要を記述する。なお、古墳時代後期から奈良時代にかけての土器の年代観については辻秀人氏を研究代表者とする広域編年（辻編 2007）のうち、村田晃一氏が行った宮城県中・南部での研究成果（村田 2007・以下、「村田Ａ編年」と表記）、平安時代については多賀城､及び周辺遺跡も視野に入れた村田晃一氏による編年（村田 1994･以下､「村田Ｂ編年」と表記）を主に参照し、出土遺物の特徴について述べる。また出土遺物については、これまで原遺跡の画期として用いているⅠ～Ⅲ期に大別し､Ⅰ期についてはａ～ｃの小期を設定している。

今次調査ではⅠ－ａ期に該当する遺物の出土は無い。Ⅰ－ｂ期では１の SI21028 出土資料のほか、参考資料として遺構外資料である２･３を図示した。１の土師器甕は頸部が弱く屈曲するものであり、類似資料が５次調査 SI02 にある。同様に２の土師器坏も５次調査 SI07 にある。１に見える器形・調整の特徴は栗囲式期のうちでも古い様相を呈しており、村田Ａ編年の２・３段階に位置付けられ、６世紀末葉～７世紀前半頃と考えられる。Ⅰ－ｃ期では SI21021 出土資料のほか、参考資料として遺構外資料である８・９を図示した。６の土師器甕の口縁は短いながらも強く屈曲し、胴部下半部で最大径を測るとみられるものである。なお、SI21021 は５次調査において一部を調査（SI19）しており、そこでは長方形の透孔がある土師器高坏なども出土している。これらの特徴は栗囲式期のうちでもやや新しい様相を呈しており、村田Ａ編年の４・５段階に位置付けられ、７世紀後半～８世紀初頭頃の年代観が考えられる。８の須恵器高盤は仙台市郡山遺跡（仙台市教育委員会 2004）で類例がみられるほか、５次調査 SK09 からは脚部が出土している。また９の須恵器フラスコ形長頸瓶は猿投窯跡群の製品であり、胴部が球形であることから､『愛知県史』に所収されている編年（愛知県史編さん委員会 2015）のⅢ期に位置付けられ、７世紀後半～８世紀初頭頃の年代観が考えられる。

Ⅱ期では SD21002、SI21030 出土資料が相当するが、遺物量は少ない。10 の土師器坏は類例を多賀城市山王遺跡 SD2124 出土資料でみることができる（宮城県教育委員会 1994)。SI21030 出土資料についても山王遺跡 SD677 出土資料に供伴関係の類例を求めることができる（宮城県教育委員会 1997)。これらは器形的な特徴から村田Ａ編年の７段階に位置付けられ、８世紀半ば～後半頃と考えられる。

Ⅲ期では SI21027・03、SK21005、SD21001・02・22・23・24・26 出土資料が相当する。今次調査では初めて 27・31・46 の灰釉陶器が出土しているが、これらはいずれもハケ塗りであり、高台の形状が分かる 46 は角高台であることから黒笹 14 号窯式に含まれ（多賀城跡調査研究所 2020)、９世紀前半頃の年代観が与えられる。須恵器は器高がやや高く、底部から口縁部に向かって直線的に開くタイプ（16・38・43)、口径に比して底径が比較的大きいタイプ（15・32・39・47・48）など８世紀末葉～９世紀前半頃の年代観が考えられている村田Ｂ編年１・２群の特徴を具備するものが主体を占めるが、51 は口径に比べて底径が小型化するものであり９世紀後半頃と考えられる。土師器はロクロ成形が主体となり、坏では①器高が低く、口径に比して底径が大きいもの（18 ～ 20・54)、②器高がやや高く、①と比べて口径に底径の比する割合がやや小さくなるもの（52・53)、③器高が高く、底径が小さくなるもの（56・57）など村田Ｂ編年１～３群の特徴を備えるものが多くみられる。なお、特徴的な資料としては 33 の土師器双耳坏、17 の須恵器坏の口縁を打ち欠いて輪花状としたものがある。

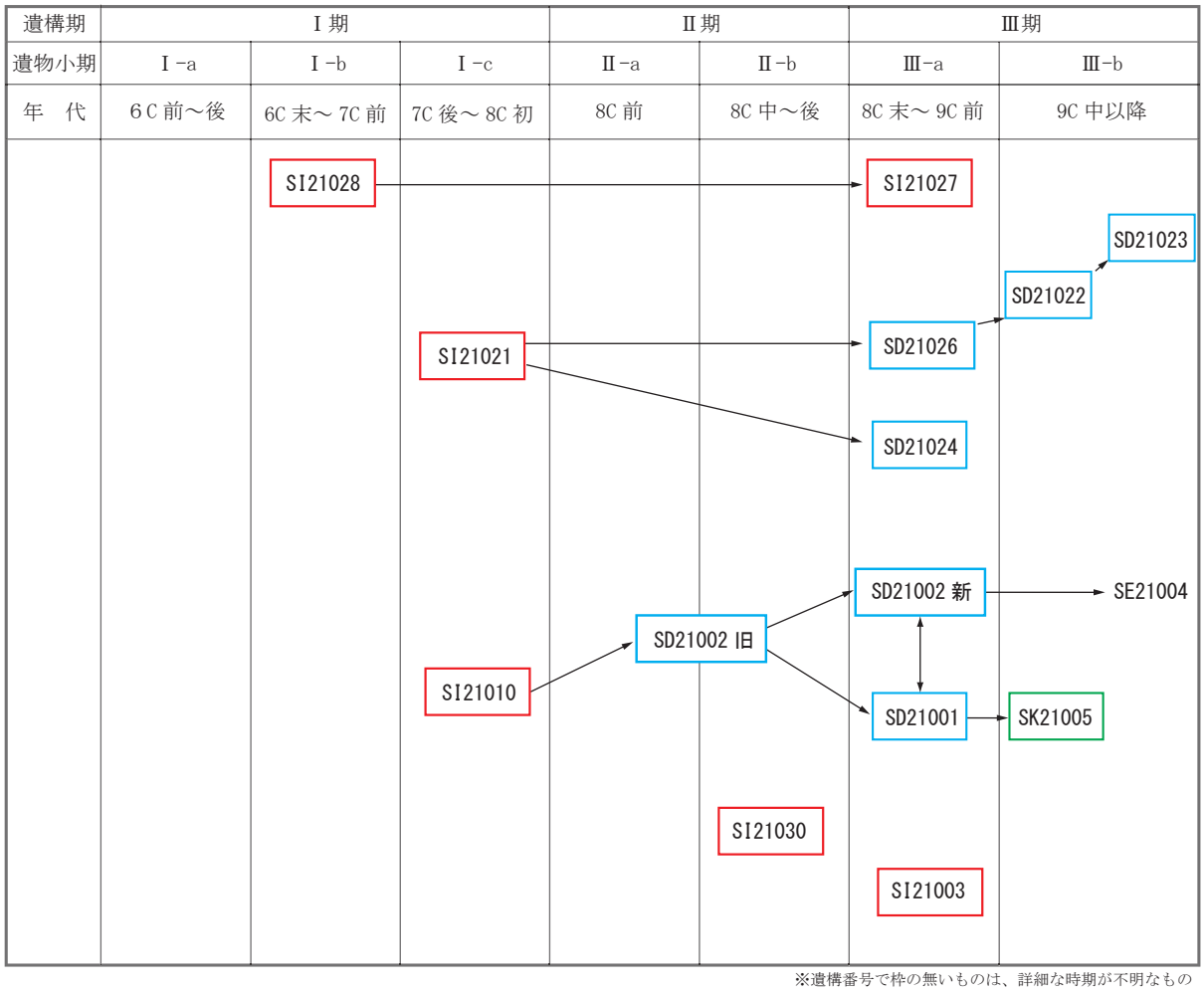


第 36 図　第６次調査出土の主要な土器

２．遺構の変遷について（第 37 図）

ここでは第６次調査で確認された主要遺構の変遷と、これまで隣接、及び周辺で実施してきた第３・５次調査で関係する遺構について記述する。

前項の出土土器の年代観、そして各遺構の重複関係をもとに整理したものが第 37 図である。以下に各期の遺構についてみていく。



※遺構番号で枠の無いものは、詳細な時期が不明なもの

第 37 図　第 6 次調査主要遺構の重複関係図

Ⅰ期（第 38 図）

Ⅰ期の遺構群は、これまでの調査成果により６世紀前半～後半の時期をａ小期（Ⅰ－ａ期。以下の各小期も同様に表記）、６世紀末葉～７世紀前半をｂ小期、７世紀後半～８世紀初頭をｃ小期とした。今次調査ではⅠ－ａ期に属する遺構は確認されず、Ⅰ－ｂ期についてもⅠ区で確認された SI21028 のみである。第３次、ならびに第５次調査Ⅰ区では当該期の遺構が濃密に存在することから、集落の外縁付近となっていた可能性が高い。Ⅰ－ｃ期では超大型竪穴建物であるⅠ区の SI21021、Ⅱ区の SI21010 が存在し、第５次調査Ⅱ区の成果と併せ考えると当該期の集落の中心は調査地付近に想定することも可能である。

Ⅱ期（第 39 図）

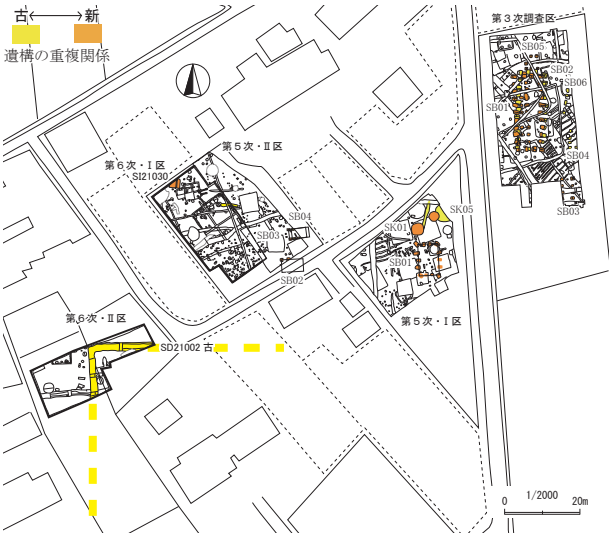
Ⅱ期の遺構群についても、これまでの調査成果により８世紀前半をａ小期、８世紀半ばから後半を

ｂ小期とした。Ⅱ期を代表する遺構としては第３次調査の大型建物であるSB01・02をはじめとした掘立柱建物群がある。これらの建物群の最大の特徴は、建物の主軸方位が真北方向を強く意識してつくられた点にある。今次調査では掘立柱建物群は確認できなかったが、Ⅱ区で発見したＬ字に曲がるSD21002旧段階が当該期の遺構とみられる。この溝の下位からは遺物は出土していないものの、前述した掘立柱建物群と同様に真北方向を強く意識してつくられたことが明らかであり、現時点では旧段階についてはⅡ－ａ期範疇での開削と捉えておく。なお、今次調査で確認した部分は溝の平面形状から何らかの区画の北西隅とみられるが､規模も大きく、さらに掘り直しが行われていることも加味すれば、溝は遺跡内でも重要性が高い施設を取り囲んでいた可能性が考慮できる。溝によって区画された範囲や、内部の様相についての解明が、今後の調査計画の中では不可欠となろう。

Ⅲ期（第40図）

Ⅲ期の遺構群については、今次調査でⅡ区を中心に当該期の遺物が多く出土したことから８世紀末葉～９世紀前半をａ小期、９世紀半ば以降をｂ小期とした。Ⅲ－ａ期の遺構にはSD21002新段階・21001の区画性が高い溝のほか、SI21003・SI21027の竪穴建物などがある。特にSD21002新段階は、旧段階の埋没が進んだ状態から掘り直しが行われており、また覆土内や周辺からは灰釉陶器や雁又式・平根式といった鉄鏃、さらにはSI21003からは小型の鉄刀が完形で出土するなど、当該期においても引き続き中心的な施設が区画内部に存在していた可能性が考慮される。Ⅲ－ｂ期になるとこれまでの調査は遺構・遺物は大きく減少傾向となるが、今次調査においても同様の傾向がみられることから駅家としての機能は他所への移転、あるいは衰退していったものと考えられる。

第38図　Ⅰ期遺構群



第39図　Ⅱ期遺構群

第40図　Ⅲ期遺構群

第Ⅴ章　総　括

1．原遺跡は宮城県中央部南寄りの岩沼市南長谷字原・中原・上原・北上・角方地内に所在する。遺跡は南側を東流する阿武隈川によって形成された自然堤防上に立地している。

2．今回の発掘調査は重要遺跡の範囲・内容確認調査として実施した。調査区は第５次調査地の西側であり、発掘調査面積は755㎡（Ⅰ区439㎡、Ⅱ区316㎡）である。

3．遺跡が所在する地域は、古代においては東山道と、茨城県から福島県・宮城県南部の太平洋側に設置された「海道」の合流・分岐地であることから、これまでに発見された官衙関連の遺構・遺物は『延喜式』に記載される玉前駅家、あるいは多賀城跡から出土した木簡によって存在が明らかとなった玉前剡に関わるものとみられる。

4．確認した遺構は古代の竪穴建物跡６棟、大型土坑１基、溝跡10条、土坑・柱穴多数のほか、時期不明の井戸跡１基、及び近世土坑１基である。

5．竪穴建物跡のうち、SI21021は東西9.6ｍ、南北9.8ｍの規模をもち、７世紀代の竪穴建物跡としては宮城県内でも最大規模のものである。

6．出土した遺物は弥生時代の土器、飛鳥時代から平安時代にかけての土師器・須恵器・灰釉陶器・金属製品・土製品・石製品である。このうち主体となるのは８世紀末葉から９世紀半ば頃にかけての土師器・須恵器である。なお、灰釉陶器はこれまでの原遺跡、及び市内各遺跡の発掘調査において初めての出土となる。

7．出土した遺物には在地産の土器と遠隔地から搬入されたものがある。他地域から搬入された土器のうち、SK21005から出土した灰釉陶器埦、SD21001から出土した灰釉陶器埦、SD21026から出土した灰釉陶器皿、遺物包含層の掘り下げ時に出土した須恵器フラスコ形長頸瓶は猿投窯跡群の製品と考えられる。

8．鉄製品にはSI21003から出土した小型の鉄刀、SD21001から出土した雁又式鉄鏃、SD21002から出土した平根式鉄鏃などがあり、遺跡の性格解明の糸口となりうる資料である。

9．発見された遺構のうち、平面形状でほぼ直角に曲がることが確認され、８世紀代につくられたと考えられるSD21002は、埋没過程で同位置での掘り直しが認められること、溝の主軸方位がほぼ真北であることから、官衙中枢施設を区画する溝のコーナー部分とみられる。

【引用・参考文献】

愛知県史編さん委員会　2015 『愛知県史　別編　窯業１　古代　猿投系』
会津若松市　2000 『会津若松市史 14　文化編１陶磁器　会津のやきもの〔須恵器から陶磁器まで〕』
今泉隆雄　2018 「第二部第五章 古代南奥の地域的性格」『古代国家の地方支配と東北』吉川弘文館
岩沼市　1992 『岩沼市土地分類調査（細部調査）報告書・現況調査編』
岩沼市教育委員会　2018a 『原遺跡第２次調査概要報告書』 岩沼市文化財調査報告書第 19 集
岩沼市教育委員会　2018b 『下野郷館跡』 岩沼市文化財調査報告書第 20 集
岩沼市教育委員会　2019a 『原遺跡第３次調査概要報告書』 岩沼市文化財調査報告書第 21 集
岩沼市教育委員会　2019b 『市内遺跡発掘調査報告書１』 岩沼市文化財調査報告書第 22 集
岩沼市教育委員会　2019c 『熊野遺跡第１・２次調査報告書』 岩沼市文化財調査報告書第 23 集
岩沼市教育委員会　2020a 『原遺跡第４次調査概要報告書』 岩沼市文化財調査報告書第 24 集
岩沼市教育委員会　2020b 『市内遺跡発掘調査報告書２』 岩沼市文化財調査報告書第 25 集
岩沼市教育委員会　2021a 『原遺跡第１次調査ほか』 岩沼市文化財調査報告書第 26 集
岩沼市教育委員会　2021b 『原遺跡第５次調査概要報告書』 岩沼市文化財調査報告書第 27 集
岩沼市教育委員会　2021c 『市内遺跡発掘調査報告書３』 岩沼市文化財調査報告書第 28 集
岩沼市史編纂委員会　2015 『岩沼市史』第４巻　資料編Ⅰ　考古
岩沼市史編纂委員会　2018 『岩沼市史』第１巻　通史編Ⅰ　原始・古代・中世
近江俊秀　2006 『古代国家と道路 考古学からの検証』 青木書店
川又隆央　2021 「原遺跡（宮城県岩沼市）の調査」『古代交通研究会第 21 回大会』資料集
九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年』資料集
齊藤孝正　1994 「Ⅳ．生産地　１　東海地方の施釉陶器生産―猿投窯を中心に―」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東３　施釉陶器―』古代の土器研究会第３回シンポジウム
佐藤敏幸・大久保弥生　2017 「陸奥における古墳時代後期から奈良時代の高坏（１）－宮城県のスカシ付高坏を中心に－」『宮城考古学』第 19 号　宮城県考古学会
白鳥良一　2015 「特論１岩沼市内の東山道と玉前駅・剗（関）『岩沼市史　第４巻　資料編Ⅰ　考古』
白鳥良一　2018 「第八章　四 東山道・東海道駅路と岩沼」『岩沼市史　第１巻　通史編Ⅰ　原始・古代・中世』
仙台市教育委員会　2004『郡山遺跡 24』 仙台市文化財調査報告書第 269 集
武田裕光・川又隆央　2020 「岩沼市小川地区で採集した中世陶器について」『宮城考古学第 22 号』宮城県考古学会
舘野和己・出田和久編　2016 『日本古代の交通・交流・情報』１～３　吉川弘文館
辻　秀人編　2007 『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』 東北学院大学文学部
津野　仁　2011 『日本古代の武器・武具と軍事』 吉川弘文館
東北古代土器研究会　2005 『研究報告２ 東北古代土器集成－古墳後期～奈良・集落編〈陸奥〉－』
東北古代土器研究会　2008 『研究報告３ 東北古代土器集成－須恵器・窯跡編〈陸奥〉－』
永田英明　2015 「古代東北の内陸水運－最上川・阿武隈川流域を中心に－」『日本古代の運河と水上交通』 八木書店
永田英明　2018 「第八章　三 玉前剗・玉前駅と阿武隈川」『岩沼市史　第１巻　通史編Ⅰ　原始・古代・中世』
古川一明　2018 「東北・関東地方の古代の大型土坑について」『東北歴史博物館紀要 19』 東北歴史博物館
宮城県教育委員会　1993 『北原遺跡』宮城県文化財調査報告書第 159 集
宮城県教育委員会　1994 『山王遺跡八幡地区の調査』宮城県文化財調査報告書第 162 集
宮城県教育委員会　1996 『山王遺跡Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第 170 集
宮城県教育委員会　1996 『山王遺跡Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第 171 集
宮城県教育委員会　1997 『山王遺跡Ⅴ－第１分冊（八幡地区）－』宮城県文化財調査報告書第 174 集
宮城県教育委員会　2018 『山王遺跡Ⅶ』宮城県文化財調査報告書第 246 集
宮城県多賀城跡調査研究所　1985 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984 多賀城跡』
宮城県多賀城跡調査研究所　2013 『多賀城跡木簡Ⅱ』宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅲ
宮城県多賀城跡調査研究所　2020 『多賀城施釉陶磁器』宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅴ
村田晃一　1994 「土器からみた官衙の終末－東北地方の場合－」『古代官衙の終末をめぐる諸問題　第１分冊問題提起・各地方の概要』東日本埋蔵文化財研究会
村田晃一　2005 「７世紀における陸奥北辺の様相－宮城県域を中心として－」『日本考古学協会 2005 年度福島大会シンポジウム資料集』 日本考古学協会 2005 年度福島大会実行委員会
村田晃一　2007 「Ⅴ．宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
村田晃一　2018 「陸奥中部における陶硯の生産と消費 (1)」『宮城考古学』第 20 号　宮城考古学会
柳澤和明　1994 「Ⅱ．全国の消費地　１　東北の施釉陶器―陸奥を中心に―」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東３　施釉陶器―』古代の土器研究会第３回シンポジウム

1　調査地点遠景（北側上空から）

2　Ⅰ区・Ⅱ区全景（南側上空から）

3　SI21021（西から）

4　SI21027・21028（西から）

5　SI21027 新カマド（西から）

写真図版2

1　SD21002（南から）

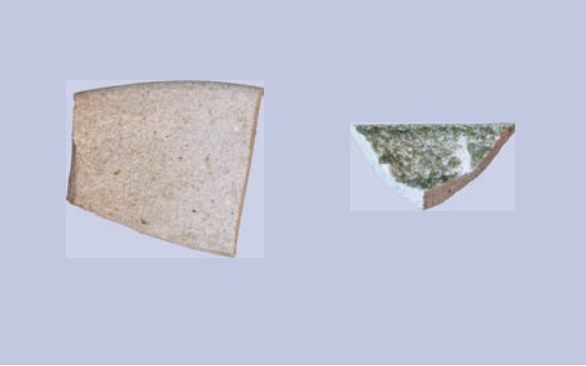
2　SD21002 コーナー部分（南東から）

3　SD21002 土層断面（北から）

4　SK21005 灰釉陶器・埦出土状況（東から）

5　SI21003 鉄刀出土状況（北から）

1　灰釉陶器・埦（第 24 図１）



2　灰釉陶器・埦（第 27 図１）、皿（第 32 図６）

3　須恵器・甕（第 27 図３）

4　須恵器・円面硯（第 34 図２）

5　須恵器・坏（第 27 図２）

6　須恵器・坏（第９図１）

7　須恵器・坏（第 24 図２）

8　須恵器・坏（第 24 図６）

9　須恵器・坏（第 16 図１）

10　須恵器・坏（第 16 図２）

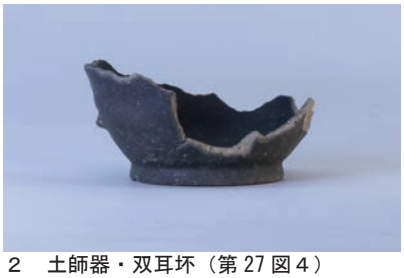
11　須恵器・輪花状坏（第 16 図３）

12　須恵器・長頸瓶（第 30 図７）

13　須恵器・円面硯（第 30 図５）

写真図版4

1　土師器・坏（第 30 図９）



2　土師器・双耳坏（第 27 図４）

3　土師器・埦（第 27 図５）

4　土師器・坏（第 32 図２）

9　土師器・甕（第 17 図９）

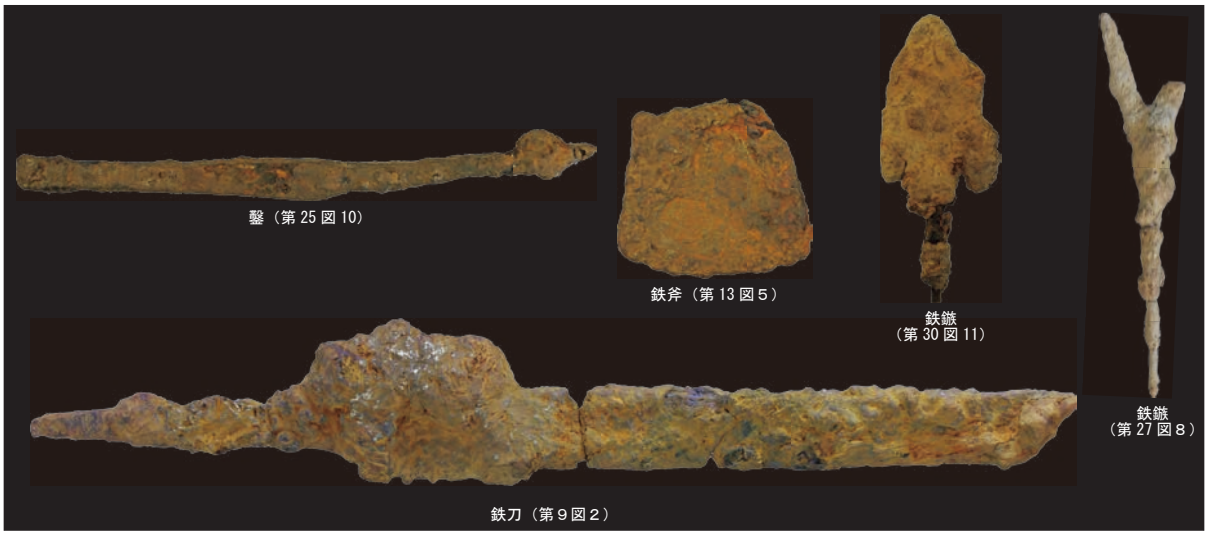
5　土師器・坏（第 16 図６）

6　土師器・小型甕（第 16 図８）

10　土師器・甕（第 17 図 10）

7　土師器・坏（第 16 図４）

8　土師器・高台坏（第 32 図１）



11　出土金属製品

報　告　書　抄　録

ふりがな	はらいせきだいろくじちょうさがいようほうこくしょ
書　　名	原遺跡第６次調査概要報告書
シリーズ名	岩沼市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 29 集
編集者名	川又隆央・武田裕光・熊谷篤
編集機関	岩沼市教育委員会
所 在 地	〒 989-2480　宮城県岩沼市桜１丁目６－20　　TEL(0223) － 23 － 0844
発行年月日	西暦 2022 年３月 31 日

所収遺跡（しょしゅういせき）	所在地（しょざいち）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
原遺跡（はらいせき）	岩沼市南長谷（いわぬましみなみはせ）字原（あざはら）	42111	15053	38.05.03	140.51.03	2021.07.06 ～ 2021.12.24	755 ㎡	範囲・内容確認調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原遺跡	官衙関連施設 集落跡	古墳時代 奈良・平安時代	掘立柱建物跡 柱列跡 竪穴建物跡 大型土坑 溝跡 土坑	灰釉陶器 須恵器 土師器 金属製品 土製品 石製品	官衙中枢施設を区画するとみられる大溝跡のコーナー部分を確認した。また、7世紀代としては宮城県内でも最大規模となる大型竪穴建物跡を発見した。遺物では灰釉陶器、小型の鉄刀、雁又式・平根式鉄鏃などが出土した。

要　約

原遺跡が所在する岩沼市南西部の玉崎地区は、『延喜式』に記載される「玉前駅家」、多賀城跡出土木簡にみられる「玉前剡」の比定地とされてきた。平成 28 年度の圃場整備事業に伴う第1次調査では、掘方規模の大きい柱穴跡、美濃地方で生産されたと考えられる須恵器円面硯が発見され、また翌 29 年度に実施した第2次調査では墨書土器や材木塀が発見されたことから、官衙関連施設の可能性が考えられるようになった。さらに平成 30 年度に実施した第 3 次調査では、主軸が真北方向となる桁行 10 間、梁行3間の長舎が同位置で建て替えが行われていることが判明し、建物の機能した時期は8世紀前半から後半と考えられるなどの成果が得られ、第4次調査では8世紀代～9世紀代の掘立柱建物跡を確認し、官衙中枢施設が移動している可能性が考えられるようになった。一方、第5次調査では、第3次調査で発見された長舎と一連の施設と考えられる掘立柱建物跡や9世紀代の区画溝を確認し、官衙中枢施設の広がりや中枢施設移動後の土地利用の在り方が明らかになった。

第6次調査は、第5次調査地の西側で実施した。確認した遺構は古代の竪穴建物跡6棟、大型土坑1基、溝跡 10 条、土坑・柱穴多数のほか、時期不明の井戸跡1基、近世土坑1基である。竪穴建物跡のうち、SI21021 は東西 9.6 m、南北 9.8 mの規模をもち、7世紀代の竪穴建物跡としては宮城県内でも最大規模である。遺物では8世紀末葉から9世紀半ば頃にかけての土師器・須恵器を主体として、猿投窯跡群の製品と考えられるフラスコ形長頸瓶や市内の遺跡で初となる灰釉陶器などが出土した。金属製品では SI21003 の床面で小型の鉄刀が出土したほか、溝跡からは雁又式・平根式鉄鏃など遺跡の性格解明の糸口となりうる資料を得られた。発見された遺構のうち、平面形状でほぼ直角に曲がることが確認され、8世紀代につくられたと考えられる SD21002 は、埋没過程で同位置での掘り直しが認められること、溝の主軸方位がほぼ真北であることから、官衙中枢施設を区画する溝のコーナー部分とみられる。

岩沼市文化財調査報告書第 29 集
原遺跡第６次調査概要報告書

令和４年（2022）３月
発行　岩沼市教育委員会
岩沼市桜１丁目６番 20 号
生涯学習課　TEL0223(23)0844
印刷　今野印刷株式会社
仙台市若林区六丁の目西町２番 10 号
TEL022(288)6123